
青春ゲーム

水姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春ゲーム

【Nコード】

N0670B

【作者名】

水姫

【あらすじ】

ゴーイングマイウェイな舞のライバルは、DS魔王な青海。その他ヒロイン溺愛美少女や、ヘタレ貴公子、赤髪ヤンキーなど。しかも担任は美形反面教師？個性的なキャラが繰り広げる青春コメディ

I

第1回戦 嫌敵手（前書き）

コメディー連載始めちゃいました！！ヒロインの学園生活を書いて
いきたいです。時々恋愛とかシリアス入るかもしれません。でも基
本ギャグー直線 アホヒロインですが、末長くよろしくお願いしま
すm（| |）m

第1回戦 嫌敵手

ライバルを好敵手って言うの、認めない。だって私はアイツの事大嫌い！

嫌敵手と書いて、ライバルと読みたい！！

第1話 犬と猿、竜と虎、私とアイツ

「舞、何点？」

『……………』

「…うわ、24点」

『かつ、勝手に見るな！』

哀れみたつぶりの目で、私を見るコイツの名は、【高梨 青海^{おつみ}】。ただでさえ仲悪いというのに、今回隣の席になってしまったクラスメイト。

そして今は、期末テスト（数学）の配布中……。

「英語も俺のほうが高かったし、今回も俺の勝ちだな」

『う、うるさい！数学は苦手なの！まだ私の得意な、社会と国語があるっ！』

「俺の得意な理科もあるしな」

『うがぁー！！』

……見ての通り、私達は超ウルトラハイテクスーパーハードヘビー級に仲悪い。事あるごとに、勝負・喧嘩が絶えず、周りを巻き込む事もしばしば。

ついでに今までの戦績は、199戦中15勝48敗136引き分け。敗北はほとんど勉強ですます……。

いいもんね、人間頭だけじゃないもの。

「罰ゲームなにがいいかな」
『うぐっ……』

実は200戦目という事で、負けたほうは、勝ったほうの言う事を聞く、などという特典つきなのだ。

何故、勉強苦手な私がこれを受けたかという、コイツの口車に乗せられたから。

『こんの腹黒め……』
「は？俺は見た目から中身までキレイだが」

このナルシストめー！！
何が何でも認めたくないけど、この高梨 青海は美形だ。しかも自覚あり（マジ死ねだし）。

「今日で全部返ってくるのか……。こりゃ、早めに罰考えとかなきゃだな」

『何勝った気にいるんだテメー！！』
「浅野さんうるさい」

ピシヤリ

数学インテリメガネ教師に一刀両断された。周りから『クスクス』という笑い声があがる。オイ、今笑ったやつ後で後悔させてやる。っていうか、コイツはマジで計算高い。毎回、授業中小声で私をおちよくって、私がそれに大声でリアクションとり、私『だけ』が怒られるのだ。

ならば、無視すればいいものの、性格上怒鳴ってしまふ。これはもう、どうしようもないので、諦めてる。

……うん。諦めてるよ？そりやもうスッパリと。キッパリと。サッパリと。でもさ、私だけ怒られるってどうよ？

だいたいなんでこんなやつがモテるんだ？顔か？顔さえよければ全てよしなのか！？チクショ―面食いめ！

あつ、違うか。多重人格のせいかな。営業スマイルのせいかな。先生の前では優等生、他クラスの前では好青年のせいかな。

だから怒られないのか、だからモテるのかコノヤロー！（クラスメイト・担任には性格バレてるけど）

恨めしげに隣を睨む。バチツツと目があうと、ヤツはニヤリと笑い（殺人鬼面じゃん）、

「怒られてやんの」

舌を出して、馬鹿にしたように（ってかしてるな）小声で言った。

『テメーのせいだろオオオオオー！！』

「浅野さん出てけ」

これって不平等じゃね？神様一発殴らせて。

第1回戦 嫌敵手（後書き）

キャラクターファイル

あざのまい
・浅野舞

年齢：14歳

身長：154cm

体重：38kg

長所：超人的な運動神経

短所：ミジンコ並な頭脳

座右の銘：明日は明日の風が吹く

この物語のヒロイン。誰がなんと言おうとヒロイン。

第2回戦 期末テスト

第2話 腹黒＋策士＋美形〓嫌なヤツ

『いい？せーので言っぞ。裏切るなよ？』

「へいへい」

『よ、よし。じゃあせーの！』

『216点！』 「472」

…… 負けたあー！！

え、いや勝てるとは思ってなかったけど、何この点差！？150以上じゃんっ！かなりショックなんだけど！

「まあ、予想通りだな」

『予想通り！？これを予想通りと！？』

失礼だなコイツッ。どれだけ自意識過剰！？何様なんだー！

「オレ様？」

『ウザア！つてか人の心読むな！！』

「天才なんで」

涼しい顔で言う青海。その美形顔、殴ってやろうか？

「そんなことより……」

『そんなこと！？』

ヒドイな泣くぞ。泣き叫ぶぞ。

「罰ゲーム、忘れてないだろうな？」

ニヤリ、と片方だけ口の端をあげる。明らかに微笑むって感じじゃない。

つてか、コイツの微笑み見たことあるっけ？黒い笑顔しか向けられたことねーや。

いやそれは置いといて、とにかく焦るぞ。コイツサドだから、絶対とんでもない事言ってくる。

よし、しらばっくれようッ！

『な、なんのこ』

言いきる前に、青海は携帯を取り出し、つきつけた。

《ピ、じゃあ、負けたほう罰ゲームな？ 罰ゲームって？ 勝ったほうの言う事きく。 いやよ、そんなの！ ……逃げるの？ 誰が逃げるかぁー！受けてたつー！ピピー》

「……………な？」

そう言つて、青海は携帯をポケットにしまった。

恐えええええええー！！

ボイスレコーダー！？いつのまに録ったんだよ！ここまで計算して
るつて、FBIかテメーは！！つてか携帯恐いな、マジ恐いよ。た
だの携帯できる電話と、侮つてたぜ！

『わ、わかつたよ。何をすればいいの？』

あつさり折れるわたし。プライドなんかくそくらえ

「そうだな…、高層マンション上から下までピンポンダッシュ制覇・
グランド裸逆立ちで150周・担任の机荒らし・校長の銅像にキス」

『……………は？』

「どれがいい？」

いや、どれがいいって……

『無理無理無理！！もう罰ゲームの次元じゃないからソレ！』

「無理じゃない。舞ならできるつて」

『できないから！アンタ私をなんだと思つてんの！？高層マンション
何階あると思つてんの！？裸で150周つて…逆立ちじゃなくて
もキツイわ！担任つて翔か？翔先生の事か？翔兄の机なんかとんで
もない物出てきそう見たいけど怖い！校長の銅像にキスなんて、死
んでもしたくないっつーに！！』

「長々とツツコミご苦労様」

ちよ、マジム力つく！人が息切れする程頑張ったのに。小指思いつきり踏むぞゴラァ！あれめっちゃ痛いんだからな、泣きそうになるんだからな！

「まあ、それは冗談として…」

『その上冗談！？』

「罰ゲームの内容、決めた」

いや、そんな極上の笑顔で言われても、キモいから。何か企んでる事山のごとしじゃない。

「なんか言った？」

『何でもありません青海様！』

ああー怖い怖い。そうだった。コイツは、人の心を読む人間離れしたヤツなんだ。

『あ、あの、それで結局罰ゲームは……？』

「ん？ああ。それは」

『それは……？』

あたしはゴクリ、と唾を飲みこむ。うわ、冷や汗かいてきた。

「一週間俺の奴隷」

目の前のコイツは、それはもう、これ以上ない程の笑みを浮かべて言いましたとさ。

浅野 舞、14歳。人生最大のピンチ到来です！

第2回戦 期末テスト（後書き）

キャラクターファイル

・ たかなしおうみ
高梨青海

年齢：14歳

身長：172cm

体重：57kg

特技：ポーカーフェイス

コンプレックス：なし

座右の銘：完全無欠

さわやか王子。ただし中身は腹黒ドS魔王。

第3回戦 主従関係

第3話 加虐性淫乱症 or 被虐性淫乱症？

当然の様に差し出された鞆。

「はい」

『はい？』

意味も分ならず疑問符を出せば、鬱陶しい程浴びさせられる罵声。

「はい？じゃねえよ。持てって意味だアホ」

『なんであたしが………！』

「奴隷だからだろ？」

『うつ……』

そう、あの日以来私は、コイツのパシリとなっていた。毎朝、青海の家まで迎えに行つて、鞆持ちは当然、ジューズ買ってこいとまで言うのだ。

学校にいる時も、無茶な命令をしてくる。反抗するたびに、あのボイスレコーダーを出すし。携帯恐怖症になるぞ。そのうち拒否反応とか、出すからな。

とかなんか考えてる内に、学校に到着。ああ、また過酷な一日が始まる……。

機嫌良好な青海に比べ、気分最悪な私。

いや、だって、ねえ？

「何ため息ついてんだよ」

『え、ため息ついてた？ ああーやっぱ体は正直だー！』

「黙れ奴隷」

……拳で殴るぞクソガキ。

「舞ッ！ー！！」

『ん？』

聞き覚えのある声に振り向けば、温もりが覆い被さった。

「昨日ぶりー！会えなくて寂しかったよー！！」

『る、流華……。苦しいッス』

背の高い流華は、小柄な私を簡単に、ギュッと抱き締めれる。いやあ、照れちゃうね

「あ、ごめんごめん。舞が可愛くてつい」

私は流華に溺愛されてます（キャッVV）。流華は私の親友で、何かと面倒みてくれる。時々過保護すぎることもあるけど…。

「相変わらず熱愛してるな。目のやりばに困るし」

軽蔑する様な口調で、淡々と言い放つ青海。

その言葉を聞いた途端、流華の瞳が、ギラッ！と光った。あーあ、スイッチ入っちゃった。

「……高梨青海。アンタ、一体誰の許しを得て、私の舞をパシリにしてるの？」

「パシリじゃない。奴隷だ」

あくまで奴隷にこだわるんだ。どこまでサドなんだか……。

「奴隷ですって！？な、なんて言い様……。私が見張ってる限りでは、抱持ち・ジューズ買い・宿題・掃除・係の仕事　これらをやらせてるわね！一体どうゆうつもり！？」

「見張ってるって……ストーカーかよ」

「ストーカーじゃない！親衛隊よ！！」

……流華、そんな事してたの？

「……ハア、こんな朝からケンカなんてゴメンだ。遅刻したくないしな。行ぐぜ、舞」

『え、わっ……』

突然手を引つ張られ、教室のほうへと走る青海。

つていうか、手ー！！手、手、手ー！！

何普通に握っちゃてるのオオオオオ！？

「ちよ、舞に気安く触るなー！」

後ろから駆けてくる流華。ホントだよ。何コイツ気安く触ってるの？奴隷じゃなかったら、振り払って蹴り飛ばしてるのに！

期限がすぎるまで、あと3日です。ガンバレ私!!

第3回戦 主従関係（後書き）

キャラクターファイル

・葉月流華^{はづきるか}

年齢：14歳

身長：165cm

体重：40kg

好きな人：舞

嫌いな人：高梨青海

願望：舞の恋人

才色兼備。男より女の子が好き。舞を溺愛してる。

第4回戦 嫉妬と独占

第4話 醜い戦い、強制参加

みなさんコンニチハ。心のアイドル浅野舞です。只今他クラスの女子に囲まれてます。

え？なんでかって？こつちが聞きてえつつーの。

「なんの用かわかるでしょ？」

いやいやいや、分かんねえよ。生憎私は人なんで、アンタ等の思考は読めません。

ドンッ！！

そんな音がしたと思ったら、私の顔の隣に腕が……。背中には壁、前には般若面した女子（コイツがリーダー？）。つまり、壁と般若じゃない、般若面した女子に板挟み状態。

「しらはつくれる気？」

ベタだなオイ。ドラマ見すぎじゃない？あ、もしかしてこれ自体ド

ラマ？カメラ何処何処？カメラ目線しなきゃV V

「アンタ聞いてんの？」

「脅えて声も出ないんじゃない？」

「キヤハハハハ！自業自得じゃーん！」

うわ、マジでドラマっぽくね？カメラ何処よつ。

「謝れば許してもいいけど？」

だからカメラ！カメラ！！

「ちょっと、なんとか言ったら……」

『カメラさん、ここでアップー！！！！』

ドゴオオ！

……あ、やつちゃった。

「い、痛ああああーい！！」

そりゃ痛いだろうね。思いきり平手打ちくらわしたから。わ、周
りからすごい殺気が……。ってか、コイツ等何人いるの？

『あー、そう睨まないで般若さん。悪気があったんじゃないよ。な
んて言うか、ドラマでドッキリ、カメラ目線でベタじゃない？みた
いな？』

「誰が般若よ！しかも言ってる事意味不明だし！！」

『あー、うるさいうるさい。んで、なんの用？そんな頼真っ赤に腫らして。』

「アンタにぶたれたのよ！何なかった事にしちゃってるの！？」

「椿ちゃん、話進まない」

途中で仲介に入った般若22号（仮名）により、やっと話し合いになった。そして、般若0号（椿ちゃんだっけ？）が発した言葉。

「青海ちゃんと付き合ってるの？」

……は？

何言ってるのコイツ。また殴りたいのか？そんなに殴られるのが好きなのか？っていうか

『んな訳あるかー！！』

そりゃもう、力の限り叫んだ。

「じゃあ、なんでここ最近一緒に登校してるの！？アンタが青海くんに付きまといてるんじゃないの！？」

『いや逆だから！アイツにパシられてるんだよ私！！』

「嗚呼、可哀想な青海くん。優しいから、嫌と言えないんだわ」

とか、ハンカチ目に押さえながら、ふざけた事ぬかしやがった。その上周りの女子まで泣きはじめたんだけど。

まったく、見た目に惑わせられて…不憫な娘たち。アイツが裏でご主人様プレイしてる事も知らずに…。

あ、言っとくけど私マジじゃないからね？そのへん誤解しないでよ？

『で、用ってそれだけ？じゃあ私帰るわ。』

たくさんの女子が不気味な事呟きながら泣く光景に飽き、早々に去ろうとした時、

「まだ話は終わってないわよ」

般若0号に腕掴まれた。

「単刀直入に言っわ。もう青海くんに近寄らないで」

最初からそう言えよ。っていうか

『だから逆つつってんだろ！！人の話聞けやあー！』

「馬鹿言わないでよ！自意識過剰じゃない？」

『仕方ないだろ馬鹿なんだから！え、いや違う。間違えた、今の無しね。……誰が馬鹿だああ！失礼な事言っな！』

「だって数学24点だったんでしょ？」

え、なんで知ってるの？

「廊下に貼り出されてたわよ。1時間だけだけど。byご主人様って書いてた様な。」

……青海の腹のなか見てみたい。きっと全ての臓器が真っ黒だ。

まあ、その後はなんやかんやで鎮圧させた。軽く説明すると、

3分の2は、ひたすら謝罪の言葉を涙と一緒に流してたわ。
残りは気絶してたね。まあ、私の点数を知って無事でいられる訳ないんだよ。

っていうか、もしかして今日の全部、青海のせい？よし、罰ゲーム
終わったらミイラにさせる。

結局丸々潰された放課後。帰り道に、偶然青海と会って

「奴隷が一人で何処ほつき歩いてたんだよ」とか言われたから、
とりあえず50mくらい蹴り飛ばした。その内ギネスに挑戦しよ。

あ、ヤベ。まだ奴隷だったのにご主人様蹴っちゃったよ。まあ下剋
上って事で。

第5回戦 強者と弱者

第5話 平穏へのカウントダウン

「バカ、そこ違う」

「え、あ、本当だ」

「なんで答え見てるのに間違えるんだよ」

「いや、スイマセン」

……アレ？私何やってるんだ？なんでこんな事なってるんだ？あ、そうだ。思い出した。

30分前

「痛ああああああ！！なんで会った瞬間蹴るのオ！？」

「昨日の仕返し」

「だからってレディに暴力ふるなー！」

「え、何処にレディがいるって？」

「てめエエエエエエー！」

教室に入った途端、蹴りいれました

え？なんで教室かって？今日は先に行ってるって言われたからよ。
だから今日は流華と一緒に登校しました！いやあ、最高だね

「何にやけてるんだよ、気持ち悪い」

『なんだとオ！！』

あー、かなりム力つく！なんで人が嫌がる事を、変化球でクリーン
ヒットさせてくかな！？

ってか、クリーンって何！？ヒットは分かるけど、クリーンって…
…、何？掃除？意味わかんねえよチクショー。

「おはよう、青海、舞ちゃん」

『あら、おはよう、青海の親友で顔良し・頭良し・運動良し、必ず
Aランクには入る貴公子タイプモテ男の、藤森 幸希^{ゆき}くん』

「なんで説明口調？」

それはもちろん、作者が簡単に説明したいと思っ ゲフン、ゲフ
ン！あ、今の咳は風邪のせいだからね？邪推すんなよ。

「それはそうと、朝から仲良いね。」

……え？

それはもしかしくなくても、あたし等の事か？

「ああ？何言ってるんだテメエー。今すぐ硫酸浴びろ」

「それ死ねって言ってる？」

『なんて事言うのよ青海！せめて青酸カリ飲めにしなよ！！』

「どこがせめて？舞ちゃん、フオローになってないから」

いや、でもなんなんだよ。あの般若達も、幸希も。お前等の目は節穴か？ガラス玉か？ダイヤモンドなのかー！？

「お前馬鹿だろ」

『はん！今頃馬鹿なんて言われたって、へでもないねっ！』

「馬鹿バカ馬鹿バカ馬鹿バカ」

『え、ちょ、そんなに言わなくても……グスン』

ヤベ、涙出てきた。

ん？いや違う！泣いてなんて無いぞー！これは涙じゃなくてアレだ。アレだから。

「そう言えば青海。今日ワーク提出だよ」

「あゝ、ヤベ。国語やってねえや。でも、どうせ翔だからなあ」

「オイオイ、オール5狙ってるんでしょ？」

「別に狙ってる訳じゃねえよ。なっちまうだけだ」

（なんだって？）

『テメエエエエエ！今聞き捨てならない事言つたぞー！チクショー、そんなセリフ言ってみてえー！それと翔先生をバカにするなあー！』

「あれ、もう泣きやんだのか」

『ばー！泣いてないし！』

いや、ホント泣いてないからね？舞様は最強だから涙なんか流さないからね？さっきのはアレだからね？

「そんなことより……」

そんなこと！？乙女が泣いてたのに！？え、いや泣いてないよ。うん。だから泣いてないから！！

「罰ゲーム明日までだったよな？」

『それがどうしたコノヤロー』

「んじゃ、命令。俺のワークやって。っていうかやれ」

上から目線で言う青海。オレ様め。

『ぬぁー！ム力つく！！幸希からもなんか言ってるよ！』

「頑張れ舞ちゃん」

いやいや応援なんていらないから！

「今日中に終わらせろよ」

『…明後日覚えてろよ』

「明後日は休みだ」

『チクシヨー！！』

これって誰を一番恨むべき？

第5回戦 強者と弱者（後書き）

キャラクターファイル

・ふじもりゆき 藤森幸希

年齢：14歳

身長：170cm

体重：54kg

悩み：親友のサディズム

不満：周りからの扱い

主義：平和愛好

微笑みの貴公子。常識人でツツコミ担当。苦勞人。

第6回戦 解放から報復へ

第6話 レッツ！リベンジ

呪縛はとうとう解けた。

『僕等は皆生きている！ 生きーているから、自由なんだ！僕等は皆自由なんだ！ 自由ーだから、復讐するんじゃないやあああああああああー！』

こんにちは、浅野舞です 今日土曜日なので、学校はお休みなんです。そして、今日でとうとう地獄の一週間の終わりです……！

『高梨青海！殺！呪！死！墮！今までの仕打ち、そっくりそのまま……の1億倍返ししてやらあー！わたしや、逃げも隠れもしない！正面から正々堂々殴り飛ばす！』

……なんて、嘘！生憎そんな良い娘じゃないんだよ！陰から数々の嫌がらせをしてあげるわ……！

あひやひやひやひや！私への愚行、後悔するとい きゃあああ
！！！！！！

気分良く（？）歌っている舞様の顔に、プー の靴がクリティカル・ヒット

「長いセリフ言ってるじゃねえよ。読者が読むのめんどいだろ」

そう言つて、その男は私に当てた靴を拾いあげた。

この声は……！

『出たな、魔王の遣い！一体どれだけ私達を傷つければ気がすむんだ！……』つて、冗談ですごめんなさい！何靴かまえてるの！？早く履いてっ！』

あ、履いた履いた。でも顔、大丈夫かな？漫画みたいに靴のあとついてないよな？つて、んな事どうでもいい！

『高梨青海、ここで会つたが100年ぶり！今こそ恨み晴らしてやる！』

「はあ？なんの恨みがあるんだよ」

『バカ野郎！お前に受けた屈辱の事だあ！鞆持たされたり、屋上の鍵パくらされたり、校長室の金庫のパスワード調べさせられたり、コンビニでアイスを温めて下さい、と言わされたりと、まだまだあるだろチクショー！！』

これマジだからね。しかも私ちゃんとやったんだよ？偉くね？征夷大將軍並に偉くね？

『あんたの奴隷になつてから、食事も喉を通らない日々……』

「お前給食のデザート、人のぶん取つてただろ」

『もちろん夜も眠れないし……うう』

「そりゃ、授業中あれだけ寝ればな」

『その上、あんたの信者、というより私には般若に見えますよ、には凹られるし……。ぐすっ』

「え？」

はっ！そう言えばこの事言つてないじゃん！……まあ、もう私には近

付かないと思うけど。

なんか精神科通ってる娘がいるって話も聞いたし。そんなにトラウマになったのかな？

「…やられたの、か？」

『えっ、』

ちよっ、この人超真に受けちゃったんだけど。なんか真剣な表情してるし。あ、でもこれいい機会じゃね？

『そうなの…。まさに多勢に無勢で、さすがの私も駄目だった……。』
「マジかよ」

うわ、わたし演技上手くね？目うるんできたし。
ってか、こんなしおらしい青海初めてなんだけど。よし、このままペース持ってたって、土下座させよう。謝らせよう。靴舐めさせ（自主規制）。

「…そっか。俺のせいで……」

うつ向く青海。

ププー！騙されてやんの！やべ、おもしろすぎなんだけど。マジウける。

「…なんでにやけてるんだ？」

あ、ちよっ、つい表情に出ちゃった。

だって……ププッ！駄目だ舞！ここで笑ったら負けだ！！

『え、だって…、青海が心配してくれるから、嬉しくって』

かゆー！ー！ー！ー！

うわ、自分で言ってるキモ！マジ有り得ないし！吐き気までしてきたんだけど。

「舞」

『ふえ？』

ぎゅっ

（は？なにこの状況。いや、ぎゅってアンタ……）

「ごめん、俺のせいで辛い思いさせて」

『えっ、えっと』

何コレ、本当にコイツ青海？別人じゃん！クローンじゃん！ドツペルゲンガーじゃああああああん！？

ってか、いつまで抱きしめてんだテメー！！

「舞、俺」

青海がなにか言いかけた時……

「あたしの舞に何しとるんじゃあああああ！ー！ー！」

正義のヒーロー流華登場。

どうなる次回！？こっご期待

第7回戦 オチはつきもの

前回までのあらすじ

青海に復讐しようとして、歌った舞に靴がクリティカル・ヒット
そして、かくかくじかじかで流華見参。

第7話 ラブコメ ラブコメ ラブコメ ラブコメ？ラブコメ！？

「あたしの舞を抱きしめるなんて22000000000000000000
000年早くてよ！？」

「……流華、助けてくれたのは嬉しいけど、青海動かないッス（汗）」

「あら？これごときで死ぬなんて…所詮この程度ね」

「…いきなり現れて、みぞおちは無いだろ」

「あつ、生きてた」

「俺は硫酸浴びねえ限り死なない」

『アンタ何者？』

馬鹿な事言いながら、服の汚れを落として青海は立ち上がった。

オイオイ、なんで無傷なんだよ、つまらんな。顔にひとつくらい傷つけろや。

立ち上がった青海は、くるりと振りかえり

「それで、結局なにしたかったんだ？」

と、問いかけた。

『復讐』

それにケロリと私は答える。

なんだよその、うわゝ、みたいな顔。ひっぱたくぞコノヤロー。

「止めとけ復讐なんて。俺更に仕返しするから」

『だったら私はまた復讐する』

「仕返しの仕返しって…馬鹿みたいな悪循環だな」

『アンタ、三文字熟語使ってんじゃねえよ。頭良くみえるとか思ってたのか？だいたい【あん塾会】とかいやらしいんだよ！』

「テメエがいやらしいんだろ。一文字もあっちゃいない。」

…国語は得意なんだけどな。まあドンマイって事で イエイ！ポジ
ティブシンキング 舞ちゃん最高！

『つて、痛ア！なんで今殴ったのオ！？』

「……………なんか殺意が芽生えて。ごめん」

『あら、素直に謝るとは珍しい！とうとう私に従順する気になった
のか？』

「舞ごときに殺意芽生えるなんて、来世までの恥だよな」

『そこまでエエエエエ！？』

アレ？なんかおかしくね？だってさっきまで私、抱きしめられてた
んだよ？すごいよ流華、アンタの登場でギャグモードに戻ったよ。

『普通の女の子に戻ります！』って言うて、結局また歌ってるアイ
ドルへの感情だコレ。

「ちよっと！二人で私を無視しないでよ！」

流華が間に入り言う。

「そういえば、なんでお前もここにいるんだ？えーと、…なんだっ
け名前？」

「名前くらい覚えろオオ！あ、待て。だったら、私もお前なんか知
らない！忘れてやる！」

「なら、お互い様じゃん。一見落着」

……確かに。

「うるさい！誰だろうと、舞をいじめる奴は抹殺！！」

流華（キュンvvv）

「うわ、出たよレズ」

「ピアノを馬鹿にするなあ！」

否定しないんだ！？

いや、なんかもうこの雰囲気は

ドンッ！！

わたしは横にあった塀を、思いきり叩いた。あ、ヤベ。ひび入ったかも。

『さっきからグチャグチャグチャグチャうるさいなあ……………』

シーンと、一気に静まる。

『こんな言い争い無駄だって分かんないの！？』

「……………」

二人はしばらく私の顔を見た後、無言で背を向けた。

『あ、ちよっ！すいません！言いだしっぺ私でした！ちよっと、何処行くのオ！？や、流華まで置いてかないでよー！！』

ツッコミ、不在（泣）

『結局、置いてかれたわ……』

つーか、私最初の目的忘れてない？めくるめく復讐劇は？

『抱きしめられた意味も分かんなかったし。……ん？』

携帯のバイブが鳴った。この感覚はメールだ（なんで分かるんだよ）

『なんだろ？』

day . 月x日（土）
from . 青海
sub . 奴隷へ

ボコられたって言ってたけど、お前無傷だから謝らなくていいよな？俺がどれだけモテるか分かっただろ？

P・S からかって抱きしめたけど、お前本気にした？真っ赤な顔りんごみたいで爆笑ものだった（笑）

『チクシヨオオオオー！！』

携帯を地面に叩きつけた。（バキッて音がした。）

第7回戦 オチはつきもの（後書き）

…いや、だってこれコメディーだし。恋愛要素もぶっ壊すっていうか？

あ、ちよっ！石投げないで！嘘ですスイマセン！はい、これは『ラブコメ』です！！ドキドキハラハラです！ではさようならッッ（逃走）

第8回戦 僕等の日常事情

こんにちは、藤森 幸希です。えっと、本編では2話ぶり……？正直7話あたり出れると思ってました。だって僕だけ除け者じゃないか。

まあ、いいや。今日は月曜日、朝来たら学校のガラスが割れてました。

後輩は騒いでたけど、僕等には珍しくないから『あゝあ、またやったのか』ぐらいです。やっぱ新1年生は可愛いね。ま、その内慣れるんだろうけど。

あ、犯人はなんとなく分かります。多分みんな同じ人を思い浮かべてるだろうな。それは99,9999%の確率で合ってると思う。

ほら、声が聞こえてきた。

第8話 波乱万丈という名の平和

『だあかあらあゝ！私じゃないってば！！』

「いい加減認める。証言者がたくさんいるんだ」

『チッ』

「今舌打ちした？舌打ちしたよね？」

あゝあ、先生に怒られてる。舞ちゃんも懲りないな。

『先生、証言者って誰ですか？教えてVV』

「面倒くさいことになるから無理」

『酷いです先生！まるで私が生子に飛び蹴りしたり、無言電話したり、ストーカーしたり、ネットで悪い噂流したり、好きな子をバラしたりe t c……そんな事すると思ってるんですかっ！？』

「そこまでの気だったのかよ！！？」

『ヤベッ！』

「ヤベッ！じゃねえー！！」

うゝん、教師に敬いの気持ち0だね舞ちゃんは。そこが人気者の理由のひとつなんだろうけど。

「くそ、お前じゃ話にならない！担任は確か……げっ、翔先生かよ」

翔先生、げっ、とか言われてるよ。

『翔先生はいつも遅刻ギリギリに来るので、まだ来ませーん』

「残念でしたー。もう来てます」

（！！ この人気配なかったんだけど！）

『あ、翔兄』

「お前みたいな妹いた覚えはない。先生と呼べよ」

はい、皆さん。自称27歳のやる気0美形教師の登場です。でもこの人、どう見たって20くらいなんだけど……。実年齢いくつなんだか。

「なに舞？またガラスわったわけ？」

「そうですよ！これで何回目だと思ってるんですか？翔先生からもガツンと言って下さい！！」

「ガツン。……冗談ですよ。そんな青筋たてなくても」

火に油。この人本当に教師なのか？なんか近所のかっこいい兄ちゃんって感じじゃん。

まあ親近感わいていいけどね。

「浅野、翔先生…真面目に聞け……」

あ、そうとうキレてる。朝から災難だな荒井先生。この人短気だからなあ。

まあ、舞ちゃんと翔先生のコンビにキレるなって方が、無茶なんだろうね。

「まあまあ、荒井先生。舞だって育ち盛りなんだから、ガラスの2枚や3枚、10枚や20枚わかりますよ。」

「どんな成長期！？多すぎだろっ！..」

『翔兄、かばってくれるの？大好きvv』

うわ、生徒が教師に抱きついてるよ。舞ちゃん熱愛してるね。

「そりゃどうも。まあ、俺はお前の事嫌いだけどな」

.....玉砕？

『いやん、照れないで』

いや、効いてないか。

『翔兄、1時間目国語だよ。もうすぐ始まる』

「マジかよ。かったりいな。仕方ない、行くか」

『教室までデートしよー！..』

「はいはい」

「え、ちょ、まだ話終わってなあああああい！..」

こんな感じで1日が始まります。あっと、僕も遅刻したくないからそろそろ行かなきゃ。

その後も、ドア壊れたり、壁に穴空いたり、気絶する子がいたり、藁人形が落ちてたり……。僕等のクラスはとても賑やかです。今日も平和な日常でした。

僕はこれから部活です。サッカー部の次期キャプテンなので休めません。青海に呼ばれてるから行きますね。

以上、藤森 幸希でした。

そう言えば、何で舞ちゃんガラスわったのかな？まあ、大方青海絡みだろうけど。

第8回戦 僕等の日常事情（後書き）

キャラクターファイル

・ たかはししょう
高橋翔

年齢：自称27歳

身長：180cm

体重：65kg

職業：反面教師

モットー：鳴かぬならそれでいいじゃんホトトギス
嫌いなもの：面倒事

D組の担任。常にテンションが低い。面倒くさがり。

第9回戦 男一瞬ダチ一生

第9話 スパイごっこ

『こちら浅野舞。ターゲット不審な動きなし。どうぞ』

どうも、舞です！只今私は、悪友と共にある人を尾行してます。あ、その悪友っていうのは

『こちら、北林^{きたはやし}鈴^{りん}。同じく異常なし。どうぞ！』

……はい。北林鈴サマです！クラスメイトで、よく気が合うんだよ。ピアスに赤髪のヤンキーくんだけだね

え？ところで誰を尾行してるかって？

それは私のダーリン（妄想）で、謎多き男

【高橋 翔】さー！！

『フッフ、今日こそ翔兄の実態を暴いてやる！どうぞ！』

「人の秘密握るって快感だな どうぞ！」

やっぱり私等、相性抜群VV

「藤森、舞と北林は何してるの？オモチャのトランシーバーなんか持って…」

「ミッション“高橋翔を暴け”。スパイしてるらしいよ」

「高橋を？凄いわね、私は恐くて真似出来ないわ」

「チャレンジャーなんだよ二人とも」

「……でも、あんな至近距離でトランシーバー使わなくても」

「バカなんだよ二人とも」

（にこやかに辛口？）

藤森幸希・別名微笑みの貴公子

尾行し始めて、早20分。

なんだよ翔兄、私という存在が居ながら色々な生徒に話かけられてモテモテだなチクショー！。

『なんだか翔兄の前に出て行きたくなりました。どうぞ』

「それじゃスパイにならないから！どうぞ」

だって、だって、翔兄腕絡まれても抱きつかれても叩かれても抵抗しないんだもんっ！あ、叩いた子にはやり返した。

『ああ、もう我慢できません！どうぞ！？』

トランシーバーを握りしめて言うあたし。ミシ、って鳴ったけど、私には聞こえない聞こえない。

「早まるな舞！どうぞ！」

必死に止める鈴。そう、あたし達には使命がある。でも、私は、私は
！

『翔兄が大好……ゴフウー！！』

痛ああああああい！！なんか顎にめっちゃ衝撃があー！

私は思いきり、蹴り飛ばされた。壁にぶつかり、10Mくらいで止まる。やだガンッ！っていったんだけど！

ヤベーよ、舞ちゃんの脳の住人が大怪我だよ！。しかもなんか周りから煙出てるし！？

「オイ危ねえなあ。何やってんだよ」

出たよ我が宿敵！

『青海！アンタ今わざとだろ！？』

「自意識過剰も程々にしろ。偶然だ偶然」

『どこの世界に偶然顎を蹴り飛ばす奴がいるんだー！！』

「じゃあ、奇跡だ奇跡」

無表情で言う青海。腹立ちさ10倍なんだけど！？

「舞っ！何があった！？応答しろッ！」

はっ！鈴からだ！でも、私はもう…………。

『鈴、私はもうダメだ。無念だけど、後はアンター人で……。どうぞ』

「一体何があったんだ！？どうぞ！」

ああ鈴、アンタは本当にいい奴だな……。

「いや、何があったって、お前見てただろ。っていうか、そんな近くでトランシーバー使うな」

『鈴、私には果たせなかったけど、せめてアンタだけでも。どうぞ』

「無視かよ」

「もう喋るな舞！今行くからな！どうぞ！」

「今行くって、お前等1Mも離れてないじゃん。ほとんど隣じゃん」

なんか青海のツツコミが聞こえるけど、気のせいね。だってアイツはもう……

「もうなんだよ。勝手に話作るな」

嗚呼、思考にもツツこまれた気がするけど、有り得ないよね。だって思考読むって化け物じゃん。あ、そっか。アイツは化け物なのか。

「お前、哀れだぞ」

そんな今は亡き青海（妄想）を尻目に、バタバタと私に駆け寄る鈴。そして鈴は私の手をとった。

「舞……！」

『鈴。ターゲットが見つかるまで、私達の使命はまだ終わらないわ……』

「っ、わかった。俺がお前の分まで頑張っ」

「オイオイ、なんかでかい音したと思ったらまたお前等かよー」

え？この声って……。

「うわ、壁にヒビ入ってるし。勘弁しろよ、教頭に怒られるじゃー」

ん」

翔兄だ！どうしよう！早速ターゲットに見つかっちゃったじゃん！

チラ、と鈴を見ると『あちゃー』と呟いてる。

っていうか、壁って

『ま、待ってよ翔兄！これは青海が！』

「は？青海なんか何処に居るんだ？」

え………

（（アイツ逃げやがった！））

「面倒事はごめんだからなあ。マジックでもガムテープでも誤魔化しとけよ」

『ええ！翔兄ヘルプミー！』

「カムバック！」

GAME OVER

『次のミッションは青海暗殺計画で
「ラジャー……!!」』

第9回戦 男一瞬ダチ一生（後書き）

キャラクターファイル

きたばやしりん
・北林鈴

年齢：14歳

身長：168cm

体重：52kg

見た目：とにかく派手

苦手：恋愛沙汰

特技：ケンカ

優しいヤンキー。頭は弱い。家はかなりの金持ち。実は前科あり。

「どんだけ不名誉な賞？」

校長の話が聞こえないじゃないですか。それとその伊達メガネ外して下さい」

「大丈夫ですよ。校長の話は8割がいらぬ事だから」

「どこが大丈夫？早く静かにさせて下さい。あなた担任でしょう？あとその伊達メガネ外しなさい」

「そんな簡単に黙るなら、さっさと……いや、やってないな。かったりいし」

「アンタなんで教師になったのですか。ってかその伊達メガネ外せ」
そんな不毛な言い争いの中、終業式は終わった。校長は泣いていたとか、いないとか。

「えー、ハゲの長い話も終わり（聞いてなかったけど）、俺等は自由を手に入れた」

静寂のなか、ゆっくりと鈴が言う。 青春ゲーム にあるまじきシリアスモード

「つて事で……夏休みだああああー!!」

「『オオオオオオオオオ!』」

ではなかった。まあ、ジャンルがコメディーだしね。つていうか、シリアスなんかになったらこの舞ちゃんがぶっ壊す

「んでんで、提案なんだけど、夏休み海行かねえ?伊豆に俺の親戚が旅館やってるんだよ」

海ですと!?なんて素敵な提案!さすがは私の相棒

『ナイスよ鈴!もちろん行くわっ!』

「舞が行くなら私も行く」

そつくると思ってたわ流華vv女は愛されてなんぼね!

「やたっ!じゃあ、あとは……」

くるっ、と首をまわす鈴。なに?誰を探してるんだ?

「幸希、青海ー。お前達も来る?」

は、はあー!?!?

『何言ってるのよ!アイツは人の皮被った化け物よ!そんなの呼んだらエンジョイできないじゃん!』

「えーでもさ」

『もういい！コンビ解散よ！あたし、普通の女の子に戻ります……！』

ああ、涙が出てくる。今ならキャン イーズの気持ち分かる。

「バカ舞！普通の女の子に戻るとか言った奴に限って、結局復帰したりするんだよ！キャ ディーズがいい例だ！」

くっ！私の考えを読まれた！？まさか平成をバリバリ生きる鈴がヤンディーズを……。アンビリーボーだわ。

「誰が化け物だって？」

『げっ』

「なんだよその顔」

降臨なされたよ魔王が。

「あ！青海。行くよな？」

あ、鈴余計なことを！！

「まあ、暇だしな。行ってやるか。幸希、お前も来るだろう？つていうか来い」

「拒否権なし？別にいいけどさ」

『えー！幸希はいいけど、マジで青海来るの！？』

「じゃあ来週の火曜日な」

『シカト！？ちょっと鈴ひどい！私達の仲なのにい！！』

「詳しい事はメールするから」

更にムシしたよコイツ！天下の舞様が、このまま引き下がるとでも思ってたのか！？

『ちょっと待ったあー！』

大声でストップをかける。あ、やっと静かになってくれた。舞感激

『私達はまだ純粋な子供！保護者同伴にすべきよ！！』

「でも、誰を……………？」

いいところを聞いたわね幸希ッ！さすがツツコミ！

『そんなの決まってるじゃない！マイダーリンよ！！』

腰に手をあて、堂々と言うあたし。素直が1番だもんね

「……マイダーリンって……………」

みんな同じ方に視線をうつす。そこに居るのは

『って事で、翔兄！よろしくねエエエエエエエ！！！！』

「……………は？」

楽しい夏休みが待ってます

「え、いや、……は？よろしくって ……は？なに？俺？」

約1名を除いて……………。

第10回戦 終業式（後書き）

次回から夏休みVV

第11回戦 サマーバケーション（前書き）

旅行編

第11回戦 サマーバケーション

第11話 海に浜辺に水着に

『熱い夏、輝く海、眩しい太陽……そして、舞のセクシー水着姿
ッ！今なら無料キャンペーン中よ！！』

「きゃー！舞かわいいっ！かわいすぎて監禁しちゃいたい」

『照れるよー 流華こそ黒のビキニ似合うッ！超大人っぽい』

そう言っつて、抱き合う流華と舞。なに？お前等デキてんの？しかも
なんか過激じゃん。

「舞ちゃんの水着姿って健康的だね」

『色気が無いって遠回しに言ってる？』

いや、ヘソ出しで色気0なのはすごいさ舞。

「あ、幸希ヤバイ。俺吐気してきた」

『デメエ！聞こえてるぞ！！』

「舞、そんな事どうでもいいから早く泳ごうぜ!」

『どうでもいいって何だー!』

そんなことを叫びながら、ドタバタと走りまわる舞や鈴。元気だなあ。

……待て、俺は何してるんだ?なんでコイツ等とバケーションしちゃってるの?パラソルの下寝そべっちゃって、ちゃっかり浜辺で日焼けサロン?うわ、自分で言ってる意味分からねえ。

「何後悔してんだよ」

暑さにやられた俺に、上からふりかかる低い声。

「……青海」

あゝあ、出たよ。さわやか王子の名をもつ魔王が。コイツ俺に敵意むきだしなんだよなあ。

今だって、どこか不機嫌そう。ポーカーフェイスは健全だけどね。

「教師にその口調は無いだろ」

「生憎俺はお前を教師として、認めてないんで」

「いやあ、それ程でも」

「褒めてねえよ。照れるな、キモイ」

へらず口をたたく。いつからこんなに嫌われたんだっけ？去年の2学期頃からだったかな？アレ？でも確か……

止めた。考えるだけでかったりい。

視線を海のほうへと向けると、舞と鈴が仲良く競泳を……仲良く？

あ、いま舞鈴の足蹴った。うわ、鈴は舞が息継ぎした時顔に水かけたよ。全然フェアな勝負してないじゃん。

流華は……何悶えてるんだ？舞か？もう女捨ててる顔した舞に悶えてるのか？アイツどれだけ変態なんだ。普段のキャラはどうした。

よし、これからアイツを舞特性豹変症候群と呼ぼう。あ、でもなげえ。めんどいから前言撤回。

そんな事を考えてると、隣に青海が腰掛けた。

「あれ？青海くんは海入らないの？」

「気分じゃない」

ん？何ムスツとしてんだ？

「青海。やけに不機嫌じゃん」

あ、優等生藤森くん登場。

「幸希。今まで何処にいたんだよ」

「ずっと隣にいたけど……」

「「え、マジ？」」

「なにそれヒドッッ！」

「すげえな幸希は、気配を消せるのか。言葉ではそう言ったけど、単に地味なだけだと僕は思いました」

「先生全部くちにしてます」

「おーい舞〜！」

「話そらすな！」

（無視）俺が叫ぶと、舞は海から出てこっちへ走ってきた。

流華が少し睨んでたけど、ドンマイだ俺。

『なあに翔兄？私の水着姿に我慢できなくなった？』

「そんなの流華ぐらいだ、安心しろ。お前忘れてそうだから言
つとくけど、夏休み数学の補習来いよ？」

『もう1回泳いでくるね〜』

そう言って舞は海へと戻っていった。

「あれ？聞こえなかったのか？まあ、いいや」

「いや、良く無いでしょ！仮にも教師なんだし」

「聞こえなかったんだから仕方ないじゃん」

「だったらもう一回くらい言おうよ！それとアレ聞こえなかったんじゃないくて、無視したんだよ！？」

「幸希、お前は小さい事をぐちぐちと……。いいか？男は気にしたら負けだ」

「もういいです」

なんか軽蔑の目で見られてない？やだね。最近の中学生は。へんに反抗的になっちゃってさ？

「お前の所為だろ」

「わ、すごいな青海。人の考え読めんだ」

「顔に出てんだよ」

「マジかよ。それよりお前、海入らないわけ？見ろよアイツ達を。あんなバカみたいでさ、青春じゃん？」

「バカはなるより、見るほうが楽しいんだ。嘲笑がこぼれるぜ」

どれだけ黒いんだコイツ。笑みつかべてるし。幸希よくつるんでられるな。

また海のほうを見ると、 何アレ。なんか沖のほうに三角の物体
あるんだけど。

あれっでもしかして、イルカに似てるけど魚類の……

『ぎゃアアアアアア！！』

舞の叫び声が聞こえたのと遊泳注意の看板が見えたのは、ほぼ同時
だった。

第12回戦 夏の夜のお約束 前編

第12話 強くなりたいなら肝試し

『ここが私達が泊まる旅館？』

そう言った私の前にあるのは、めっちゃ日本代表ですよ的な大きな建物。古風な雰囲気だけど新築同様に綺麗にされてる。

「あ、鈴くんのお友達さん？待っていましたよ。」

出てきたのは、こりやまた大和撫子の美人女将。

『ああ、いけませんお客様』『女将さん！』『みたいな密な関係持ってるのかな？』

「海で泳ぎになったのですか？」

「はい。とても素敵な海ですね。あまりに綺麗で感激しましたよ」

答えたのは青海。

出たよー、営業スマイル！お前誰だって感じ！ってか、マジで誰コイツ？なにその無駄なさわやかオーラ。だいたい、私その素敵な海とやらで死ぬ思いしたんだけど！？

「ふふ、楽しんで頂いて良かったです」

あちらも負けなくらいの笑顔で返す。グハ！眩しいぜ！！

っていうかね、本当楽しんでたわよ。私が死にそうになってるのに、鈴はマッハで私を置いて逃げるしさ、友達止めようかな？

翔兄は『大丈夫か？』って明らかに大丈夫じゃない状況なのに言うし、青海にいたってはかなりの笑顔浮かべるし、コイツ等死ね。

幸希はそんな奴等にツツコミいれてて…いや、ツツコミはいいから助けてよ、って感じ。まったく、これだからヘタレは……。

唯一、流華が私を担いで陸まで泳ぎ、助けてくれた。姐御って呼ばせて下さい。

「でも、夜の海には気をつけて下さいね？」

「え？」

「最近おかしな噂が流れてるのですよ。なんでも、人を惑わす幽霊が出るとか……。」

『ゆ、幽霊？』

「はい。ただの噂だといいますが」

なるほど……。これはもうアレだ、アレしかない。

『つてことで第1回戦肝試し大会イイイイ!!』

「「「「はアアア!?!?!」」」」

目を丸くして、私を見るみんな。なんだよ、そんなに見つめないで
まさかみんなして私のファンなの!? モテ娘は困るゝVV

「妄想してるとこ悪いけど、何言ってるのお前? だいたい第1回つて第2回あるのかよ」

『だつて幽霊と言ったら肝試ししかないでしょ? 翔兄ったら、に・ぶ・い』

「幽霊つて、昼間女将さんが言ってた?」

『察してるんだつたら聞くなヘタレ』

「何その態度の違い!?!」

『私と翔兄のラブワールドを邪魔だてせぬな!』

「頼むから今すぐ壊してくれ」

ハイテンションな私

興味なしの青海

ツンデレ翔兄

傍観者の流華

理解してない鈴

ウザイ幸希

「なんかおかしいよね? 最後ちよっとおかしいよね?」

『……じゃあ早速その海に行こう!』

「何今の間!? なんで今回こんなに扱い酷いわけ!？」

「安心しろ幸希、今回だけじゃないさ」

「黙れ腹黒魔王」

肝試し開戦ですww

第12回戦 夏の夜のお約束 前編 (後書き)

次回へ続きます

第13回戦 夏の夜のお約束 後編 (前書き)

次回の続き。初、青海視点!!

第13回戦 夏の夜のお約束 後編

『……………ねえ青海』

「なんだよ」

『どうやったらこうなるの?』

「どっかのバカ女がころぶ時さわやか王子を巻き添えにして、他の異端者等がそれに気付かない程マヌケだところなんだ」

『不思議な道理だね。ひとつ勉強になった!』

「ああ、きつとテストに出るから覚えておけ」

『……………で、どうする?』

第13話 怖さは後からくる

今の状況？さつき説明した通り。ようは俺たち二人は他の奴等とはぐれた。場所は海の前の砂浜。夜の海とか、かなり気味悪イし。

『つまり迷子だね』

「どう考えたってお前のせいだろ」

『……青海、これは悲しい運命さ。運命とは人の力じゃどうにもならないの。だからね、誰のせいでもな　ぬにゃあ！！』

長々と責任転嫁を語る前に、鳩尾に一発いれた。っていうか、『ぬにゃあ』？どんな叫び声だよ。

『ぐ……青海。表情変えずに殴るとは非道なり！舞ちゃんその内泣くからな！？』

「うずくまって泣いてろ。爆笑してやるから」

『サド大魔王ー！！』

なんか魔王から昇進してるし俺。

『ああ、もうヤダ！私より幸せな奴みんな死ね！！』

何言ってるのコイツ？とうとう狂ったか？

『そして迷子になってる子達！今だけ同志になろう！！』

どんなキャンペーンだよ。

「……とにかく帰るぞ。はぐれたって言っても、旅館戻れば居るだろ。」

『バカね青海。迷子になった時は動かないのが一番なんだぞ?』

なんで帰るルート知ってるのに動かないんだよ。

それとその『だぞ?』ってなんだよ。ツチの南ちゃん気取りかコノヤロー。

『って事で座った座った!今なら舞様の隣に居させてやろう』

「じゃあ俺帰るから」

バカ女を置いて旅館に向かう。こんな奴の隣にいたら、なんかウイルス感染しそ

「のわっ!」

『ヤーダー!こんな暗い所に乙女を置いてくなあ!』

とりあえず乙女は人の足にしがみつかねえ。

『星がきれいだねエ』

「そーですね」

『夜の海もなかなかだねエ』

「そーですね」

『あ、見て！満月だあ！』

「そーですね」

『ウザイんだけどオ！！』

結局舞と居る俺。テキトーに相槌してたらキレた舞。

もうコイツ海に捨てて、俺だけ帰ろうかな？もちろん這上がれない様に重りつけて。

『……ねえ私達今2人きりなんだよね？鳥肌たつよ』

「気が合うな、俺もだ」

夜のせいか、波の音以外まったくもって静寂。それに俺と舞の音が響く。

『そーゆー雰囲気になっても手え出してこないでよ、アンタの事嫌いだから』

「そーゆー雰囲気って、どーゆー雰囲気だよ」

『なんていうか、このままキスしちゃう？海で甘酸っぱい青春しちゃう？みたいな』

「そんな間違い起こすの、あの変態女ぐらいだ」

『間違いってなんだ!!』

「つていうか、変態女って？岩本田野宮・クレーシユリイさんの事？」

「誰だよ。そして何人だソイツ。」

「あの…なんだっけ名前。あ、思い出した。葉月 流華だ」

『流華の事か！そういえば何気にフルネーム出たの、本編じゃ初めてだね!』

「本編とか言っな。」

「……お前さ、アイツ 翔の事好きなわけ？」

『当たり前じゃん』

「俺の唐突な質問に、ムカつくぐらいの早さで即答する舞。闇に目が慣れ、強い月光もあり、お互い表情は見えてるだろう。」

『そーいえばアンタ、翔兄の事毛嫌いしてるよね。なんで?』

「キョトン、とした顔で聞いてくる。」

「俺は……」

ジャリ、

「『？』」

突然、背後から砂を踏む音になる。

そういえばここ、昼間聞いた噂の場所……。ジャリ、ジャリ、ジャリ

『お、おうみ……。！』

「ひつつくな」

『だ、だって未知との遭遇しちゃうよ！やっぱり挨拶は全国共通のHELLO？でも慣れ慣れしいって思われる！？』

知るか。だいたいなんで英語なんだよ。

「幽霊なんて非科学的なモノ……」

そう言って振り向いたら

「見いつけたあゝ」

『ギヤアアアアアア！って、アレ！？』

「なに迷子になってんだよお前等。ほら、帰るぞ」

「……翔」

そこにいたのは、俺のワースト5には入るだろう、高橋 翔だった。

『翔兄ィ〜！怖かったよォ！魔王といても、全然頼りにならないんだから！』

足にしがみついていたのは、何処のどいつだ。

『よし、旅館へゴー！！』

なんだかんだで、俺達の迷子タイムは終わった。

「舞ー！！心配したよ〜！！」

『旅館、到着！！』

「何処にいたんだよ舞！」

着いた途端、舞に抱きつく葉月 流華と鈴。目に痛いから、詳しい解説はできない。ってか、したくない。

「良かった、無事戻ってきて」

「幸希。いや、なんか翔が」

「あ、やっぱり自力で戻ってきたじゃんコイツ等」

……は？

『アレ？翔兄！？』

教師にあるまじき台詞を吐いて、奥から出てきたのはさっきまで側にいた張本人。

「まったく、中学生にもなって迷子になるなよなあ。流華なんか探し行くてうるさかったんだぞ？」

…そういえば、いつのまにかあの翔がいない。

「……翔。お前ずっとここにいたのか？」

「ん？ああ。青海なら道分かるだろうと思って。めんどくさいとかそういう理由じゃないからね？信用してたんだからね？」

『え、じゃあさっきのって？』

「……………」

夏夜の不思議な体験

第14回戦 夏休み〓退屈(前書き)

今更だけど季節はずれ

第14回戦 夏休みⅡ 退屈

第14話 うだうだぐだぐだ

どうも前回青海に視点を盗られた舞ッス！楽しかった旅行も終わり早3日（温泉でばったりはなかった）。

ついでに今の私の気分は

『暇！暑い！とけるウ！』

ゴロゴロゴローと部屋を回る。フローリングの床が冷たくて気持ちいい。

……ってアレ？この展開はやバイぞ。なんかグタグタして、はい、終わり〜みたいになる。

でも、ここで私が宿題とかやっちゃっても面白くない。ってかやりたくない。

なんか起きろ！誰か来い！！

「……何やってるのさ姉さん」

『おお！我が弟よッ！』

仰向けに寝てた私に、上から目線（違）で言うのは我が愛しの弟、瑠璃。見た目も中身私に似て可愛い奴

「寝るなら自分の部屋行きなよ」

『お姉さんの部屋は絨毯で暑いのを』

「いや、床で寝なくても」

ああ、新キヤラ登場でとりあえずゴロゴロした1日でした、とはならず済むや。

『瑠璃ー、あたしヒマなんだけどお』

「宿題やれば？去年溜め込んで大変だったじゃん」

『そんなもんやったって、地球は救えないのさ』

「……僕、ニートの弟なんて嫌だからね」

そう言つて、立ち去った瑠璃。なんだよ薄情者め。

『ヒイマア！流華と幸希は塾だし、鈴は決闘とか言ってたし、翔兄はメールシカトするし、青海は……』

……………。

（『なんで翔兄を毛嫌いしてるの？』『俺は……』）

ふと、海でのことを思い出す。

あの時、なんて言おうとしたんだろう？

なんだろう、翔兄となんかあったとか？

目玉焼きにかけるモノでも争ってたのかなあ？翔兄は塩こしょうで、青海は醤油派だったのかな。

きつとソースだけは無理とか、マヨネーズは無いだろとか言い争ったんだろうな……。

~~~~~

『ん？メール……。翔兄じゃん。なにに、明日から数学の補習来い？じゃなきゃ俺がなんか言われる？』

……翔兄。私のメールは無視したくせに、どこまで嫌な性格してんの？でもそんな貴方が好き！

『はあ、めんどくさい。鈴誘って行くか。でもあの子勉強大嫌いだからなあ』

ついでに鈴の成績は5教科合計で100点をとるくらいのパカ。だって鈴、授業サボるはテスト前遊ぶはで勉強一切しないんだもん。

『……なんかで釣るか』

明日から補習……。私は、その補習が運命を揺り動かすなんて、この



時はまだ気付かない

こういうの、連載だとやりたくなるよね（笑）

## 番外編 小話シリーズ（前書き）

今回は本編とは関係ない小話を描きました。会話文だけの120%ギャグです

それでは小話シリーズ 始まり始まり

## 番外編 小話シリーズ

正夢？

幸希＋青海（×舞）

『青海大好き』

「可愛い奴だな」

「お、青海？舞ちゃん？やけに仲良くない？」

『あ、幸希イ。ウチ等付き合う事になったんだあ！』

「ええ！？」

「ラブラブなんだよなあ？」

『ねえ』

「じよ、冗談でしょ？」

『冗談なんかじゃないよ！』

「俺達はマジで愛し合ってるんだよ！」

『青海』

「舞  
」

ガバッ！

「ゆ、夢……………」

「いや、別に二人が幸せになるならいいよ？でも、本当アレは見て  
る方が堪えないっていうか……………」

「なに泣いてんのお前？」

悪夢

舞＋青海（×幸希）

「俺、実は幸希のことずっと  
」

「だ、ダメだよ青海。だって僕たちは男同志だし」

「性別なんか関係ない。俺はお前のことが好きなんだ」

「ッ！そ、んな…僕だって……！」

「幸希」

「青海！」

『って夢見たんだけど、どうしよう青海！』  
「何がどうしよう？」

国語の授業  
翔＋流華

「えー、ここはだな、そんなこんなでこうなる」

「先生そんなこんなってなんですか。ちゃんと説明して下さい」

「流華、男だったら理屈は気にするな。気にしたら負けだと思え」

「先生、私は女です」

「小さい事は気にするな」

「先生、PTAに言いますよ?」

いつもこんな感じ  
だけど生徒に人気な翔

A・I・B・O・U

鈴×舞? + 幸希 + 翔

『鈴!テストどうだった?』

「合計で100点」

『マジで!びっくり!?すごくない?』

「いやあゝ、それ程でも」

『さすが私の相棒だ!時々ムカつくけど、鈴大好き!!』

「俺も舞のこと、時々ウザイけど好きだぜ!?」

ギョッ

「……ねえ先生。男女が抱き合ってるのに、なんでハートマークが欠片も見えないんだろう」

「あの2人に色気も艶も存在できねえよ」

きっかけ

幸希＋流華 舞

「流華ちゃんはいつから舞ちゃんの事好きになったの？」

「ふふ、よく聞いてくれたわね！そう、あれは私達がまだ2年生だった頃」

「え？なんか回想シーン入る雰囲気？」

く回想シーンく

『流華』!!』

「舞、そんなに走ると転」

バタンツ!!

ちゅっVV

「……………」

『うわ!ごめん流華!勢い余ってつい』

↓回想シーン終了↓

「偶然起こった事故だけど、すっかりときめいちゃったの」

(すっかりにも程があると思う……………)

言葉にはできない幸希だった。

もちろんほっぺね





第15回戦 フォーリンラブ（前書き）

十恋愛編十

## 第15回戦 フォーリンラブ

### 第15話 フォーリンラブ

『補習が僕等と呼んでいる。インテリ教師が待っている。アイツが事故る事を祈ってえ、補習が消える事願ってえ！さあさあ皆さん、お手を拝借』

こんにちは、舞です！え？今日？補習だよー、マジやってらんない。ついでにさっきの歌は舞作詞作曲

『あ、鈴！ちゃんと逃げずに来たね！』

校門で待っていた鈴に手をふる。あらら、やっぱり嫌そうな顔してるよ。

「なんでせつかくの夏休みに学校来なきゃいけないんだよ。」

『まあまあ、後で鈴が欲しがってたリングあげるから。』

「約束だぜ？」

エビでたいを釣るってね。昔鈴から盗ったリングをあげる（返す）

わ。

『…にしても鈴、相変わらずな格好してるねえ。』

今日の鈴の服装、赤いＴシャツの上に乱れたＹシャツ。ネクタイはゆるゆるで、斬新なベルト。赤髪には新たにオレンジのメッシュ入ってるし。校則破りもいいとこだ。

「でも今日はピアス外してきた。えらくね？」

『なんか夏休みに入って、更に派手になったなあ。うわ、それタトゥー？』

「おう、かつこいいだろ？」

自慢気にニカツと笑う鈴。チャラチャラしてるのに、笑顔が無邪気なのよね。そのギャップにくらくらだわ！

数学の補習やる教室へと向かい、校内の廊下を私達は歩く。

「数学って先公誰だっけ？」

『鈴、たまには授業出ようよ。数学はあのインテリメガ　きゃつ！』

ドン！と誰かにぶつかつた。この舞サマにぶつかるなんていい度胸してるじゃない！思わず転んじやつたじゃないか！！

「あ、ごめん！大丈夫？」

そう言って手を伸ばされた。ふむ礼儀はなかなかね。さて、どんな顔して

「どっか怪我した？」

見上げて目が合った瞬間、ボツ！と顔が熱くなるのが分かった。

か、かつこいいーーーー！！

「おい、舞？」

鈴が怪訝な表情で見てる（失礼だなこのやろう）。

『わ、私実は貴方の妹なんです！』

「舞！？」

「ええ！マジで！？」

（舞のボケ＞正真くをボケ＞天然くで返したア！？何者だコイツ！）  
鈴の心の中

『あ、すいません。間違えました。』

「なんだ間違いかあ。」

く、あまりに動転して変なこと口走ってしまった！

ヤバイわこれ。何がヤバイって、とにかくヤバイ。

なんか頬熱いし、息切れするし、心臓うるさいし……。

「じゃあ俺、部活あるから」

はうあ！行ってしまう！！

『ま、待って下さい！できれば名前と部活と誕生日と血液型と好きなタイプetc……。』

私が引き止めると、彼は振り返り、

「花形 嵐<sup>らん</sup>、サッカー部の三年生だよ。」

と、笑顔で言い去っていった。

さ、さわやか……！

『鈴……。』

「あん？」

『これがひとめぼれってやつ？』

「はあ？」

補習中

『先生！こんな方程式より恋の足し算を教えてください！』

「帰っていいよ浅野さん。」

## 第16回戦 恋愛相談室

「花形 嵐、サッカー部の3年生だよ。」

### 第16話 サッカー部のクラスメイト

『幸希イ開けるぞオオオオオオオオ！！』

「うわああ！！なにごと！？」

幸希の部屋を叫びながら開けると、案の定驚かれた。  
はいそこ、どうやって家入ってきたとか、ヤボな事聞かない。

「ま、舞ちゃん？いきなり入ってこないでよ。驚くじゃないか。」

目を丸くさせ、心臓を押さえる幸希。微妙に涙目じゃね？

『やーね、ちゃんと開けるぞ？って聞いたじゃない。』

「ええ！さっきの聞いてたつもりなの！？」

なんか幸希がピーチクパーチク言ってた気がするけど、気にしたら負けさ（by翔兄）



「何しに来たんだよ。」

『ぬぁ！青海！？なんで此処に居るの？まさか私に会いに…：そうならそうと言ってくればいいのに　でも私悪いけどアンタの事嫌い。』

「もう一回言ってみろ？（微笑）」

『冗談です。すみません。』

ヤベツ、謝っちゃったよ！だって笑顔が恐さ倍にしてるんだもん！！

『と、まあ、そんなんだけど、教えてくれる？』

「そんなんってどんなん？」

直ぐ様返してくる幸希。

乙女の考えくらい察してくれや〜。

仕方ない、昨日の事を一通り話すか。

「「ひとめぼれ？」」

「花形先輩…に？」

『うん！』

んん？なんだこの微妙な視線。私が恋しちゃ悪いか。

『そこで、サッカー部の2人に協力してほしんだ』

「さりげに俺を入れるな。」

『安心して、アンタなんか当てにしてないから。』

「幸希、金属バット持つてる？」

「サラリと怖い事言わない。」

最近幸希のツツコミ、キレが出てきたなあ。ありや考えるより先にツツこんでるね。もはや反射的だ。うん、青春ゲームに貴重。大切にしなきゃ！

「…で、僕等に何してほしいの？」

『先輩と会わせて！っていうか、先輩の生年月日とか血液型とか趣味とか家族構成とかタイプとか身長とか体重とかスリーサ

「危ない危ない！そこまでいくと犯罪になっちゃうよ！ってか、そんな事僕知らないから！！」

私の言葉を遮る幸希。

なんだよ、常識にとられちゃって。そんなんじやいつまで経ってもヤチャのままだぞ！地球人ならクリンくらいいけ！

「伏せ字だらけじゃねえか。」

『うるさいよそこ！人のボケに文句言わない！！』

「っていつか、お前マジで先輩と付き合いたいと思ってる？やめとけ、お前じゃ相手にされねえよ。」

鼻で笑う青海。ああム力つく！！コイツ絶対地獄に堕ちるよ！むしろ一生現世さまよえ。そして除霊師に灰にされちゃえ！！

「なんか言った？」

『言ってません。』

怖エエエエエ！！なんで分かるの！？なんで分かるの！？もう魔王イヤ！誰かダンプカーでコイツひき殺して！

「なんか思った？」

『思ってます。』

本気で命の危険を感じるの、このへんでやめとこつ。舞はこれから邪念を消します！

「くすくすくす。」

？

「何笑ってるんだよ幸希。」

あ！私が思った事言われた！チクショー青海め人の意見盗みやがつて！！

「いや、もしかして青海、妬いてるのかなって思ってた。」

ん？やいてる？焼いてる？ヤイテル？矢井てる？

「誰が妬くか！死ねよテメエ。」

『こら！簡単に死ねとか言わないっ！せめて消えろにしなさい！！』

「舞ちゃんフォローするつもり無いでしょ？」

あ、バレた？っていうかこのやりとり前もなかった？まあいいか

「あ、じゃあ明日部活あるし舞ちゃん見に来る？」

思い出した様に言う幸希。

「オイ幸希！」

『！

行く行くウ！』

やったー！これで花形先輩に会っつきかけができた！！

『幸希大好き！』

「どういたしまして。」

にっこりと笑う幸希。さすが微笑みの貴公子

バシッ！

「ちょ、なんで叩いたの！？」

「にやけてるお前がムカついたから。」

「にやけてるって言い方止めてくれない！？」

みなさん、舞は今日をもって恋する乙女となります！！

## 第17回戦 第二印象

第17話 偶然、必然、運命

「あ！今蹴った人だよ！」

「今の？舞の好きそうなタイプね。」

私達は今サッカー観戦中です！なんか流華は品定めとか言ってるてきた。深く意味を考えちゃダメだヨン様パラダイス（え

…にしても、花形先輩かつこいい！！超さわやか！汗だくでもさわやか！暑苦しくてもさわやか！！なんかもうさわやかッ！

「褐色の肌に黒髪。身長170強。スタイルAランク。さわやかフエイス。舞の好きそうなタイプね。」

でもまだ性格わからないし、青海みたいに王子スマイルのくせに腹黒かもしれないわ…。いや、でももし中身もさわやかだったらどうしよう。悪いところが無いじゃない。舞は激プリ（激しくプリティ）だからあっさり両想いになっちゃっいそうだね。そしたら私の気持ちはどうすれば……！」

うーん、なんか流華がブツブツ言ってるけど、あえて気にしないよ。

『あ、部活終わったみたい!』

いつのまにか結構時間が経ってた。時間を忘れるくらい見とれてたわv v

「よし、近くで見てやろうじゃない。」

『わ、流華!』

流華に腕を引っ張られ、先輩や青海がいるところに向かう。

うひゃー! ドキドキするよオ! 先輩私の事覚えてるかな?

ん? なんかジャンル変わってない? コメディーでいいのかこれ? まああらずじにラブコメって書いてあるし、大丈夫だね

「藤森! 高梨青海!」

「あ、流華ちゃん舞ちゃん。」

「本当に来たのかよ...。」

微笑む幸希と呆れる青海。

なにさ、その嫌そうな目は! ヒドイぞ腹黒魔王(定着)!!

「アレ? 君確か...。」

先輩が私を指さす。

ドッキーン！！

ななななななんて言うかな！！？

「前に廊下でぶつか『今まで何処にいたんだよドラ もん！』

バコンッ！

照れ隠しで我ながら意味不明な事を言っつて先輩に抱きついたら（キヤッw）、青海に殴られた。

『なにすんだテメエ！！』

「こっちの台詞だ。何どさくさにまぎれて抱きついてんだよ。なんか見てて痛いからやめろ。っつか此処から消えろ。」

『んだとテメエ！ふざけん　！！（ハッ、先輩が見てる！）ふ、ふざけないで下さいなでござる！』

「それ敬語？」

しばらくお待ち下さい

『え、え〜と、改めまして、先日幸希にセクハ、…いやいや猥褻行



為された浅野 舞です。』

「今言い直した意味無いよね。っていうか平気で嘘つくのやめようね。その内怒るからね。」

「傷は浅いよ舞ちゃん!」

「先輩それどういう意味?」

「それにしても、どうした?俺になんか用?」

『ははははい!じ、実は前ぶつかったお詫びに、お、奢らせてほしいな。なんて……。』

ああ!言った!言ったよ私!よくやった!あ、でも今月82円しか残ってない!給料日前はキツイぜ!(誰?)

「お詫びって大袈裟な!そんな気にしてないから平気だよ!むしろ俺が転ばせちゃったんだし、俺が奢るよ?」

うわああ!どうしよどうしよ!そんな、先輩に奢らせるなんて私にはできない!で、でも先輩とランデブー(?)したいし…!

『よ、よろしくお願いします…。』

「決まり」

そんなこんなで、私達はデートする事になっちゃいました!!

『あ、でも先輩ワリカンですよ?』

「舞ちゃん優しいね」

（好感度アップ!）

## 第18回戦 憧れの人（前書き）

今回は私の舞のデート！！こんな大事な場面、視点は譲れない！藤森を巻き込んで、ザ 尾行

## 第18回戦 憧れの人

### 第18話 ムードにお任せ

はじめまして皆さん。小学生時代、舞に惚れた奴を片っ端からドブに落としてた葉月 流華です。

「流華ちゃんそんな事してたの？」

+ @です。

「いや、僕の事もちゃんと紹介してよ！ついでに事の経緯とかも！」

藤森がうるさいので、今の私達の状況を単刀直入に言います。

尾行してます

「…単刀直入すぎるよ。流華ちゃん視点向いてないよ。変わろうか？」

「藤森が視点やったら2分の5がツツコミになるじゃない」

「2分の5つてあふれてるじゃない」

うるさい子ね。私だって視点やってみたいわよ。しかも今回は私のスイートハニーのデートなんだから！

「2人の邪m…見守らなきゃ！」

「今邪魔って言おうとした？」

「あ、こっち来た！ほらかがんで！」

「うわー！！」

舞とターゲツ      花形先輩が並んで歩いてくる。

「ターゲツトって言った？」

藤森の邪推は皆さん気にせずに。ってか話すなら（）で話してよ！  
舞達とごっちゃんになるでしょう！

（何この扱い？）

（そうそうそんな風に）

（うるさいよ！）

「最初どこ行く？」

笑いながら聞く花形先輩。やっぱりさわやかな…。微笑みの貴公子藤森にも、王子スマイルの高梨青海にも負けてないわ。

『え、えつとネバーランド！』

「あ！いいねおもしろそう」

『ですよ〜！私懂れてるんです！』

「夢のような国だねえ。」

（夢のようになっているか夢の国でしょ！！）

もう何よあのポケポケ！てんでダメじゃない！

（舞ちゃんのネバーランド発言はいいんだね。）

（だって可愛いじゃん！今でも信じてるのよ！？ってか、今更だけど舞の私服激キュー（激しくキュート）vv連れ去りたいわ！）

（流華ちゃん犯罪者になりそうだよ）

（人は誰しも恋泥棒という犯罪者よ）

（かつこよくないから！！）

って、ああ！舞達喫茶店に入って行った！ネバーランドはどうなっ

たのよ!?

仕方ないから、嫌がる藤森を無理矢理引っ張り、喫茶店に入った。

私と藤森は舞達からは見えない席に座った。念のためプチ変装中。

(く、ここからじゃ何話してるか聞こえないわ!)

(ねえ、まだ○なわけ?)

(当たり前!だって……)

『先輩、なに頼みますか?』

『うーん、どうしようかな』

(ほら!ごっちゃになっちゃ読者が困るでしょ!?)

(今、無理矢理会話入れたよね?)

ああもう!藤森はいつも人の揚げ足とって!!

『…先輩、あの、質問なんです、先輩はか、彼女とかいるのですか?』  
『なんて聞いてみたり……。』

「え……………」

ああ！よくわからないけど、ラブい雰囲気になってる！っていうか、今舞の声聞こえたわ！やっぱり愛の力ってすごいvv

「俺……………」

『は、はい！』

ちよつとオオオオ！！顔真っ赤に染めてうるんだ瞳の上目使いヤバイよオ！シャ、写メとらなきゃ！っていうか、抱きしめたい！！

（ちよ、なにやってんの流華ちゃん！？今行ったらダメだって！）

（とめるなあ！あんな可愛い舞を前に、黙って見てろって言うの！？）

（落ち着いてー！！）

「俺さ、全然モテないから彼女いないんだよね。恋とかよくわからないし……」

『ええ！そんなカッコいいのに！？　　って、あ。』

「はは、ありがとう！やっぱり舞ちゃん優しいね」

『そ、そんな……／＼』



（ヤダ！なんかいい雰囲気じゃない！！もう藤森のバカァ！）

（見守る予定だったんじゃ……）

（おだまり！）

（……………。 ）

舞の隣は、やっぱりまだ譲りたくないの

## 第18回戦 憧れの人（後書き）

キャラクターファイル

はながたろん  
・花形嵐

年齢：15歳

身長：178cm

体重：60kg

所属：サッカー部

性格：天然

主義：ロマンチスト

天然鈍感さやか先輩。無自覚タラシだったり。樂觀主義者。

## 第19回戦 片恋日和

純愛 or 敬愛 or 熱愛？

### 第19話 クライマックス

どうも、前回流華ちゃんに振り回された藤森です。っていうか、現在僕の家先輩、舞ちゃん、青海が来てます。

『先輩って、肌きれいですね！』

「そう？俺生まれつき黒いんだよね。」

『そこが素敵なんです！』

舞ちゃんは先輩に彼女がいないと分かった途端、猛アピールしてる。あ、流華ちゃんと呼んでません。もうあんなのゴリゴリです。

「…なんだよこのメンバー。」

青海がため息混じりに言う。呆れてると言うか、不機嫌と言うか…。

「いいじゃん。協力してあげなよ。」

「なんで嫌いな奴の恋路に、手を貸さなきゃいけないんだよ。」

「嫌いだからできるんじゃない？好きな娘の協力のほうが、できなそうだけど。」

そう言うと、軽く睨まれた。恐い恐い。なんですぐそんなおっかない顔するのさ。

「お前、何が言いたいわけ？」

「別に？」

「俺は、花形先輩のためを思って言ってるんだよ。あんな奴と付き合ってたなら、なんか感染するぞ？」

ウイルス扱い？

「それに先輩は、モテるのにあの鈍さと天然で自覚してないだけなんだよ。アイツにはもつたないだろ。」

「そうかなあ？舞ちゃん黙ってれば可愛いと思うけど。」

「幸希……………」

なんかすごい哀れみの目で見てくるんだけど。なにその、可哀想な奴…みたいな視線は。けっこウム力つくよ？

「舞ちゃん1部の男子にモテるよ？青海だって知ってるじゃん。」

僕がそう言つと、青海は少し考え込んだ。

舞ちゃんの名誉のためにフォローすると、舞ちゃんはわりとモテる。

運動神経抜群だし、ノリいいから親しみやすいし、黙ってれば可愛いし、寝てればおとなしいし、遠目スタイルいいし、…アレ？自分で言つてなんだけど、これってフォローになつてる？

『ええ！先輩1回も告白された事ないんですか！？そんなにかっこいいのに！』

突然、舞ちゃんが大声を出した。僕と青海は同時に振り返る。

「全然モテないって言っただろう？ホント駄目なんだよね〜俺。」

あ、この人青海の言う通り激鈍だ。きっとその鈍さで、数々のアップローチを蹴ったんだね。っていうか、告白された事にも気付いてないんだろうなあ。

『じゃ、じゃあ、私が先輩の彼女に立候h うぐっ！』

せつかくの告白を全部言いきる前に、青海が舞ちゃんの口をふさいだ。って、あれ、鼻と口ふさいでない？

『んん〜ッ（苦しい！）』

「ちよっ、青海やバイバイ！舞ちゃん死ぬよ！？」

『ぶはっ！ハア、ハア、ハアー！！』

あ、やつとはなした。

「キモイから息切れするな。」

『テメエエエエ！！ふざけん』

「お前さ、翔の事好きだったんじゃないのか？」

舞ちゃんのもつともな怒りをさえぎり、質問する青海。相変わらずオレ様だ。

まあ、確かに舞ちゃんは先生ラブだけど…

『翔兄は愛してるよ でも、花形先輩には恋してるのVV』

「……………」

舞ちゃんの主張に、青海は黙りこむ。愛と恋、かあ。なんかすごい乙女化してるなあ。

「なあ、なに話してるの？」

先輩はそう言って、ズイツ、と僕等の間に入ってきた。

『秘密です！ウフーVV』

キモイよ舞ちゃん。

「ええー、教えてよ。」

『えへへ』

「……………（殴りてえ）。」

心なしか、青海からドス黒いオーラが滲み出てる様な…（汗

「なんか、本当に舞ちゃんいいよ。妹みたいで可愛い」

さわやかに言う花形先輩。

『…妹？』

その瞬間、空気が凍りつきました（体験者A）。恐るべし天然さわやか激鈍好青年。

さすがに今の発言は、傷付いたんじゃ

チラリと横目で青海を見ると、肩を震わせ、笑いを堪えてた。

…何その複雑な優しさ

## 第20回戦 傷付かない恋

### 第20話 正真正銘ボケと天然ボケ

前回に引き続き、藤森幸希が視点をお送りします。

今の状況？前回と同じく、

凍りついた空気に

固まったヒロイン

気付かない天然先輩

笑いを堪えてるサド魔王

いや、どうしようコレ。さすがに焦る。なんか舞ちゃんはいつ泣きだしてもおかしくないし、青海は今にも爆笑しそう（なんて奴だ）。

「なになに？俺なんかおもしろい事言った？」

笑えない事言ったんだよ！！ああ、この人バカだ！自分の失言に気付いてないよ！っていうか、この空気をどう解釈したら、おもしろい事言ったになるんだ！！



『ッ』

「ま、舞ちゃん。」

ど、どうしよう。マジ泣きとか冗談じゃない！

『…先輩。』

それとも怒りにいくのか！？でもさすがに殴っ『近親相関しましよ  
うお兄ちゃん！！』

僕の焦りと悩みを遮った舞ちゃん。

「「「……………」。」」」

えーと？なんて言っ  
た？

キンシンソウカン？

ええええええええええ！！？

バカだ！この娘かなりのバカだ！バカだバカだとは思ってたけど、やっぱりバカだあ！

「キモ。」

青海が軽蔑と嫌悪感を、表情いっぱいに出して呟く。

いつのまにか笑み消えてるし！舞ちゃんも傷付かないのが、そんなにつまらないか！！歪みすぎだよ性格ツ！

「近親相関は犯罪になるよ？」

「禁断の関係ってよくないですか!？」

「漫画か、ドラマみたいだね」

どっちかツツこめ！

「幸希、俺竹刀とりに行くから一旦帰る。」

「もう戻ってくるな。」

何コレ？流華ちゃんの言う通りじゃん！2分の5がツツコミだよツツ

他に誰かツツコミしてよ！僕1人じゃつらいから！って、他にツツコミいるっけ？

青海は本当に帰ったし、流華ちゃんも舞ちゃんの事になると一切ツ

ツこまないし、翔先生はやる気0だし、鈴は恋愛知識0だし（近親  
相関の意味知らなそう）、…うわぁ！！

ツツコミ全然ないじゃん！！ 青春ゲーム ってこんなにボケま  
みれだったの！？お願いだから、ツツコミ担当の新キャラ出して！！

『私先輩のこと大好きです』

「俺さ、兄弟いないから舞ちゃんみたいな妹ほしかったよ」

『今度から私を妹と思って下さい！そして可愛がって下さいvv』

「舞ちゃんおもしろい！」

もういいよ。ふたりで会話楽しんでて。

「やつほー、幸希。」

「戻ってくるなって言っただろ。」

教訓：ポケ同士にシリアスは成り立たない

第21回戦 翔の恋愛模様 前編 (前書き)

V みんなの夏休み編 V

## 第21回戦 翔の恋愛模様 前編

名前：高橋 翔

自称27歳 性別：男

職業：教師 外見年齢：20歳

その他不明

### 第21話 やる気なし教師の実体その1

『ラン ランラランランラン ランランララン ララランラ  
ランランラン ララララ…ん？ララ…あり？ラララ…』

補習の帰り、ヒロインこと舞様は某ジブリの歌を口ずさむ（途中で意味分からなくなったけど）。

はいはい、どうも皆さん！最近やけに視点をとられる一応ヒロインの舞です！

これって、私視点で話進むんじゃないかった？まったくふざけんなチクシヨ！。

だいたい、いつまであるんだこの補習は。あれ以来、鈴来てくれな  
いしさあ？そういえば、旅行終わってからあんまり鈴と遊んでない  
なあ。久しぶりに誘ってみようかな？

『ふたりでゲーセンにでも行くか。…お？あれに見えるは』

マイダーリイイイイン！！

『超ラッキー！久しぶりに会えたあ！おーい翔に……』

私は声をかけようと思ったけど、できなかった。なぜなら、そこに  
は翔兄と仲良く話す女の子が……。

ゆ、許せない！！

『翔兄イイイイイ！！』

「は？って、ぐはッ！！」

舞はシャイニグウィザードをかました（！？）

「しよ、翔君大丈夫？」

うづくまる翔兄に、オロオロする女の子。可愛いじゃないかコノヤ  
ロウ。

「…いきなり何す」この可愛い女の子は誰？酷いよダーリン！私の

事は遊びだったの？教師と生徒のドラマみたいな関係をやリたかつただけなの？それとも出来心で私にあんな事やこんな事をしたつて言うの！？」

ガクガクと翔兄を揺さぶる。つていうか、今日は伊達眼鏡かけてないんだ。ヤバ、そのギャップにトキメキシユ

「お前いい加減な事言うな。あんな事やこんな事つてどんな事だ。愛、まさかとは思っけどコイツの言う事」

「翔君、こんな幼い娘に…！」

「信じたよ。」

『どうにか言つたらどうなの！？』

「お前もうしゃべるな。」

冷たツツ！舞は悲しいぞ。こんなに翔兄を愛してるのに！！

「ちよつと翔君、可哀想だよそんな言い方。」

「……愛。」

ちよつと翔兄？なにかなそのしおらしさは。

まあ、確かにこの女の子は可愛いと思うよ？外見的に、翔兄より1つか2つくらい下に見える。その前に翔兄は何歳なんだ？

私がジツと見てると、その女の子は視線に気付き、頬を染めながら



にっこり笑ってこう言った。

「私、竹内 愛。<sup>まな</sup>翔君のこ、恋人です。」

ハイ、核爆弾投下。

舞のハートは原爆ドームさ。

## 第22回戦 翔の恋愛模様 後編

### 第22話 やる気なし教師の実体その2

いや、まあ、うん。なんとなく雰囲気で分かってたけどさ。そんな初々しく言われると余計に…ね？翔兄がこんな清纯派と付き合ってたなんてカルチャーショック。

『…らしくないね。』

「何がだよ。」

私の言葉に、即聞き返す。

『いや、翔兄がこんな純なお付き合いをしてるなんて。しかも年下。』

「俺と愛は同い年だ。それに今は清楚系だけど、夜になるとすごい乱れ。』なに言ってるの翔君ッ!!」

翔兄の教育上よろしくない発言に、顔が真っ赤になる愛さん。ああ、なるほど

S M か。 （ツッコミ不在）

「舞ちゃんは翔君の…」

『ヒモです。』

バシッ

『…嘘です。翔兄のクラスの浅野舞です。』

なにも叩かなくてもいいじゃん！チクショー翔兄め。飄々としてる  
ようで、艶やかな関係持ちやがって！！

このままじゃ悔しい。こうなったら、質問攻めで翔兄の好みをゲッ  
トだぜ！

『ハイハイ愛さん！』

「どうぞ舞ちゃん」

『ふたりは付き合って何年ですか！？』

「恋人歴7年です！」

長ッッ！第1回負け…と。

『どんなきっかけで付き合いましたか？』

「高校生の時、席が隣だったの。最初私の片思いだと思ってたけど、翔君が席替えの時告白してくれて…。」

あ、甘ああああい！あの翔兄が、そんな…！

え、でも高校生のときから7年付き合ってるから、翔兄の年齢は…、止めた。数学ムリ。

「じゃ、じゃあ、翔兄高校生の時はどんな感じでした？」

今みたいにやる気なしだったかな？学校もあんまり来ないような。今でいう鈴？あれは単なるヤンキーか。

「翔君、すごいモテてたんだよ。かつこよくて、頭もよくて。付き合った当時は女の子に嫉妬されて大変だった…。あ、あといつも寝てたなあ。」

楽しそうに話す愛さん。なんか急に口数多くなったよ。

「……翔兄、青春してたんだね。どうしたら今の性格に陥るんだろ？。」

「陥るってなに？お前俺のこと本当に好きなわけ？」

「あ、いい天気だよね今日。」

「なにそのかわし方。」

でもやだな。私全部負けてる。年齢のハンデは大きいよ。翔兄が口リコンだったら良かったのに…！

『…ふたりは別れる予定ない？』

上目使いで尋ねる。

「失礼な事言うな。あるわけないだろ？」

「翔君ツツ／＼」

おいおい、なにふたりの世界にひたってるの？私は除け者か？ふざけんなチクショー！

だいたい翔兄、彼女いたくせになんで今まで黙ってたのさ！！

『おい、そのバカップル。ラブシーン見せびらかすのは人様に迷惑ですよ？』

「…舞、まだいたのか。」

『帰れってか？帰れって遠回しに言ってるのか？』

「ま、舞ちゃん…その」

『あ、お気になさらず。キスでもなんでもしちゃって下さい。』

「……………／＼」

あゝあ、恥じらっちゃって。翔兄こういう娘がタイプなんだ。ケツ！

『ふん！どうせ私は独り者ですよー！』

私が恨めしそうに言うと、翔兄は面倒くさそうにこう言った。

「何言ってるんだ、お前には青海がいるだろ。」

『はあ！？笑えない冗談止めてよ！私が、青海と……………？キャハハハハ！有り得ない！！』

「爆笑してんじゃん。」

ハッ！そんな事はどうでもいいんだっ！青海って単語久しぶりに出たから笑っちゃったぜ テヘ

『あゝ、なんかイマイチな雰囲気だけど、悲しいモテないちゃんは寂しく独りで帰りますよ。ぐすっ』

私は皮肉気味に吐き捨てる。うわ、翔兄全然気にしてないし。泣くぞ私。

……………うん、なんか癪に障る。最後に愛さんにライバル宣言してから帰ろうかな？

私はそう思い、振り返った時、愛さんが私に向かい叫んだ。

『そんな事ない！舞ちゃんは可愛いよ！』

は？可愛い？…えーと……………可愛い？…私の事？

……………。

『大好きです愛姉!!』

「都合いいオイ。」

第22回戦 翔の恋愛模様 後編 (後書き)

キャラクターファイル

・竹内愛 たけうちまな

身長：158cm

体重：43kg

ポジション：翔の彼女

モットー：一日一善

好きな人：翔

翔とはバカカップル。恋人暦7年。おしとやかで清楚系。



## 第23回戦 喧嘩上等

『喰らえ！オーバー ウル春雨！！』

「フツ、お前は既に死んでいる…！」

ガンッ ドゴッ バコンッ

第23話 シラフで夜露死苦は恥ずい

『ああ面白かった』

私は今人気の『なんだか色々混ぜてみたよ闇アイス』を舐めながら、満足気に言う。

「くそ、また俺の負けかよ！」

隣でぶすくさ文句を言う鈴。はい、前々回で言った通り鈴とゲーセン来てます！さっきまで格闘ゲームやってたのさ

『ハハハ、舞様に負けなんて言葉存在しなくてよ？』

「はん、俺があそこで必殺技決めてたら間違いなく俺の勝ちだった

ね！」

うわ！負け惜しみだ！いるんだよねーこういう奴。

「だいたい不気味なアイス食べやがって…少しなら食べてやってもいいぞチクシヨー。」

『誰がやるかコノヤロー。』

「どうせ不味かったんだろチクシヨー。」

『素直に食べたいと言えコノヤロー。』

不毛な争いを広げる。あ、でもこのアイス意外といけるよ？ちょっとカブトムシの味するけど。

「…一口くれ。」

最初からそう言えばいいのに。天邪鬼だなあ

『ハイ、どうぞ。』

「ん……。」

私が鈴が食べやすい様に、持っているアイスを鈴に向ける。鈴は瞳を輝かせながら、舌を伸ばす。

鈴は私と似てチャレンジャーだから、きつと新商品のこのアイスに興味心をそられたんだろうな。

『お味はいかが？』

「…！！」

ペロリとちよつと舐めた瞬間、口もとを押さえる鈴。  
ん？どうした？あまりの珍味に声も出ないか？

『おい、大丈夫かあ？鈴ー？鈴くーん？鈴サマー？』  
「ま、まずウウウウー！！」

うわ！ビックリした！いきなり叫ぶな、心臓どつかの穴から飛び出しちゃうぞ！？

「ペツ、ペツ、なんだコレ！？未知との遭遇じゃねえか！なんか夏の虫的な味するし！」

あ、気が合うな。やっぱりウチ等以心伝心だね

「お前よくこんなの食べれるな！！口直し口直し！」

鈴はわめいて、持つてるアイスを豪快に口内へ運ぶ。

『うーん、鈴の食べてる【見た目チョコ、味はコーラアイス】だって、同じ様なレベルじゃない？』

私は鈴の持つてるアイスを指さして言う。後で一口もらお。

「バッカ、見た目チョコなのに実はコーラアイスなんだぞ？なんかスゲーじゃん！」

『結局はただのコーラアイスでしょ。見た目チョコって…コーラもチョコも違い分かんねえよ。』

ようは茶色いアイスじゃん。普通に売ってるじゃん。この子絶対詐欺あいやすいよ。しっかり者の嫁さんをとる事を勧めるね。

『ねえねえ、次どこ行く？ここのゲーセンのゲーム制覇しちゃう？』

私は今だに苦い顔してる鈴に尋ねる。この素晴らしい味を理解してくれないなんて悲しいや！

「制覇って…お前それでゲーム壊した事あるじゃん。逃げんの大変だったし。」

『世の中壊してなんぼよ。そのくらい別に、のわっ！』

ドンー！

なにかにぶつかり、一体なんだと思い上を見ると

…見なきゃよかった

「誰にぶつかってんだよ。」

あらら、絵にかいたようなハプニング。なんか雰囲気的にだいぶお怒りの様子。不良は心狭いなあー。

「なにやってんだよ舞。お前しよっちゅう誰かとぶつかるよな。」  
『衝突事故の恋を期待してるから。今回ハズレだけど。』

とんだゴリラにぶつかったわ。こんなじやなるもんもならないって。

「ハズレってどういう意味だ！！」

ヤベ、聞こえたみたい。怒られちゃったよ。

相手は3人組か。うわー面倒くさい。逃げよっかな？あ、ダメだ。

もう鈴がメンチきつてる。ってかメンチカツ食いてえ。

『ちよつと鈴ー？相手3人よ？年上よ？ダメだつて。』

「バカ言うな舞！売られた喧嘩は買うのが男だろ？怖じけついてんじゃねえ！！」

楽しそうに言う鈴。この子喧嘩好きだからねえー。さすがヤンキー。

『って、ちよつと待て。なに私も男みたいな発言してんの？危うくスルーしかけちゃったよ！』

「喧嘩上等！！」

聞いちゃいねえ。

「なんだデメエ、コイツの男か？」

3人組の1人が言う。アレ？私達カップルに見える？じゃあ今デート中ってやつ？んなバカな。

『悪いけど私には花形先輩と翔兄がいるのよ！』

「花形先輩って、お前が前にぶつかつた？なに、その後なんかあった？」

『そつえば鈴に報告忘れてた！近親相関する事になったのオーエへVV』

「え、なに？新陳代謝？」

『あ、あと翔兄はSMカップルだった。』

「えすえむ？」

頭の上に？マークを浮かべる鈴。ダメだ、この子そういう知識全然無い。硬派ってわけじゃないのに。女子と結構話すしさ？（恋話に

なると消えるけど)

「お前等、なにぐちぐち言ってるんだ。逃げる相談か？」

ニタニタと気味悪い笑みを浮かべて言う。ついコイツ等の存在忘れてたや。

「へっ！3人くらいどうって事ねえ！！」

相手を挑発する鈴。やる気満々だね。

『程々にしなよ鈴。』

「彼女の前でヒーロー気取りか？そんなに魅力ある女に見えねえけどな。チビだし寸胴だし。」

『ぶっ殺して鈴。』

「言われなくても！！」

鈴はそう叫んで、勇敢にも3人相手と闘う。

イヤー、実に生き生きしてるね。輝いてるよ、相棒。

「あー、楽しかった！もつとやりあいたかったぜ」

『あ、鈴ヶガしてる。無茶するからあゝ。』

「なんだよ、舞だつて途中から参戦してきたじゃん。」

もう日が沈む頃、さっきの喧嘩での事を話しながら、私達は我が家へと向かっていた。

え、勝敗？そんなの決まってるじゃん！私達コンビに、負けは有り得ない

## 私達の恋人以上の絆

## 第24回戦 ガールズラブ（前書き）

前半、流華が痛いです… 青春ゲーム にしては、甘く微シリアス？ちよつといい話。最後、幸希が可哀想だけど（笑）



## 第24回戦 ガールズラブ

『すーすー。…うつ！カレーパ マンが、カレー パンマンが！  
ザ・破裂』

可愛い寝言（病気）を言いながら、私の隣で眠る舞。  
この可愛さは反則よ！襲いたくなるじゃない！で、でも寝込みを襲  
うなんて邪道…！

『むにゃ、流華……………』

寝返りをうち、私の名前を呟く舞。

「！！」

胸の鼓動が一気に上がり、顔に熱が集まった。

「舞。」

眠ってる舞の頬に、手を添えると、柔らかい感触が伝わってくる。  
そして、その健康な桃色をおびた唇に……………

「ッ！？」

私、今なにしようとした？舞に、舞にキス

「邪でゴメンなさいー！！」  
『ぬぁ！？』

第24話 レズだって愛なんだ

「って、事なんだけど…」

「いや、いきなり部屋に來られて『って、事なんだけど』と言われても。」

「バカね、そのくらい察しさないよ！だから男って嫌いなよね！」  
「帰ってくれるかな流華ちゃん。」

静かに怒る藤森。このままじゃ本当に追い出されそうだね。話すの面倒くさいけど、それじゃ何も始まらないし、仕方ないわね。

「なるほど…。」

私の話を聞いて、困った様に笑う藤森。なに軽くひいてんのよ。

「ええ。そこで色々考えた結果、藤森に相談するか、本気で舞を私のにしちゃうかの2択しかないなと…」

「いやいやいや！どんな2択！？なんか違うでしょ！！！」

「で、どうすればいいと思う?」  
「シカト?」

ああ、私なにしてるんだろう。こんな事藤森に話してどうする気?

「ううスイマセン、実は私変態なんです。」  
「皆知ってるから。っていうか、自覚あったんだ。」

うわ、失礼なヤツ。私をなんだと思ってるの? 同性愛を差別するのはよくないわ!!

…でももし、私が舞にキスしたら舞は私の事怒るかしら? それとも軽蔑? 近づく事も許されなくなったりしたら、私そんなの

「快感じゃない!! 舞が言葉攻めとか覚えたらどうしよう! ご主人様って呼んじゃうわ!!」

「流華ちゃん本当は悩んでないでしょ?」

だ、だって今みたいにイチヤイチラブラブしてるのもいいけど、舞に跪くのもアリ…いや、逆に舞を優しくいじめるのも快感だわ。

「嗚呼どうしよう! 想像しただけで感じちゃう!!」

「変態レベルがアップしてるよ流華ちゃん。さすがに僕もひくよ?」

森の失礼発言にハツとする。

いけない、つい妄想モードに…。なんか話がずれてるわ! あれ? そ  
ういえば私、なにしにきたんだっけ?

「相談どこにいったのさ？」

「そうそう！それよ！！」

思い出した私は、ポンツと手を叩いく。すると藤森に苦笑いされた。

「私…舞が大好きなの。異常だってわかってる。」

「わかってたんだ。」

「なんか言った？」

「滅相ありません。」

…なんか気になるけど、話続ける。

「太陽みたいな笑顔も、時々見せる涙も、恥じらう姿も、怒る表情さえ、全部全部愛しい。」

幼い頃からずっと見てきた。気が付けば隣にいた大切な存在。守りたいって、そう思うのは今も昔も変わらない。

「舞も私の事好きって言うてくれる。でも、それがいつまで続くの？」

「……………流華ちゃ、」

途中で入った藤森の言葉を遮り、私は我儘なエゴを続ける。

「嫌われて、邪険に扱われるならまだいい。私が1番怖いのは、『無』だから。好きとも言わない。嫌いとも言わない。そんなの、堪えられない…………。」

シン、と空気が静まる。私は言い終えて後悔した。

藤森はきつと、安心できる言葉をくれる。私はそれが聞きたくて、藤森にこんな事言ってるんだ。優しい藤森に、甘えようとしてるのよ。

なんて、酷く醜いんだろう

「ごめん、やっぱ今のナシ。いきなり変なこと言って…忘れて。」

私は瞼を伏せ、立ち上がる。藤森の言葉を聞いたところで、それは私の自己満足になるだけ。

だったら今のまま、舞の重荷にならない程度に好きって言ってた方がりこうだわ。

「流華ちゃん。」

「…突然邪魔して、藤森に迷惑よね。帰るわ。」

私はうつ向きながらそう告げ、部屋のドアノブに手をかける。

「好きって気持ち、なんで異常なの？」

「……え？」

声に振り向くと、すぐ後ろに立っていた藤森と目があった。

あまりの近さに驚き、心臓がはねる。

「キスは、さすがにって思うけど、流華ちゃんの舞ちゃんに対する気持ちがいけないものなんて思わない。好意に、男も女も関係ないじゃん？」

「……………」

ほら、貴方は優しい。他人の悩みにいつだって嬉しくなる言葉をくれるもの。所詮私の自己満足、厄介な寄りかかり、都合のいい甘え。わかってる、でも

「藤森は、優し過ぎるのが欠点だわ……………」

私は藤森に柔らかに微笑みかける。

「ッ！流華ちゃ…！！」

スカッ

「ああースッキリした！やっぱり悩みは人に聞いてもらうのが1番ねん？どうしたの藤森？」

軽く伸びをしてから、藤森に視線を移すと、自分の肩を抱いていた。

「…掴むものに逃げられたから、自分抱きしめてるの。」  
「ふーん…？」

よくわからないけど、まあいいか。こころなしか、ガッカリ、って言葉が背後に見えるんだけど。

「ありがとね、藤森。じゃあ私帰るわ。」

私はくるりと向きをかえ、今度こそドアを開ける。

「え、あ、送ってくよー！」

焦ったように私を引き止める藤森。どこまでお人好しなの？

「うっん、今から舞に会いに行くからさ。アンタ邪魔になるじゃない？」

「アレ？流華ちゃん、さっきまでの感謝の気持ちは？」

「じゃあまたね！」

「いや、ちよつと、待つ　　！！」

バタンツ。

僕の言葉とは裏腹に、空しく響くドアの閉まる音。

おかしいよね？普通ここまでムードあがったら、ねえ？

「あそこでやっぱり抱きしめとけば良かった…って、なに言ってるんだ僕！」

もう誰もいなくなった部屋、独りボケツッコミ。

「やっぱりジャンルがコメディーだしね…恋愛に変えてくれないかな？そうすれば、あの時ガバツと……いやいやいや、ダメだよ。付き合っていないのにそれは…。でもさ、僕的に（あと2時間は続く）。」

藤森 幸希

別名【微笑みの貴公子】

またの名を

【キング・オブ・ザ・ヘタレ】

舞は大好き。男は嫌い。でも舞が好きと言っなら、私もそれを好きになりたい。高橋翔先生や、北林、花形先輩だって…。

あなたが好きと言っものを、私も好きと言えたなら、涙が出る程嬉しいから…



## 第25回戦 雨の日の憂鬱

第25話 楽しきやいいじゃん

バリ、バリ、ペラ…ゴクン。

『キャハハハハ!!マジ面白ッ!ってかこのポテチうまッ』

床に寝そべり、ポテチを食べ、ジュースを飲み、漫画を読む。

ぐうたらのお手本の様なこのお方は、悲しき事に我が姉【浅野舞】。

あ、紹介遅れました。僕はこのどうしようもないお方の弟、【浅野瑠璃<sup>るり</sup>】です。ついでに小学6年生。

さて、外は本格的に雨が降ってきて、父は仕事、母は買い物。洗濯物は、干しっぱなし。しかも大量に。

「姉さん、雨降ってきた。洗濯物取り込むの手伝って」

『ん〜?今お姉さんは忙しいからお断りいー』

……姉さんのことは大好きですよ。時々殴りたい衝動にかられますが。

「あの事、みんなに言ってもいいのかなあ？」

『ギクッ』

「姉さんの秘密バラし『手伝わせて下さい！そりゃもう！是非！！』

姉さんは涙目でそう叫び、一目散に外へ出てく。普段からああなら助かるのに。

雨に濡れながら、必死に洗濯物と格闘する姉さん。なんかタオルにむかって罵声をあげてるし。あんなのと血繋がってるんだ僕。

『ちよつと瑠璃！少しは手伝ってよ！？』

「頑張れ頑張れ」

『鬼イイ！！』

いろいろわめいてるけど、聞こえないふり。いつも僕ばかりにやらせてるんだから、たまにはね。

『チクシヨー雨が冷たくて気持ちいぜ！今なら私、空から竜呼べる気がする！！』

……聞こえないふり。馬鹿馬鹿しくて、突っ込む気もしないよ。

『ああー冷たかった!』

姉さんは濡れた髪をタオルで、ガシガシと乱暴にふく。

「いい水浴びになったんじゃない?」

フツ、と微笑むと、姉さんは顔を歪めて僕を睨んだ。

『~~~~もう!ふてぶてしく笑っちゃって、可愛いすぎ!~!』

そう言つて、ギュツ!と抱きついてくる。うわ、湿った臭いがするし。

「弟相手に欲情しないでよ」

『ウルセー!そんなに可愛い瑠璃が悪い!!小学生とは思えない落ち着きと、優しい鬼畜なんてめっちゃツボじゃん!』

ブラコンだなあ。あんまり禁断の關係に興味ないんだけど。

「離れてよ姉さん。雨の日はただでさえ湿気が鬱陶しいのに、なんか姉さんネバネバしてて気持ち悪い」

『ネバネバ!?何それ私カタツムリ!?』

「いや、ナメクジ」

『ヒドッ!~!』

なんやかんやで、姉さんは僕から離れた。そして再びぐうたらモ―

ド。

「だらしがないよ。姉さんの将来が本気で不安」

『バカね〜大切なのは今じゃん？それにうちの学校エスカレーター式だから浪人の心配もないし』

そう言つて、お菓子に手を伸ばす。ここまでマイペースだと、ある意味尊敬するよ。

「…………宿題は？」

『いざとなつたら流華と幸希にやつてもらつ』

なんかもう、姉さんの友達に同情する。僕はそう思いながらも、姉さんが口にした名前が気になった。

僕も姉さんのことは言えないくらい、シスコンかもしれない。

「流華さんは知ってるけど、ゆきって誰？」

『ん？なに、気になるの？大丈夫よー彼氏なんかじゃないから！ウフフVV』

バシッ、と僕の背中を叩き、気持ち悪く笑う姉。嫌悪感がこみあげてくる。

「……………」

『ん？急に黙ってどうしたの？』

「みんな聞いてエー！実は姉さんって『いやああああ！！ごめんなさい！お願いだからそれは言わないでー！！』」

秘密は最大の弱味だね。え？結局なんの秘密かって？話しちゃった  
ら秘密じゃなくなっちゃうから、内緒。

## 第25回戦 雨の日の憂鬱（後書き）

キャラクターファイル

・浅野瑠璃あさのるり

年齢：12歳

身長：150cm

体重：39kg

成績：オールファイブ

最大の汚点：不能な姉

最大の美点：有能な自分

舞の弟。駄目な姉を見て血筋の危機を感じ、必死の努力をした。策士でやや腹黒。

## 第26回戦 夏祭り

### 第26話 久しぶりの再会

『君がいた夏は、遠い夢のなか。あ、って、かー！切ないよー！！』  
夏休みも残り僅かな今日この頃、私と流華は浴衣に身を包んで夏祭りに来ています！

「舞かわいいー、浴衣超似合ってる」

頬を真っ赤にして、私を下から上まで眺めてくる。いやあ、照れるねえvv

でも、流華の方が綺麗だと思っなあ。もともと肌白いから、紺の浴衣がよく映えてるし、長い髪は簪さして本当和風美人って感じ。全然中学生に見えない。

どーせ私は寸胴さ！っていうか、流華の隣にいますとすごいチンケな娘に見えるんだけど？そんなに背低くないのにい！

「舞、なにしたい？」

私の気持ちも露知らず、楽しそうに尋ねてくる流華。チクショーかわいぜ！

そのかわいさに免じて、ちんちくりんに見られてもいいわ私！いや、やっぱちんちくりんは嫌。

まあ、そんな事はおいというて、私は流華の質問に口を開く。

『そりゃ、夏祭りといったら……』

『おらあ！逃げんじゃねえ真つ黒目玉親父！！ちよ、邪魔なんだよ赤い奴！お前はもう要らないの！私の家に大量発生してるの！！！』

どうも、流華です。ただ今舞は都合により視点ができないので、私、葉月流華がお送りします。

いま舞がやっているのは金魚掬い。夏祭りの定番ね。舞が必死に狙っているのは、まあ、言わなくても分かるだらうけど、でめきん。

あーあ、袖まくって、浴衣濡らして。……………キャッ！セクシーチラチラはだけちゃってるよ！

で、でもそんな姿を他の男に見せないでえ！！

「流華ちゃん？」



ひとりの世界に入りこんでいたのを、名前を呼ばれ、ハツとする。声の方向に振り向くとそこには

「藤森、と……ゲッ」

「露骨に嫌そうな顔するな」

嫌な顔もしたくなるわよ。藤森の隣にいるのは、大がかなりつく程嫌いな高梨青海。

せつかく舞を独り占めできていい気分だったのに台無しだわ！

「流華ちゃん、1人で来たの？」

「え、舞とだけど……いま金魚掬いしてて」

「あれか」

あれ呼ばわりするな！って、ああ！高梨青海が舞のほうに！！マイハニーの危機よ！

「高梨青海！ちょっと待ちなさ　きゃっ！」

ガクン、と腕を引っ張られた。

「……なにするのよ藤森」

私を止めた目の前の男を睨む。だけど、その張本人は全然怯まず微笑みながら、

「あまり青海の邪魔しないであげて？」

と言った。

なにそれ、アイツの邪魔って。…ハッ！ま、まさか、もしかしくても……！

「ふ、藤森ってコツチなの？」

私は片方の手を立て、口の横に当てがい聞く。すると、漫画みたいに藤森がずっこけた。

（どうしたらそっちにいくのさ……！）

という藤森の心の中のツツコミは誰にも届かず、すでに私は高梨青海となにか言い争いしてる舞に、完全に意識が向いていた。

「あのさ、流華ちゃん。」

遠慮がちに、藤森が口を開く。

「祭、一緒にまわ」

「今舞見てるから話しかけないで……！」

「……スイマセン」

誘うことすら許されなかった、哀れなる藤森。

心なしか、藤森の周りに凄い負のオーラが漂っていたけど、舞に夢

中な私は気付かなかった。

只今でめきんと格闘中の舞です

「お嬢ちゃん、もう諦めた方がいいんじゃない？」

『黙れクソ親父！！』

「え、それもしかして俺の事？ぐすっ」

話しかけてきた店のオジサンを軽くあしらひ、再び標的を睨む。

ああもう！イライラするなあ！

コイツ鈍いくせに重いんだよオ！ダイエットしろコノヤロウッ！！  
6時以降なにも食うな、倅田 未になれるから！

「なにやってんだよ、お前は」

イライラMAXになっていた私に、ふってきた聞き覚えのある声。  
見上げればやはり、想像通りの人物。

『ま、まきたさん…！』

「誰だよソレ。俺は青海だ」

『あ、なんだそつちか』

「そつちもなにも無えだろ」

突然現れたライバルに少し驚きながらも、私の神経はやっぱりめきんに向いてた。

青海はしばらく悪戦苦闘してる私を見てたが、不意に隣にしゃがみこむ。

『……？なにさ？』

視線に気付き、怪訝な表情で尋ねた。だってジロジロ見てくるんだもん。青海はその質問に表情変えずに答える。

「お前でめきん狙ってるわけ？」

あら、聞き返されちゃった。

『まあね。っていつか邪魔しないで』

「全然取れてねえじゃん」

そう言う青海が見るのは、私の手に持たれた、水だけ入った空のおわん。

私は即座にバツ、と後ろに隠した。それをニタニタと、黒く笑う目の前の腹黒魔王。

ちよっ、ヤバイこれ。かなり恥ずいです。え？私に羞恥心なんて無

いつて？私だつてかよわい乙女だ！

「下手だなあ、お前。」

勝ち誇った様に上から目線。かなりウザイんだけどオ！水槽にいる金魚口に突っ込むぞ！！

「オッサン、俺にもひとつくれ」

『！！！』

なに、まさか私に喧嘩売ってるのこイツ。…フツ、バカにしゃがって、その喧嘩買っわ！！

『オジサン、あたいにももう一つちょうだい！』

「お嬢ちゃん、でめきんサービスであげるから止めときなつて……」

『うるさい！その髪がカツラって事は調査済みなんだ！バラすぞコノヤロー！！』

「ちよつとなに言っちゃってるのオオオオ！？」

動揺するオジサンを尻目に、私は早速始めようとしてる青海に向かって、ビシ！と指さし（人を指さしてはいけません）

『制限時間は3分！でめきをより多くとった方が勝ち！“でめき”だけかよ！”ってツッコミは受け付けないぞ文句あるかチクシヨ！！！！』

と舞流ルールを叫ぶ。青海はそれを聞き、私の方を向いた。絡む視線が火花を放ち、お互い不敵に笑う。

さあ、戦闘開始だ!!!

『はにゃゝ疲れたあ』

「寄りかかんな、キモイ」

青海の背中に頬をあてたら、べりっとはがされた。優しくねえなチクシヨー。コットン100を見習え。

あれからわたし達は金魚掬いで、でめきんだけを何匹も採ってたらオジサンに勘弁して、と泣かれた。

仕方なく、勝負をつけるために射的・ヨーヨー釣り・ラムネイッキ飲み・綿菓子早食いなどやったけど、全部引き分け。

ドーン!!

夏の風物詩の音がこだまする。わたし達は祭から少し離れた所にいたから、辺りの静けさが心地好い。

『おっ！花火始まったじゃん！此处見やすいや、ラッキー』

そう言つて、私は地面に座り込む。青海もそれに合わせるように隣に座った。

『ふいへいはへえ』

「林檎飴口につめて喋るな」

青海に指摘され、口から飴を出す。アレ？口から飴を……ちよつとちよつと、口から飴を出……

『ふへふあひー！！（出ない）』

「はあ？何言つてるか分かんねえよ」

ヤバイヤバイマジヤバイ笑えない程ヤバイ。

口から飴が出なくなりました。かなり苦しい！無理に口の中に突っ込むんじゃなかった！！

でもわたしは自分のやりたい事をやり、それはとてもワンダフルなことなので後悔なんてしたくありませんby舞！！

つて、そんなことより

『はふへへえ！（助けてえ）』

「ちょ、お前の顔笑えるんだけど。写メ写メ」

ちよつとなに携帯取り出してんの！？いやぁカメラ向けるなあ！こ  
んなのばらまかれたらお嫁にいけない！！

『ひゃへほおー！！』

「冗談だよ、うるせえなあ」

んまあ！奥さん聞きました！？最近の若い子はいたいどうなつて  
るのかしら！！え？3時からタイムセール？んまあ急がなきゃ！！

なんて脳内世間話してたら

『……………ぷはッ！！』

唐突に、青海に飴を引っ張られた。あら見事、簡単に抜けちゃった  
わよ。

『うゝゲホゲホゲホ！』

「うるさい」

ピシヤリ、と冷たく言われる。どこまで嫌な奴なんだ。こちらら室  
息死するところだったんだぞ！！

『つてああー！！』

「次はなんだよ」



嫌そうな表情を顔一面にはりつけわたしを見る。

だってコイツ、あたいの……！

『りんご飴エエエ！！』

私はガバツ、と青海に掴みかかる。

『なに勝手に食べてるの！なに勝手に食べてるの！？』

「2回言うな、ウザイ。コレは手数料だよ」

そう言つて、カリ、と林檎をかじる腹黒魔王。チクショー、そのポーカーフェイス殴りたい。

「舞」

『ああ！？』

「その格好だけど……」

『え？』

青海の視線をたどると、わたしの浴衣姿。いろいろやったせいか少し（だいぶ）着崩れてるけど。

あ、ヤベ。でめきん掬いのせいでビョショビョショだ。後でお母さんに怒られるかも。

『な、なにさ…？』

黙ってる青海の言葉を待つ。青海はこちらを見ずに興味無さげに一言。

「下着透けてる」

大輪の花が夜空に咲いた。

青海の言葉が一瞬私の思考回路を停止させる。

えーと？下着が？透けてる？えーと……ええ！？

理解した途端私は怒りに任せ、力の限り回し蹴りをかました。が、簡単に避けられた。

『よけるんじゃないねえ！！』

「無理言っな」

その後わたし達は、流華と幸希に見つけられるまで格闘したとかしなかったとか…。

## 第26回戦 夏祭り（後書き）

もう少して夏休み編終わります（たぶん）！！30話とか区切りのいいあたりで…

## 第27回戦 プールにGO！

「男同士でプールって寂しいねえ…。やっぱり舞ちゃん達も誘ったほうが良かったんじゃない？」

「あ、俺もそう思う。大勢のほうが楽しいし」

不満をタラタラこぼす幸希と花形先輩。今日俺達3人は、プールに來てる。

第27話 海がダメでもプールがある！

「……なんだよその目は」

ジイーと俺を見てくる幸希たち。男2人に見られたって、不気味以外のなにものでもない。はつきり言えば不快だ。

「だって青海が嫌がったんじゃない。あんな奴と行きたくないって言うてさ」

口を尖らせ、俺を睨む幸希。俺はそれを無表情で一瞥し、なんにも言わずただ水に身を任せる。

「だいたい中学生の男3人で流れるプールってどうなのさ」

入りたいと言ったのはお前だ。あ、今のもう8周したし。

「それに先輩、15歳にもなって浮輪は無いでしょう」

「だって楽じゃん？俺この浮遊感好きvv」

文句の多い幸希にマイペースな先輩。誘われたから来たけど、かなり後悔した。知らず知らずのため息が出る。

時々チラチラと目線を感じる。幸希も気付いてるようだが、何も言わない。

先輩は……当然気付いてない。しかも超リラックスモード。このまま寝そうだな。

「キャッ、こつち見た！」

「やっぱかつこいいー」

近くからそんな黄色い声が聞こえる。

（別に見た気は無いんだけど）

美形が3人集まっていれば、目立つのも無理ないか。キヤーキヤー言われても嬉しくないけど。

あ、もう9周目いっちゃうじゃないか。いつたい何時まで浮遊してる気だ俺達は。

何度目になるかわからないため息をこぼそうとした時

『バツシャアーン!!!!』

「「「!?!?」」」

変な効果音と共に、はた迷惑な水しぶきが俺達の前に盛大にとんだ。

「な、なに?」

「んん?」

あまりの光景に戸惑いがちな声を出す幸希。先輩は目が覚めた様だ。

しばらく静まりかえる。次第にプールからブクブクと泡が浮かぶ。

かなり嫌な予感がする。傲慢じゃないが、いや、やっぱり傲慢にしよう、俺の勘はわりと当たる。

『パンパカパンパンパーン!可愛さ100倍舞ちゃんマーン』

ほら、予感的中。

『いやあ、偶然ってすごいですねえ。むしろ運命?先輩、わたし達

はきつと赤い糸が複雑に絡み繋がってるのですよ!!」

「舞ちゃん相変わらずおもしろいね」

気持ち悪いこと言つて、先輩に抱きつく舞。気持ち悪い。

俺は片膝を折り、プールの縁に座った。

「流華ちゃん達2人で来たの？」

「ええ。お祭デートは前回あんた等に邪魔されたからね。…だから今回は、今回こそはと思つてたのに」

「る、流華ちゃん？」

こころなしか、えーと、あ、そうそう葉月流華の腕が震えてる。

「なのになんでまた居るのよオオオオ!!」

「うわぁ!ごめんなさい!!」

首を絞められ、涙目になりながら必死に謝罪の言葉を述べるヘタレ貴公子こと幸希。ホント駄目だなアイツは。

『ねえねえ!今回の水着はどう?見よ舞のビューティーくびれを!』

「すごい可愛いよ」

『!!--!』

いきなりバカ女が叫びだしたと思ったら、先輩は持ち前の天然で褒めてるし。かゆいんだよ、どこのバカップルだ。

『そ、そんな先輩だったら……可愛くて綺麗でセクシーで内面の美しさがあるまま外見に滲み出てるなんて褒めすぎですう！照れるじゃないですかvv』

そんなこと言っただけ。

なんで俺の周りは変人ばかりなんだ？

レズにヤンキーにやる気ナシ教師、救いようの無いバカ女ときてる。そもそもD組に入っただけが間違いだった。

でもまあ、とりあえず…

『青海！！25m競泳、私との決闘受けなさいッ！』

「ハイハイ女王様」

『誰が女王様よ！シンデレラとお呼び！！』

「シンデレラって、灰被りって意味だぜ？」

『んまあ！人の揚げ足ばかりとってこの子は！！』

退屈しのぎには、丁度いいだろ。



## 第28回戦 双子従姉妹の来訪 前編

### 第28話 ザ シンメトリー

『フッフ…人間はこうして滅亡してったのね。』

いや、滅亡してないから

『確かにこの暑さは…そう、まるで煮えぎった熱湯の湯気をギリギリで浴びてるよう……。』

変に生々しいし。

『いけない、このままでは皆共倒れだわ。早く、早く救援を……！』

そう言っで、姉さんはフラフラと立ち上がり、受話器を取った。黙って見ると、姉さんの指がボタンをゆっくり押していく。1 / 1 , 0と……

110!!? ?

「ちよつとなに110番してるの!？」

『はい…そうです…え?…ヘモグロビン?…はは、違います

よ！』

うわぁ！話の内容かなり気になる！！

「ああもつ、いい加減にしてよ姉さん！！」

『あつ！！！！』

僕はそう叫び、バカ姉から受話器をひったくる。だって警察だよ警察！！大事になったらどうするのさ！

「…いや、ホントすいません…え？暑さのせい？違います。もとからおかしいんです…はい……。」

目の前にいるわけでもないのに、ペコペコ謝る。なんで僕がこんな事を…。この人の弟に生まれてきてしまった宿命だな、きつと。

ガチャン、と少し乱暴に受話器を置く。なぜか僕がさんざん怒られたし。

『ペッパァー警部！私達これから いいところ』

肝心の本人は、なんだか昔の某アイドルの歌をノリノリで歌ってる。とうとう壊れたか？いつか崩壊すると思ってたよ。って違う違う。そうじゃなくて

「姉さん頼むから変な事しないでよ。」

『いいじゃん電話くらい』

「かける相手が問題なの！！」

僕が怒鳴ると、姉さんは頬を膨らませ、プイッとそっぽをむく。別

に可愛くないし。

『チエツ。いいなあ美奈ちゃん家は、長電話し放題〜!』

「ヨソはヨソ!ウチはウチ!」

『お母さんのケチ!!』

「我儘言っんじゃありません!つて誰がお母さん!?」

ああもう!うつかりのせられた!!僕弟だよ?2つも年離れてるんだよ?

ハアアア、と盛大なため息を吐いた。恨みや呆れをこめて。

『ため息つくと幸せ逃げるよ?まあそんな時は、ハッピーキューピット舞ちゃんが不幸な貴方に幸せを届……』

「殴るよ?」

なおふざけた事を言う姉さんを一刀両断して、…なんかまだぶつぶつ呟いてるけど、だいたい誰がキューピット?姉さんは、なれてせいぜいパチモンだよ。もういいや、害虫とバカな姉は無視にかぎる。

ピンポン

ソファに寝そべっていた私の耳に玄関のチャイムの音がとどく。

むう、行くの面倒くさいな。

私は無視を決めこみ、クツシヨンに顔をうずめた。体温より低い温度のクツシヨンが心地好い。本気で動きたくないやコレ。

トントントン、ガチャ…

ほら、瑠璃が行ってくれた。あの子よくできた子ね、きっといいお嫁さんになれるわ

…ん？何も話し声が聞こえてこないけど、いったい誰が来て

「うわあああああ！！！！」

『！！？』

い、今のって瑠璃の声だよね？あんな大声出すなんてめずらしい！

『…と、とと、うわっ！』

ドシンッ！！

『痛…』

瑠璃の声に驚いて、派手にソファから落ちてしまった。私は強く打った腰をさすりながら、声のした方を向く。

『瑠璃ーどした？？ドアを開けたら目だし帽被った男とナイストウミートウーしちゃった？』

「で、ででででで出た！！！」

『巨神兵が?』

「いいから窓の鍵全部閉めて!!」

私のボケに何ひとつ突っ込まず、バタバタと走り回る我が弟。家中の窓閉めてどうするつもりだ?

『ちょっと瑠璃。いつたいなに……』

さすがにただ事じゃない気がして、口を開いた瞬間

「「甘いね瑠璃!!煮すぎた砂糖並に甘いよ、カaramelになっちゃうぞ!!?」」

聞き覚えのある息ぴったりボイス。

『まさか……!!?』

驚いて後ろを振り向くと、そこに立っていたのは私の従姉妹(双子)。

「「久しぶりだね、舞ちゃん、瑠璃」」

見事なクローンが、笑顔で声を合わせそう言った。

第28回戦 双子従姉妹の来訪 前編 (後書き)

新キャラ登場しました！双子の詳しい設定はまた次回

## 第29回戦 双子従姉妹の来訪 後編

前回のあらすじ

おかしくなりそうな程暑い今日この頃、突然従姉妹が来ました

### 第29話 ザ クローン

『転校？私の学校に？』

「うん」

ふたりは声を揃えそう言った。さすが一卵性の双子だわ。

「…にしても、ひどいよ瑠璃！私達の顔見た途端、ドア閉めるんだもん。」

「まあ、鍵かけてなかったから、簡単に入れたけど。ツメが甘いねえ。」

キヤハハ！と笑う青葉と若葉。…瑠璃、窓全部閉めても、ドア鍵がけなきゃ意味ないでしょうが。そんなに慌ててたのか、珍しい。

「なに？久しぶりに会ったら美人になってて照れちゃった？」

そう言って、瑠璃の腕に抱きつく双子の姉、青葉。

「ちよつ、止めてよ青葉！」

「私は若葉ですゝVV」

アレ？青葉じゃなかった若葉だった。前はポニーテールが青葉、ツインテールが若葉って見分けつけてたから、ふたりとも髪おろしてるとサッパリ。

『モテモテだね瑠璃。お姉ちゃんはちよつと寂しいよ。でも、私もそろそろ弟離れしなきゃだね。双子を恋人、両手に華。羨ましいぞシャルウィダンス？』

「意味不明なこと言つてないで助けてよ！」

「「瑠璃ったらかわいい」」

うーん、お邪魔しちゃ悪いかな？2年ぶりだけど、相変わらず瑠璃オモチャにされてる。昔から瑠璃、この2人にだけはタジタジだったもんね。

「うわ、どこ触つてんのさ！」

「私の名前当てたら止めてもいいよ。」

「若葉！！」

「ハズレ」

「わっ、ちよつ、止め…！」

会話だけ聞くと、そこはかたなくいかがわしい。でも、アレたんにくすぐってるだけだから。

『若葉、青葉。あんまいじめないであげて。』

私が助け船を出すと、瑠璃は感謝に輝いた瞳で私をみつめた。やた



っ、貸し1つ作っただぜ。

「はあい。瑠璃見ると、ついイジリたくなるんだよねー」  
「ねー」

そう言つて、瑠璃から離れる2人。  
なにがねーだよ、と瑠璃は乱れた服を整え、眉間に皺をよせた。不機嫌なのが一目でわかる。

『アレ？瑠璃どこ行くの？』  
「その2人がいない所！！」

怒鳴り気味に言い、ズカズカと部屋から出てく我が弟。勢いよくドアを閉めるもんだから、ビクツツと肩が震えた。そんなに怒らなくても……（汗）

「やりすぎちゃった？」  
「嫌われたかなあ？」

ニヤニヤと笑つて言い合う2人からは、言葉とは裏腹に心配してる様子は感じられない。ドンマイ、瑠璃！

『…話変わるけどさあ、転校するって話本当？』  
「ホントホント。」

気になっていた事を聞くと、少しも間を空けず、即答された。

『やっぱり2学期から？ふたりとも同じクラスに入るの？』  
「うん、夏休み終わったらね」

「っていつか、同じクラスって…自分等で選べるわけ？」

頭の上に？マークを浮かべ、2人して首をかしげる。双子の効果なのか、かなり絵になるや。舞、うっかり胸キュンvv

『ふふふ、そつか。青葉達はうちの学校の制度まだ知らないのか？』

「制度？」

「その笑い方気持ち悪い。」

ガンツ！！

『叩くよ？』

「もう叩いてるじゃん！それに今言ったの若葉だよ！？」

「ちよつと、私になすりつけないで青葉。」

言い争う青葉と若葉。チクショーややこしいんだよクローンめ！見分けつけさせるオ！！

よし、ここは仕方ない。似すぎてる2人の為に、親切な舞サマサマ（なにそれ）が一肌脱ぐか！ん？脱皮のことじゃないよ？私が本当に肌脱ぎ始めたら、さすがにみんなひくでしょ？

数分後

『これでよし……と。』

私は息をはき、額の汗を拭うそぶりをする。実際汗かいてないし。何故なら今の時代はクーラー！地球温暖化なんてクソくらえ

「「至上最悪のヒロインだね。」」

キャッ！軽蔑の眼差しが痛い！でも舞はくじけないッス！！

『まあ温暖化の事は置いて ほう、私のゴッドハンドで君達を別人のようにしてあげたよ！』

私はそう言つて、手鏡を2人に渡した。2人はどれどれ、と瞳をきらめかせ鏡を見つめる。

「「……………」」

アレ、リアクションがいまいち。黙りこんじゃったよ。

「「舞ちゃん、コレ……………」」

ん？なんか気のせいかな？2人とも震えてない？舞のカリスマでビューチーな髪型にしたから、あまりに感激して泣いちゃったか？

「なんで、なんで……………」

体だけじゃなく声まで震わせ、2人一緒にゆっくりと振り返る。なんか怖い話の『その人って、こんな顔してた…？』を感じさせる。

「なんで縦ロールウウ!?」

「私なんかチョンマゲー!!」

あー、なんか2人とも鬼の形相になってますよ。ちょっと身の危険  
感じるので、ここにてお開き!!

え?クラスについての説明?  
それはまた機会があったらね

第30回戦 8月31日

『今日で夏休みも終わりかあ。長いようであつという間だったな  
…。』

南東の空に浮かぶ太陽をみつめ、感傷に浸りながら呟く私の手に握られたもの。学生の敵であり、人生の中でもっとも目を背けたいソ  
レ。

そう、夏休みの宿題（白紙）

『……………。』

15分後

『……………。』

30分後

『……………。』

1時間後

『……』さっきからノートと睨み合って、なにがしたいの？」

痺れをきらしたのか、固まってる私に瑠璃が尋ねる。

『いや、ずっと見てれば私の眼力で燃えるかもと……』

「一生無理だと思う。変な現実逃避してないで、早くやったほうが利口じゃない？」

悪気はないんだろうけど、瑠璃の言葉はいちいち引つ掛かる。なんでこんな嫌味な性格になっちゃったのかな（お前のせいだ）。

でもお姉ちゃんは知ってるよ。瑠璃が本当は物凄く優しい心の持ち主だって！それに私の心は宇宙だ（某食ドラマ風）。

だからどんな事言われてもヘツチャラスカル

「だから散々言ったのに。本当馬鹿なんだから。」

ブチッ      なにかの切れた音

『さつきからグググチ×2うるせエエエエ！！馬鹿って漢字で言うあたりム力つくんだよオ！アンタは小姑かあ！？嫁イビリなのかあ！！？』

「ちよっ、ヘツチャラスカルはあ！？」

キレた私に、少したじろぐ瑠璃。でももう遅い。こうなった私は誰も止められない。

『だいたいアンタ最近目立ちすぎなのよ！そのせいで他キャラが出ないじゃない！！もっと花形先輩と翔兄をだせえ！！！！』

「姉さん落ち着い      」

~~~~~

瑠璃を救うかのように、鳴り響いた着信音。

『まったく、誰よ…』

「（助かった…）」

しぶしぶ携帯を取ると、画面には翔兄の名前が…

キターー（。。。）――

『ハイこちら貴方のハニー！え？デートの誘い？ちゃんと帰してくれるの？』

「とりあえず黙れ。」

怒られちゃった

『へへ、半分は冗談だよ。どうしたの？翔兄から電話くれるなんて。』

「半分って…まあいいや、だりいし。宿題の事なんだけど」

『……………え？マジ！？』

第30話 最終日はいつだって辛い

え？タイトル出るの遅いつて？

……………ね（殴）

『…で、今にいたると』

ベコンッ！！

『痛ア！ちよつと今ベコンって！なんか変な音した！！』

涙目で叫び、私のミラクルな頭を殴った青海、通称腹黒魔王を睨む。

「なにが、…で、だよ。ふざけんな。」

『いやいや、宿題全部やったら翔兄がデートしてくれるって…。』

そう、さっきの電話は翔兄が私に宿題やらせるために条件をだしたの。もちろん了解したさ

「そんな理由で俺等と呼んだのかテメエは。」

青筋をピクピクと痙攣させる不機嫌王子は、今にも蹴りがきそうな程お怒りのご様子。

【俺等】

もう気付いた人もいるでしょうが、ここには私の白紙の宿題を手伝ってもらわなくいつものメンバーを呼んでいる。

「うるさいわよ青海。舞に逆らわないでちょうだい。」

流華VVなんて優しいの

「まあまあ。このくらいの問題楽じゃん。」

先輩頭良かったんだ。てつきり、あ、いや別にそういう意味じゃ……！

「はあ？なんで-と-で+になるんだよ。」

…鈴を呼んだのは間違いだったか。

「っていうか、字で僕等がやったってバレるんじゃない？」

苦笑いしながら、言った幸希。部屋が今の一言でシーン、と静まる。

「「「確かに……」」」

ぬあ！！声をそろえて言うな！そして哀れむような目で私を見ないで！！

『お、終わればいいの！』

そうよ、翔兄は宿題全部やったら、って言ったんだから別に大丈夫なハズッ！！

「帰る。」

青海が不意に呟いて、立ちあがる。ヤバイ、本当に帰られたら翔兄とのラブ デート計画があ！！

『ちよつ、待つてよ青海様！やってくれた暁にはラブリーガール舞（自称）の投げキッスをプレ』キモい触れんな帰る。』

ぐはッッ

ダメージ大！残りHPが……！

冷たく言い捨てた青海は、小さく舌打ちをして部屋を出ていった。ボタン、とドアの閉まる音が響く。

「なにアイツ。舞、あんな奴のこと気にしちゃ……」

私を見た途端言葉を遮った流華。そりゃ声も出なくなるだろう。

私はかなりのダメージを受け、産まれたての牛……とは程遠いダースーダーのように唸っているのだから。

「ま、舞ちゃん？……」

『お、うみ……シュコー、死、殺……シュコー……、シュコー、腹黒……魔王……シュコー……許すべか、らず……』

脅えている幸希を尻目に、私は走った。

私の繊細なガラスのハートを傷つけたサディストに復讐するために

後日談

夏休みの宿題は健気な幸希と流華がやってくれたそうです

第30回戦 8月31日（後書き）

今回で夏休み編終わりです！！次回からは2学期の始まり
はイベントが多いので楽しみにしてて下さい！！
2学期

第31回戦 2学期スタート（前書き）

#2学期編#

第31回戦 2学期スタート

第31話 きたきたきたよ新学期！！

「おーいお前等席つけ」

ざわついた教室に入り、いかにもやる気無さげに呼びかけるこのク
ラスの担任、高橋翔。
みんな次第に席に着く。

「あー、なんだ。みんな夏休み楽しいことあったか？…と聞きたい
ところだが、だりいからパスね」

テキトーだなオイ。

『翔兄！私は翔兄との一夏の体験が印象に残ってますー！』
パスって言ったのに平気で無視したよ舞ちゃん。

「はいはい良かったな。俺は彼女とデートしまくりだった」

『！！！！うわーん！翔兄の浮気者オー！』

ああ！！あの娘泣き叫んで教室出てった！朝から授業放棄！？
っていうか先生彼女いたんだ！

先生の爆弾発言で、教室内がいつきに騒がしくなる。女の子はみんな、シヨック！とかヤダー！など言っている。モテるな先生。

「舞、舞が……。ここは追い掛けるべき？それともそっとしておく事が優しさなの？分かんない！私には分かんないわよ。もう愛なんて分かんない！」

なんかぶつぶつ呟いてる流華ちゃん。99%の確率で舞ちゃんからみだろうけど。

「じゃあ出席とるぞー」

じゃあってなんだ、じゃあって。

「全員呼ぶの面倒だからいない奴、挙手しろ……。よし、欠席ゼロな」

アバウト！！

「先生、北林君が来てません」

「あ？どーせ鈴はサボりだろ。アイツは始業式来るような奴じゃないしな」

ボリボリと頭をかきながら、心配してる様子はまったく無い。この人に教師免許を与えたのはいったい誰なんだ。責任問題だぞこれは。

「はよー」

ガラス、とドアを開け入ってきたのは、さっきまで噂されてた赤髪ヤンキー鈴。

「鈴来たのかよ、珍しい」

来たのかよ、って言い方はどうかと思うのは僕だけ？

「なんか舞に呼ばれてな。アレ？舞は？」

悲劇のヒロインっぽく教師出てったよ

『やつほー鈴！』

アレエエエ！？

おかしいよね？いつのまに帰ってきたのさ。ってか、切り替え早ッ！！

『あ、そくだ翔兄！私宿題全部やったよ！ほら』

笑顔で言い、夏休みの宿題を先生に手渡す。

違うよね、それほぼ僕と流華ちゃんがやったよね。

「おーよくやった」

『じゃあ約束のデートしてくれる！？』

そういえばそんな条件だったんだっけ。彼女いるのにいいのかなあ。

「って、お前コレなんか字違くない？教科によってバラバラじゃね？」

『ヤベッ！！』

「ヤベッ、じゃねえだろ。なめてんのか」

……だからバレるって言ったのに。

『だってこんないっぱい1人で終わるわけ無いじゃん！！しかも最終日！』

あ、開き直った。

「溜め込むのが悪いんだろ。罰で今日お前居残り掃除な」

宿題のノートで舞ちゃんの頭を軽く叩き先生は言った。

『そんなのヤダー！！』

案の定、文句を言う舞ちゃん。いやいやと何度も首を振る。

「安心しろ、鈴もつけるから」

「ハア！？冗談じゃねえよ！なんでオレまで！！」

鈴は不満を素直に口に出し、先生の胸ぐらをつかむ。

普通なら修羅場なんだろうけど、そんなの日常茶飯事な僕等は誰も慌てない。それどころか、やれやれ、と騒いだり、またか…と呆れる始末。おわったなこのクラス。

「はなせ鈴。どうせ1Pもやってないだろ」

「なめんな!!宿題は、その……アレだ。夜な夜なやってきた鳩たち」
「居残り決定な」

「最後まで言わせろオオ!!」

哀れに叫びながら、ブンブンと乱暴に先生を揺らす。
「っていうか、どんな言い訳だったんだろ?ちよつと最後まで聞きたかった…」

「ほう!!ダメだよ翔兄!そんな思春期の男女が2人で居残りなんておいしいシチュエーション!!」

「お前等は余程でかい事故がない限り、なにも起きねえよ。」

両手を頭につけ、困った様な嬉しそうなアクションをとる舞ちゃんに、先生は冷たくあしらう。

「だいたい私達以外にもやってない子いるんじゃない!??」

「アレ?青海来てないなあー」

「シカトオオオ!??」

普通に話をそらしたよこの人。舞ちゃんが可哀想にみえてくる。

あ、ついでに青海はここにいない。堂々サボリ。学校には来たんだけど、教室にまでは来ず、なんか屋上に行ったみたい。

「ったくアイツは…。俺以外の授業じゃ真面目なくせに、なんでこんなに態度違うかねえ？」

はあ、とため息を吐き、心底面倒くさそうに先生は呟く。

（屋上にいるって言ったほうがいいのかな）

そんな僕の心境を悟ったかの様に、先生は視線を僕に向け

「青海どこに居んの？」

と尋ねてきた。僕は少し悩んだが、ここは正直に言う事にした。

「屋上かゝダリイな」

先生は青海の居場所を聞いて、危機感まるでなしの声をこぼす。

「仕方ない。舞、お前ちよつと呼んでこい」

『はあ！？寝言は寝て言つて！翔兄の寝顔なんて萌えてあげるから
VV』

「お前に萌えを語る資格はない」

『そんな事ないもん！アキバとメル友だもん！』

話ずれてる！！

アキバとメル友ってなに！？

「ほらさっさと行け。お前等仲良いだろ」

『激しく否定するけど、翔兄に貸し作るのも悪くない。ってことで行ってきます！』

舞ちゃんはそう叫んで、教室を出ていった。：いや、そんな生徒がバラバラはまずいじゃないか？だからD組は色々言われるんだよ。

「よし、厄介払い成功」

そっという意図か。マジで最悪だなこの教師。

「舞イ〜！！ダメよそんな、屋上でアイツと2人きりだなんて！もしもの事があつたら私！！舞を止めなきゃッッ！」

「幸希、あの女を捕獲しろ」

早退していいですか？

『全く、なんでこの舞様が…』

私はぶつぶつ文句言いながら、屋上へと来た。

アレ？　そういえば屋上って立ち入り禁止じゃね？　鍵かかってんじゃない？

ドアを見ると、鍵は綺麗に外されていた。

……ピッキングしたなアイツ。

『犯罪だろ、ったく』

ため息と共に呟いて、私はドアを開けた。

「うわ、眩しい〜！」

9月になったとはいえ、まだまだ暑いなあ。これで風なかったら灼熱地獄だっつーの。

「え〜と、青海は…」

閣下（翔兄）の指令を守るべく、標的（青海）を捜す。広い屋上を見渡すと、丁度真ん中辺りに寝そべる者を見つけた。

「やりました閣下！　ターゲット発見です！　直ちに逮捕致します！！
そして私はご褒美いっぱい貰うのさ」

フッフ、これで今度こそ翔兄とデート&青海撃退をできる…！

「何言ってんだデメエは」

「うわぁー！」

びっくりしたぁー！いきなり出てくんなやー！

「高梨青海！上からの命によりアンタを……って人の話を聞けエー！」

ちよつとこいつムカつく！堂々と眠り始めたんだけどオー！！

「うるさい。人の安眠邪魔するな。襲うぞ」

……このマセガキめ。突き落とすぞコノヤロー。

「おい、勝手に寝るな」

『別にいいじゃん。アンタを連れて帰らなきゃ、私も帰れないし』

そう言って私は、青海の隣に寝転んだ。お、床温かくて気持ちいい

『ねえ青海、帰ろうよ』

「帰ればいいだろ」

『だからっ……』

やーめた。何度言っても無駄だコイツは。

あゝ、風が心地好い。最高の昼寝スポットだね。こりゃ眠くなるわ。

『寝そうだな。でもそしたら翔兄との約束が…』

「翔兄翔兄うるせえな」

『だって私の脳内はほとんど翔兄だもん』

「……………」

あり？青海黙ったぞ。私に原因あるコレ？

「……………気に入らない」

ボソッ、と小さな声で呟いた。

『は？なんか言った？』

「別に」

なんだよ、気になるじゃん。それとも君アレか？秘密主義者ですか？シークレットですか！？

「おい」

『んー？つわー！』

ちよ、ちよちよちよつと！顔近い！！

『な、なにに?』

いつのまにか腕握られてるんですけど!!

何コレ? 甘酸っぱい青春? 授業サボって大人の階段のぼる? 屋上で
チューとか? ムリムリムリ!!! 生憎私はシンデレラじゃないのさ!

「舞……」

『!!--』

固まって声も出ないわたしに、どんどん近付いてくる。両腕をきつ
ちり掴まれて、抵抗もできない。コイツこんな力あったんだ。この
際仕方ない、おとなしくこの雰囲気流されるか。この度舞は、ひ
とつ熱い体験を……!

『やっぱいやー!!--』

ドゴォ!!--!!

『青海のエロ王子イイイ!』

私は青海を殴った後、そう叫んで屋上を出た。

ヤバイヤバイ! あの無駄に美形顔でアップはキツイってばアア!!
私だって乙女なんだから恥ずかしいよー!!

「痛エ……」

頭を擦りながら、ゆっくりと起き上がる。なんてバカぢからだよ、本当にアイツ女か？

「おもしれえ」

もつと寝てたかったけど、あの赤面に免じて戻ってやるか。

俺は立ち上がり、教室に向かうべくドアノブに手をかけた。力を入れて扉を開ける。

「……あれ？」

開かない。言っておくけど、実は引くと開く扉だった、なんてオチはない。

「……鍵かけられた」

その後、30分かけ自力で脱出して、あの女を血祭りにあげたのは言うまでもない。

第31回戦 2学期スタート（後書き）

2学期編もよろしくお願いしますm（――）m
今回は少し恋愛要素入れてみましたけど：どうでしょう？夏休みも
全然進展しなかった2人だから、2学期は頑張っしてほしいですね！
！

第32回戦 居残り掃除の刑

きりーつ、礼

さようなら〜！

「あー！終わった。よし帰『どこ行くの鈴？』

」………舞；」

第32回戦 まあ王道だよ

ガンッ！！

「ああもうちたりイ！なんで掃除なんかしなきゃいけないんだよ
！！」

『ちよつと鈴！バケツ蹴らないでよッ』

今私と鈴は翔兄の指示により、罰の掃除中。

本当は逃げようと思ったんだけど、翔兄が………思い出すだけで恐ろしい！あの人は敵にまわしたくないと改めてわかったね。

んで、私1人やるのも癪だから帰ろうとする鈴を捕えて、掃除中なのです。

「やる気でねえー。こんなのサボって遊び行かない？」

うずっ

『だ、だめだよ』

「ゲーセン」

うずうずっ

『い、今お金無いし……』

「じゃあ、マッ。バーガーでもポテトでも奢るし」

うずっー!!

「……………な？」

チツチツチツチー ン

『サボりがなんぼのもんじゃーい!!』

「イエーイ」

すいません！舞は誘惑に負けちゃいました!!でも素直に生きるのが1番だと思うので後ろめたさはありません！

『居残りなんかそくらえ』

「なんだとテメエ」

え？

上をそーつと見上げると、…あら〜マイダーリン。青筋出して、素敵フェイスが台無しよ。

『翔兄…えっと、怒ってる？』

「いや、サボるぐらいで怒る程、真面目じゃないんで」

…その笑顔が恐いです。

「さりげなく何帰ろうとしてんだ鈴」

「ギクツ」

「さつさと掃除しろ。なにも完璧求めちゃいねえよ」

だったらしないでいいのに〜！

「舞、顔に出てるぞ」

…そんなに分かりやすい私？

「あのな、D組は期末大掃除しなかったんだ。俺は別にいいんだけど、教頭がうるさいんだよ。お前等だって、これ以上嫌な目で見られたくないだろ？」

翔兄、クラスのために？

「アレ？お前がメンドイから大掃除なしって言ったんじゃ…」

首を傾げて言う鈴。よく覚えてるなあゝってマジで！？

「…まあ、それはそれ」

「『オイイイイ！！』」

「じゃあ頑張れよー」

ヒラヒラと手を振って、教室を出ていつてしまった。
なんだよ結局翔兄が原因じゃん！！ちょっと胸キュンして恥ずかしいんだけど！

「逃げたな」

『逃げたね』

私と鈴は顔を見合わせて、盛大にため息をはいた。

『しょうがない。パツと見きれいにして帰ろう。お腹空いたし、ね？』

振り向いて鈴に尋ねると、当の本人はほうきをジッと見つめていた。

『どうしたの？ほうきに恋しちゃった？心配無用、皆には内緒にしてあげるから』

「なあ、舞」

『ん？』

私のボケをサラリと無視した鈴は、ほうきを持ったままニカツと笑ってこう言った。

「野球しねえ？」

『フッフ、私に勝負を挑むなんて、たいしたチャレンジャーね！』

私はボール（ぞうきん）を握り、不敵に微笑みかける。鈴はバット（ほうき）を肩にコンコンと軽く叩きながら、『それほどでも』と呟いた。

『私の豪速球ご覧あれ！私は第2のイローと呼ばれた女よ！！』

「配役的に俺がイチーじゃね！？」

『すきありイイ！！！』

「ツツコミ中にずるー！！」

私は出来るだけストライクゾーンを狙い（捕手不在）、力の限りボール（汚れたぞうきん）を投げた。

ガラッ

「お前等ちゃんとやって」

ベチャッ!!

「ゲ……」

鈴が青い顔して、恐る恐る黒いオーラが漏れている背後を見る。その瞬間『ヒッ』と奇声をあげた。きっと恐怖に歪んだ表情をしているだろう。

あちゃゝ、何コレ？漫画みたいな展開じゃん。

そう、丁度入ってきた翔兄の顔面に私の投げたボール（濡れたぞうきん）が、気味悪い音と共に張り付いたのさ。

「……ずいぶんと楽しそうだな」

ボール（粉ついてる以下略）を千切りそうなくらい強く握り潰し、真っ黒な微笑みを浮かべる翔兄。

A ひたすら謝る

B 逆ギレ

C とりあえず逃げる

D 言い訳する

「『Cだアアアア！』」

なんとか逃げれた私達だけど、明日学校へ行くのが怖いです…

第32回戦 居残り掃除の刑（後書き）

前回とは逆に今回はギャグで 舞と鈴はこんな仲だといひ！

第33回戦 学院案内

わたし達の通う私立星宵学院は、けっこう有名です。

第33話 転入生には優しくが基本

それはある放課後の出来事

『案内？私が？』

「うん」

私の1つ年下の従姉妹、若葉と青葉が訪ねてきた。なんでも学校案内しろとのこと。ついでに今日は髪型違うから判別つく。ポニーテールが青葉で、ツインテールが若葉。

『やだよメンドイ。クラスの子に頼めばいいじゃん』

「だって転入仕立てで、まだ馴染んでないんだもん！」

『先生とかは？』

「なんかやだー！」

なんかやだー、ってム力つくなぁオイ。

私には、帰って遊びに言っでゲームして菓子食ってゲームして瑠璃いじめてゲームして風呂入って寝るといふ、ハードスケジュールがあるんじゃー！

「ねえいいじゃん」先輩でしょ？」

『こんな時だけ後輩ぶるんじゃないー！』

「舞先輩イ」

『うつ…ダメダメ！』

「「シェイク奢るから……」」

『さあついてこい！ー！ー！』

食べ物と奢るに弱い浅野舞、2年D組14歳。

『ここが音楽室でえ、そっちが科学室。あと何かあったかな……』

貴重か放課後を潰し、ひとつひとつ紹介する私。

一応これではほとんどだと思っけど……この学校無駄に広いんだもん。去年はよく迷ったものだ。

「ねえ舞先輩……」

不意に若葉が口を開く。私は「ん？」と振り向いた。

「舞ちゃんはD組だよ。クラスによって何が違うの？」

うん、いい質問。それ聞いてくれないと一生読者様に説明できないね。っていうか、あっさり先輩なくなっただね。

「それ青葉も気になる！私達詳しいこと知らないしさ」

『そうなんだ。じゃあ説明しよう！実はこの星宵学院は結構名門なのです！』

うんうん、と頷く双子。それを見て、私は満足気に話し続ける。

『だから、頭のいい人から何か才能のある人が豊富！そこで学校側はそういう人の為に、クラスを分けたのです』

「「どんな風に？」」

はい！みなさん！ここがミソですよ？ちゃんと覚えておいて下さいね！？

『それはね、A組は頭脳派、B組は体育系、C組は金持ち、はいム

力つく。という感じに！」

「…じゃあ私達D組は？」

『一般クラス』

キツパリと言うと、2人して『えー』と不満の声をこぼす。まあ、分からなくてもないけど。

ついでに、私と幸希はB組、流華と青海はA組、鈴はC組に勧誘されていた。まあ蹴ったけど。もしかしたら、青海と幸希と鈴とは赤の他人になっていたかもね。っていうか、鈴ああ見えて金持ちだから。別荘とか持ってるし。

「一般かあ…そのわりには、私達のクラス濃いキャラ多いよね」

『誘いを蹴る物好きがいるからねえ』

2人はふーん、と頷く。

よし、さっさとシエ ク奢ってもらって帰るか！！

「あ、ねえ舞ちゃん！」

まだあるのかチクシヨー

「部活も見学したいんだけど」

『ええ』

「「シエイク」」

『さあ行こう』

私は餌につられ、…いやいや、可愛い従姉妹のためにまずは校庭に出た。

#

『左から、陸上部・テニス部・野球部・サッカー部だよ』

「なるほど。あ！かつこいい人発見！！」

青葉がサッカー部を指差して叫ぶ。私と若葉と一緒に『どこ！？』と言って目を向けた。

ダメだよ花形先輩は！！私の好きな人とらないでね！？

心の中でそう主張しながら、私は青葉の言うかつこいい人を探した。

「あ、もしかして今屈んだ人？」

「その隣の人！」

「えー屈んだ人の方がいいよ」

『だから誰！？』

言っておくけど、私は両目2、0だ！！特徴言え特徴を！

「えー？若葉ああいうのが好み？」

「優しそうじゃん！」

なんだか自分のタイプを言い合っている双子。

『だからどこ　あッ！！』

花形先輩はっけー！ーん！！

『花形先輩イイイイ』

気付いてくれるように、私は先輩に向かってブンブンて手を振った。
うひゃー！先輩今日もかつこいい　汗がキラキラ光っていて素敵！
あ、今笑った！さわやか～v v

『……あ、こつち向いた！』

先輩が私に手を振ってくれてる！感激だよ。　花形先輩大好きッ。
貴方の専属マネージャーやりたい！！

「「かつこいい」」

……だから誰の事？

「あ、そういえば舞ちゃんは部活入ってないの？」

「私も気になる！」

『あゝ最初は入ってたんだけど、色々あってね。実は……』

「長くなりそうだからいい」

ダブルで言われると2倍で傷つく!!ここ聞くところじゃん普通!

『……で、2人とも文化部とか体育館も見る?』

「かつこいい人見つけたからいいや」

「ねー」

だから誰……もういいや。

よし!今度こそシェイクだ!早くマク行こうー!!

『やっぱりシェイク最高!体が冷えてくVV』

その後、双子とマクナルドに着いて私は至福の時を過ごしてる。

あ、そういえば…

『結局2人は、誰の事言ってたの?』

そう聞くと、青葉と若葉は一緒にニコ、と笑う。息ぴったりだな君

達。

「名前分かったんだけどねー」

キャツキャツ言いながら、双子は私の目を見て見つけたかった人
の名前を言った。

「高梨 青海先輩」

「藤森 幸希先輩」

『ぶツツ！！！！！』

私はシェイクを壮大に吹き出した。

第33回戦 学院案内（後書き）

一応青海と幸希も美形設定だったので……、さりげなく主張しておきました。

第34回戦 中学1年生 前編 (前書き)

#中1編#

第34回戦 中学1年生 前編

それは私が、中学生になりたての頃の話

第34話 見た目と中身は表裏一体？

「えー、今回D組の担任になった高橋翔だ。一応27歳ね。言っておくけど、俺今年入ってきたばかりの新任だから、この学校の詳しい事は知らねえぞ」

ピカピカの1年生私達に、なんともだるそうに自己紹介する先生。だけど、27には見えない若さと、わりと整った容姿に女子はキヤアキヤア騒ぐ。ついでに、この時私はそこまで翔兄にゾッコンじゃなかった。まあ、かつこいいなとは思っただけだね。

「ねえねえ舞」

後ろから肩を叩かれ、『ん？』と振り向く。

「舞はどの部活入る？」

そう言った後ろの席の娘は、長い艶のある黒髪を垂らした私の幼馴染み、葉月流華。

『んー、料理部とか？』

もちろん食べる専門。

流華は？と尋ねると、舞と一緒にいいな、と綺麗に微笑んだ。マジで美人だなこの娘。私が男だったら絶対惚れてるね。

「お前等いま適当な席？じゃあ、名前の順で座れー。40秒以内でね、ほらいーち、にいー」

担任のめちゃくちな発言に、みんなは『ええー！？』と言いながらも、ガタガタと席を移動する。

『浅野だから…1番前かよチクショー』

私は自分の名字を恨み、席に着いた。浅野だといつも1番なんだよねー。1は好きだけど、席の1番前は嫌だ。早く結婚したいなあ。

「38、39、よーんじゅう」

先生のカウン트가終わったところで、みんなは見事着席した。私の隣も椅子を引く音がして、興味心たっぷりに横を見る。

……おっ、好みのタイプ

サラサラのやや紺に近い髪、真っ黒な瞳、綺麗な白い肌。一言で言うとうと美形だ。そこはかとなく、品もあり、落ち着いた雰囲気纏っ

ている。

私の視線に気付いたのか、その隣の男子は怪訝な瞳を向けてきた。

「何？」

うおー！これは不審者を見る目だ！いけないいけない！ここはフレンドリ〜にいかねばあー！

『わ、私浅野舞！よろしくね えーと、特技はアクロバット』

できるだけ明るく言うと、その男子は直ぐにそっぽを向いてこう言った。

「ウザ」

『……………』

間

ガッシャ

ン！！

『デメエ人がせっかく自己紹介してやってるのにイイイ！』

「バカ、放せッ…！」

私は隣のむかつく男子の胸ぐらを思いきり掴んで、殴りかかった。

フツ、思えばこの時から私はクラスの者に女として扱われなくなつたのね。ってことはコイツのせいじゃねえかオイ。

「センセイ、浅野さんと青海君がケンカしてます」

「本当さあ、初日から面倒くさい事止めろよな」

私はこれ以来、青海が大嫌いになった。

第34回戦 中学1年生 前編 (後書き)

青海との出会い、嫌いな理由を……。次回に続きます！

第35回戦 中学1年生 後編 (前書き)

まだ中学1年生の話です

第35回戦 中学1年生 後編

第35話 デストロイヤー

「痛え……」

あの狂暴女に殴られた頬を擦りながら、俺はため息を吐く。女に拳で殴られたのは始めてだ。

「保健室行つたほうがいいんじゃない？」

俺に濡らしたタオルを渡し、そう勧めてくる幸希。俺は軽く舌打ちして、受けとつたタオルを頬に当てる。痛みのせいで熱くなった頬が、やんわりと冷えていくのが心地好い。

「そこまで重傷じゃない」

でも…、と口ごもる幸希をシカトして、先程の騒動を思い出す。少し冷たくあしらつただけであんなにキレるなんて、どれだけ短気なんだ。あんな女と同じクラスになるくらいなら、A組に入っておけば良かったかもしれない。

「青海、なに笑ってるの？不気味だよ」

…どうやら無意識に笑っていたらしい。結局この退屈しなそうな事態を、内心楽しみにしてるみたいだ。

「っていつか、誰が不気味だ」

「ギャアー!!」

幸希に蹴りをいれて、俺は笑みを深くした。

『すいませーん、入部したいんですけど…』

私は料理部に入ることにした。だって部活で食事ができるんだよ？こんな最高の部はないね！

だけど、一週間後私は料理部をやめた。なんか試しに作ったクッキーを顧問にあげたら、次の日泣いて退部を頼まれたから。いったい何だったんだろ？

『すいませーん、入部したいんですけど…』

次に私はバスケット部に入った。前から誘われてたんだけど、まあ運動

は得意だしいいかなってね。だけど、後日退部することになる。え？　なんでかって？　実は顧問とケンカしちゃってさあ。やめてやる！　って、タンカきっちゃった。

『すいませーん、入部したいんですけど…』

次に私は、吹奏楽部に入った。なんか楽器できるのって、カッコイイ… 憧れる。でも後日、退部した。いや、その… 楽器壊して、責任逃れみたいな？　キャツ

「お前さ、これ以上ややこしい事しないでくれる？　いろんな先生から苦情くるんだけど」

なんだかんだで6月、私を職員室に呼んだ翔先生はデスクに肘ついて、渋い表情うかべながらそう言った。

『そんな事言われても、別にわざとじゃないし…』

いや、ホントだよ？　ガラス割ったり、ある先生のカツラとっちゃったり、教室水浸しにしたのも、全部悪気はなかったのさ。もっと言えば偶然？

「悪気ない奴が、超楽しそうにあんな事するか。お前、密かに【デストロイヤー女】って呼ばれてるの知ってるか？」

え、私、有名人？照れるわ〜！いったい誰がつけたのかな？

『でも大丈夫だよ先生、私帰宅部にしたから。少なくとも、部活関係じゃ事件起きないさ』

そう、あまりに続かないからもうやめちゃった。なんか請求されたら困るし。

「ふーん。まあ、俺はお前がどこに入部しようが、此方に害がこなきやいいけどな」

アレ？今、教師ならぬ言葉が聞こえた気がする。幻聴か？耳掃除しなきゃ。

「俺に迷惑かけるなよ。めんどいから」

……やっぱり言ったよ。

『……と、まあそんな理由で私は帰宅部に、ってオイ！聞いてる！？』

私はじゃれあっている双子に向かい、そう叫んだ。
人のメモリーを無視すんなや！

「だって舞ちゃんの事情なんか興味ないし〜」

「それより藤森先輩のこと教えてよvv」

ちよつとコイツ等むかつく！！せつかく過去話してあげたのにィ〜！

「本当にかっこいいよね先輩」

「ねー」

…青海と幸希の悪口流そうかな。仕返しきそうで怖いけど。

っていうかこの娘達、私の話聞いてなかったわけ？青海は初対面の私に『ウザ』って言ったんだよ？性格悪いにも程があるだろッ！！

幸希はヘタレだ。他に例えようのないくらいヘタレてる。とりあえずヘタレだ。

「藤森先輩って、貴公子って呼ばれてるんだって！！」

更に別名、キング・オブ・ザ・ヘタレだけどね。

「高梨先輩は王子らしいよ！」

……………。

なんだろ、イライラする。え、なんでだろ、別に青葉が青海を好きでもいいじゃん。

なんでこんなに、心の中がムヤマ

あ、わかった。私、わかつちゃったかも。私がこんなにイライラするの…

『1番かつこいいのは花形先輩だアアア!!』

1番の座は先輩以外認めない!つまり悔しかったんだ。はい、問題解決

第36回戦 ミーティング（前書き）

体育祭編

第36回戦 ミーティング

第36話 会議を始めよう

こんにちは、藤森幸希です。授業はもう5時間目、僕等D組は話し合いをしていた。そう、2週間後に控えている【体育祭】についての。

リレー

障害物競争

二人三脚

借り物競争 e t u ……

たくさんの個人競技を、学級委員の2人が黒板に書いていく。

その様子を、翔先生はつまらなそうに、椅子に座って見ていた。司会は面倒くさいから、指揮を全部学級委員に任せただよこの教師。

「では、皆さん。この中から立候補・推薦をお願いします」

時代はずれの、漫画みたいなぐるぐるメガネをかけた学級委員が、僕等のほうを向いて言った。
途端にざわつく教室内。皆友達同士で、相談してるみたい。

うーん、僕なにやろうかな。去年はリレー出たから、今年は違うのがいいけど…

『ハイハイハイ！わたし借り物競争出たい！！』

元気だなあ、舞ちゃん。

「ハイは1回。じゃあ、とりあえず浅野さんは借り物競争で」

そう言つて、メガネ君 本名は瀬崎君 が黒板に舞ちゃんの名前を書こうとした時、反対の声が。

「俺はアイツが借り物競争出るなんて反対だ。っていうか、アイツが生きている事に反対だ」

かなりめちゃくちゃな異議を申し立てるのは、外面完璧、内面腹黒の青海その人。

『デメエそれどういう意味だ！！』

「そういう意味だよ」

案の定怒る舞ちゃんに、青海はポーカーフェイスで対応する。

他のみんなは、またか…という目で、傍観者モードに入ってた。なんだかねで、この2人の喧嘩はD組の名物状態だからね。

「痴和喧嘩は放っておいて、他にもどんどん言っして下さい」

もう1人の学級委員、長い黒髪をお下げにしている矢野さんが、皆に向かって言う。だけど皆、喧嘩のほうばかり見てるし…。

早いうちに決めたほうが楽かな？えっと、じゃあ……

「僕、障害物きよ」だから、微生物といたらミジンコだろ！？」

……は？

「何馬鹿言ってるんだ。微生物」アメーバって昔から決まってるんだよ。なんでよりによってミジンコ……」

……なんか僕の意見遮られたんだけど。しかも、争いの論点変わってない？なんで微生物？

『うるさい！ミジンコをバカにする奴はミジンコに泣くんだぞ！！』

ミジンコに泣くってどんな状況？

「舞ちゃん、借り物競争はどこいったの？」

『え？……そうだ！借り物競争！！』

やっぱりこの娘バカだ

『わたしは借り物競争で好きな人と一緒にゴールするんだ！それで体育祭が終わった後、ドキドキしながら告白して、夕日が射す教室でキッスみたいな？きゃー！待ってて下さいね花形先輩VV』

うわ！すごい青春期待してるよ！っていうか、相手は先輩なんだ。まだ好きだったんだね……。

「そんな事はどうでもいいから、早く決めて下さい」

やや低い声で、矢野さんが睨み気味に言う。結構怒ってるね、コレ。

「…舞ちゃんさ、足速いんだし、リレー出れば？」

頭は確かに悪いけど、舞ちゃんの運動神経は異常な程、秀でてる。なんでB組の誘い蹴ったんだろ？まあ、僕も断ったから人のこと言えないけど。

『リレーかあ、じゃあ幸希一緒に出る？』

「僕、障害物競争出たいからさ。青海はどう？」

そう言っつて、チラリと青海を横目で見る。相変わらずポーカーフェイスで、考えがよめない。

『えー、青海私より足遅いじゃん』

「明けテスト3教科50点以下だった奴に馬鹿にされたくないんだけど」

『青海、人は成績じゃないのよ。天才と頭良いは違うの。エジソンが良い例よ。だからね』

「なんか殺意わく…幸希、俺、殺人者なるかも」

「物騒なこと言わない!!」

この人は本気でやりそうだから恐いんだよ！舞ちゃんは舞ちゃんで、

自分に都合の良い事言ってるし！

「ああもつ、ダリイよお前等。早く決めてくれ」

なかなかまとまらない僕等に、翔先生がやつと口を出した。

ゆるゆるのネクタイを更に緩め、頭を乱暴に掻きながら黒板の前へと出る。

「あのなあ、体育祭なんて来年もあるんだし、何でもいいじゃん。何をそんなに迷ってるわけ？」

黒板に寄りかかり、ずり落ちそうになったメガネをくいつと、中指で定位置に戻し、そう言った。

『先生、私達は一瞬一瞬を大切にしてるんだよ？だからそんな適当に決めたくないの。エジソンがいい例だね』

「舞ちゃん、エジソン関係ないから」

『じゃあクレオパトラ』

「偉人言えばいいと思ってる？」

だいたい『じゃあ』って君…。誰がこんな風に教育したんだろ、ゆとり教育どころじゃないぞ。

「とりあえず幸希は障害物競争。舞と青海はリレーでよくね？」

相変わらず適当な先生が、これまた適当にまとめた。

あ、でも僕は障害物競争決定？良かった。

「じゃあ私もリレー出るわ！」

突然大声を出したのは、舞ちゃん激ラブの流華ちゃん。今までおとなしいと思ってたら、やっぱりきたか。

「冗談じゃねえ。なんで舞や葉月流華と走らなきゃいけないんだよ。それなら俺は、幸希と一緒に障害物のほう出るぜ」

そう言つて、僕のほうを見てくる。見てくる、というより、睨むつて感じた。僕を脅してどうするの。

「いや、青海はやっぱりリレーやりなよ」

「……あ？」

青海は無表情を崩し、不機嫌な声を出した。かなり恐いけど、もう慣れたかな。

「藤森、私は青海と一緒に出るなんてごめんよ」

珍しく青海と同じ意見を言う流華ちゃん。まあ、仲悪いからこそだろうけど。

「だから、流華ちゃんは僕と障害物出よ」

「はあ？なんでよ！！！」

……そんな否定されるとショックなんだけど。

「僕は、あの2人にもっと素直になってほしいんだ」

口喧嘩している青海と舞ちゃんを見て、僕は呟く。

「……舞と青海が、なんて嫌よ」

怒りと哀しみの混ざった声で、流華ちゃんはそう言った。

意地っ張りは青海のほう。舞ちゃんは、きっと気付いてないだろう。でも流華ちゃんは舞ちゃんの事をよく見てるから、多分分かってる。僕だってそこまで鈍くない。

「ダメかな？」

「協力なんかしたくない」

「舞ちゃんの秘蔵プレミア生写真をセットで」

「今回だけならいいわ」

簡単に意見を変えたよこの娘。単純だなオイ。

方法とはにかく、一応了承をとった僕は、学級委員2人に向かい

「じゃあ、僕と流華ちゃんが障害物競争。青海と舞ちゃんがリレーで」

「不本意だけどね」

矢野さんがそれぞれの名前を書いていく。メガネ君、もとい瀬崎君は、他の皆にやりたい競技を聞いていた。

『えー！？ちよつと何勝手に決めてるのさー！』

「テメエ等俺の意見聞けよ」

……………無視無視。

「幸希もお人好しだな、友達の恋路を手伝うなんて」
「先生」

いつのまにか教室の後ろに移った先生は、一番後ろの席の僕に、周りに聞こえない程度の声で話しかけてきた。

「別にそういうわけじゃ…、っていうか、僕と流華ちゃんの話聞いてたんですか？」

「さあな。でも、なんとなく分かるんだよ」

意味深な言葉を吐く。恐いんですけどこの人。どれだけ観察力あるわけ？

「でも、ちゃんと自分の恋愛も進めようとしてるあたり素敵な性格だよな」

「……………なんの事ですか？」

「べつつにー」

だから怪しい言い方するな!!

第36回戦 ミーティング（後書き）

学校行事といったら体育祭ですよね！！クラス対抗戦にしていきま
す

第37回戦 僕等の休日（前書き）

青海視点

第37回戦 僕等の休日

日曜日、舞と青海は学校に来ていた。そう、体育祭の練習のため。

第37話 所詮個人プレイ

舞・青海の場合

残暑の太陽が突き刺さる校庭に、おれ達は立っていた。わざわざ休日にこんな練習に来た俺は、かなりイイ奴ではないか？なにか賞をもらいたいくらいだ。

『ふふふふふ…、B組に誘われたアクロバティックな私についてくれるかしら？』

気持ち悪い口調で、トントンと靴のつま先を数回鳴らしながら言う舞。

……なんで俺来たんだろ。やっぱり後悔してきた。

「リレーは出るの4人だろ？俺等2人だけで練習してどうするんだよ」

太陽を浴びた自分の髪を、片手でかきあげながら聞いた。舞は『ああ!』と手を叩き

『もう2人も誘ったんだけど、用事があるんだって』
と言った。

……もう2人って誰だ?話し合いのとき、後半聞いてなかったからわかりやしねえ。

『さあさあさあ!!--早速走るわよッ!』

半袖の裾を肩までまくり、やる気たつぷりに舞は言う。俺は勝手に出てくるため息を隠そうともせず、盛大にこぼした。

『なんだよそのため息、シラケるなあ』

「こんな暑い日に、なんでお前と走らなきゃいけないんだよ」

『いいじゃん青春っぽくて』

そんな青春ごめんだ。

『早く早く』と言う舞を尻目に見て、俺は諦めて了解した。

広い校庭で、2人並ぶ。舞は伸脚したり屈伸したりしてる。そしてこう言った。

『先にゴールしたほうが勝ち!負けたほうを買った人にジュース奢

りよ！いい！？』

「いい！？つてお前……リレーの練習でなんで味方の俺とお前が競走するんだ」

『都合のいいときだけ味方面しないでよ！結局貴方は1度も私のこと助けてくれなかったじゃない！！』

殴るぞテメエ。

『冗談だつてば！なに殴るスタンバイしてるの！？』

焦りながら謝る舞を見て、俺は振り上げた拳を下ろした。

『よし、ふう。えっと、とりあえずは走る練習！競いあったほうが速くなるし。まあ、どうせ私が勝つけどね』

「……へえー、言っじゃん」

ピリツとした空気がただよう。今誰か来たら、そいつ感電するな。

ゲームスタート！！

思いきり地面を蹴り、強くダッシュした。照りつける日射しはキツイけど、走ることによって感じる涼風が気持ちいい。

風で髪が後ろに流れる。舞は俺より2歩程先を走っていた。舞のやや茶色い髪は揺れてて、時々見えるうなじは汗で湿っていた。

ヤベ、負けるかも

そんな考えが頭をよぎった瞬間、俺はあることに気付いた。

「……おい、舞」

『何！？話しかけないで！！』

「これどこがゴールなんだ？」

『夕日が見える地平線のかなたよッ！！』

「……………」

俺は急ブレーキをかけ、走る舞の足元を引っ掛けた。

『へぶし！！！！』

奇声をあげ、顔面を地面にズザザーと擦る舞。笑えるくらい、派手に転ぶ。

舞はしばらく制止してたけど、バツと起き上がって、赤く擦れた頬を押さえながら叫んだ。

『な、殴ったね！？父さんにも殴られたことないのに！！』

いや、殴ってはねえよ。

「ゴールがなくて、どうやって勝敗決めるんだよ」

『だから地平線　　「死ぬか？」』

『スイマセン』

頭を地面につけ、土下座する舞。お前にプライドというものは無いのかよ。

俺は太陽を背にしゃがみこんで、舞の頭に手をのせ何度か往復させる。その行為に驚いたのか、舞は目をまるくして顔をあげた。

『いたッ！』

俺はそれを狙って、舞の額に強くでこぴんを喰らわせる。案の定、赤くなる額。加減難しいんだよ、コレ。

『なにすんだテメエ！！撫でたと思ったたらでこぴん？アレですか？これが噂のアメと鞭？私を手なずけようとしてるの！？』

額をさすりながら、ギャーギャーだかなんだかわからないけど抗議する舞。それが滑稽で、また笑えた。やっぱり自分はサドらしい。

『まったく、なんなんだアンタは』

ため息とともに呟いて、服の汚れを払いながら舞は立ち上がった。よく見ると、体のあちこちを怪我してる。いい気味だ。

『ああ、せっかく新発売のジュース買って貰おうと思ってたのに…』

泣いてもないのに、涙を拭う仕草をする舞。いつまでもグスグス煩いから、俺はため息をついて舞の腕をぐいつ、と掴んだ。

『ふえ？』

「そんなに欲しいなら、奢ってやるよ」

そう言うと、舞は大きな瞳を更に見開き、口を情けなくぽかんと開ける。うわ、俺かなり親切だ。

『……それは負けを認めたってこと』

嘘です、ゴメンナサイ』

舞の戯言を軽く睨みつけ、おれは舞を引っ張り学校を出た。

『おいしい』

近くのコンビニで、新発売とやらの【キャラメルチョコミルク】を買ってやった。舞は頬を押さえ、至福の笑みを浮かべる。

…そんなに旨いのか？

気になった俺は、舞からペットボトルを奪いとり、口内に流した。

『ああー！！ちょっと何勝手に飲んでんの！？』

「うわ、激甘……」

あまりの甘さに顔をしかめ、手に持った飲み物を落としそうになった。

『あげないわよ！！』

「いらねえよこんな甘いのに」

『その甘さがいいの』

この甘党め、糖尿病で死ぬ。

俺は飲み物を舞に返し、未だに残る甘さに眉を寄せた。甘いのは苦手なんだよ。

舞は俺から受けとったキャラメルチョコミルクをジッと見つめ、さつきから百面相してる。

「飲まないのか？」

『えっ！？いや、……』

やけに齒切れの悪い。顔赤くして、なんなんだよ一体。

あ、なるほど

ピンときた俺は、隣に座る舞を見てくく、と喉の奥で笑う。舞はそんな俺を見て、不愉快そうになに、と睨んできた。

「いや、お前も可愛いところあるんだなって」

『な、なにがさ!!!』

顔を真っ赤に染めて、俺に拳を飛ばしてくる舞。俺はその腕をパシ、と掴み、舞を引き寄せて耳元で囁いた。

「間接キス？」

『ッ!!!』

腹に蹴りをいれられた。

第37回戦 僕等の休日（後書き）

ちよつと甘酸っぱいラブコメを……

第38回戦 D組の隠密組織 前編

『では、行つて参ります』

「ああ、気をつけるよ、油断は禁物だ」

目の前の閣下は、レンズの細い眼鏡を、くいつと持ち上げ、神妙な表情で私にそう言った。私はこくと頷き、隣にいる相棒と目で合図する。

『必ずや、弱点を見付けてみせます』

「俺たちに不可能なんてこと、有り得ませんから」

強気な口調で、しっかり言い放つと、閣下は滅多に見せない笑みをこぼし、

「頼りにしてる」

そう言った。

こんにちは、舞です。え？なんか話間違っただけじゃないかって？いいえ、そんなことはありません。きつとあまりのシリウスに戸惑っているのですね。そんな読者様に、簡潔に理由を説明しましょう。

私たちの状況、それはスパイです！あ、でも今回は相手は他クラス。閣下の正体は翔兄。めずらしく私たちのノリにのってくれたあ、それと相棒はもちろん

「ヤベ、俺等かつこよくね？マジでスパイっぽくね？」

はい、鈴です！やっぱりこのこしかいないでしょvv

『では鈴、確認だ！今回のミッションは？』

「体育祭の他クラスの作戦を入手せよ！」

『その通り！じゃあ、まずは順番にA組から行くぞッッ』

「イエッサー」

ピシッ、と敬礼して、私達はA組に走った。

あ、言い忘れてたけど、今の時間は学活。きつと何処のクラスも明日の体育祭にむけて、話し合いしてるはず。そこを狙って私達は出勤するのさ

翔兄の許可とってるから、サボりじゃないよ！？

A組の場合

「Hereafter, the conference will be started. It is the final confirmation of tomorrow's physical education festival. Learn that A class is not only a brain.」

.....。

『なに言ってるのアイツ等、なに言ってるのアイツ等』

「儀式か？黒魔術の儀式か？」

こつそりと、ベランダから窓を通して覗く私達は、？を大量に頭にうかべる。

だって物凄い意味不明な言葉発してるんだけど。こえーよ、黙々とした空気に変な羅列こえーよ（混乱中）。

「うわあ、何語しゃべってたんだアイツ等？」

『さすがA組……奥が深いわ』

こそこそと聞耳をたてる私と鈴。ヤベエ、全然何しゃべってるか理解できない。スパイにならねえよ。通訳プリーズ！ああ、流華にも来てもらえば良かった！！

「……どうする舞？」

聞くに耐えられなかったのか、鈴が眉をよせて私に尋ねる。

『あの、アレよ。どうせA組の奴等は頭ばっかで、運動神経なんてカスなはずよ。閣下（翔兄）には、頭脳派プレイでくるって言うとかわ』

「…じゃあ、A組終わり？」

だって、あんな呪文みたいなの、聞いてたって頭痛くなるだけじゃん。私の頭破裂させる気か？言っとくけど、すごいもの飛び出てくるぞ。

B組の場合

頭脳派A組を立ち去り、現在体育系B組を偵察中。ベランダから現れ、キャッツ・アイよ。

「やっぱりいちばんの敵はB組かあ。そういえば、舞って入学当時はB組に誘われてたよな？なんで断ったんだ？」

赤く染まった髪をかきあげ、視線を向けてくる。

『うーん？だって、いろんなすごい奴と同じクラスよ？なんか無理。』

私、1番じゃないと嫌なの』

ひよこっ、と窓から覗きこみ、鈴の質問に答えた。鈴はそれを聞いて『ふーん』、とたいして興味無さげに呟いて、私同様、B組の教室を覗く。

『……ああー、なんか白熱してるなあ。荒井なんか握り拳つくちゃって、語ってるよ』

やけに意気揚々とした雰囲気の教室を見つめて、ぼそつと呟いた。

……あ

あまりに熱烈視線（違）を送ってたせいか、B組の奴と目が合った。うわ、めっちゃ変な顔してるし。

『鈴、1回引き返さない？』

「あ？なんで？」

なんでってそりゃアンタ、察してくれよ。

そうこうしてるうちに、私に気付いた男子が、目を見開いて口を開けた。

はい、めちゃくちや焦る5秒前 古
5、4、3

「あああああ！！！」

あり？2秒ずれたか？

ソイツが私を指さしながら、大声出して立ちあがった。膝裏で椅子倒してるし。驚くな、っていうほうが無理なのかもしれないけど、ナイスリアクションすぎるわ。

ソイツの声につられ、他の奴等も次々と私達を見る。鈴が隣であーあ、とため息まじりに、でも楽しげにこぼした。

『どうする？いきなりバレちゃったけど』

「はっ！決まってるじゃん！先手必勝、一石二鳥ッ！-」

鈴はいろいろとずれた四字熟語を叫んで、ガラツと勢いよくベランダのドアを開けた。

「お、お前等なにやってるんだ！授業はどうした！？」

いきなりの侵入者に、あたふたと慌てる荒井先生。ヤベ、おもしろえ。人を驚かすの私大好きだわ。

『よくぞ聞いてくれたわね！？さあさあ、聞いて驚け見て笑え！』

「俺たち2人、D組の最高秘密組織 いわゆるスパイだぜッ」

「『Aランク並の企業機密だから、内緒にしるよ？』」

パチン、とウィンクしてやる。一斉に『派手な隠密だなオイイイ
イイイ！-！』とツツコミが入るのは、3秒後。

第38回戦 D組の隠密組織 前編 (後書き)

次回に続く

第39回戦 D組の隠密組織〈後編〉

第39話 足して2で割ったらもとどおりじゃん

「お前等、いくらなんでも堂々すぎないか？」

仁王立ちする私達に、怒りを通りこしたのか呆れた口調で言う荒井。
B組の奴らはみんな怪訝な視線送ってくる。

『どんな時も偽るなと言われて育ったので』

「じゃあなんでスパイ？」

それはもちろん……その、なんていうかカッケーじゃん。コソコソするのは大嫌いだけど、人の秘密にぎるのは大好きだし。

『で、足して2で割ったらもうスパイになるしかないなと』

「いやいやいや、どんな理論だそれは」

「荒井ー、頭弱いくせに理論とか言うなよー。なんか痛いし」

「なんで呼び捨て！？っていうか、北林に頭のこと言われたくない

んだけど！」

荒井のバカだと同様な意味を含む言葉に、ひっでえーて唸る鈴。まあ傷付いた感じは皆無だけど。

「スパイってあんた……そんな卑怯な真似して恥ずかしくないのか？」

今まで黙って見ていた女生徒Aが、凄んで私にむかいそう言った。短い黒髪に、きつめの目付き。絶対気が強いよこの娘。

『ふっ、生憎、恥ずかしさというものは、とっくの昔にペーパーで優しく包んで水洗トイレに流したさ』

「全然上手いこと言っていないから！なに私かつこよくね？みたいな顔してるんだ！……って違う。ついツツコンでしまった」

見事なツツコミ（幸希並だね）をいれたかと思ったら、眉間に皺を寄せ、頭をふるふると揺らす。と思ったら私をキッと睨みつけ

「私、あんたにだけは負けないから」

……。

『えーと、会ったことあるっけ？』

そう聞くと、彼女は精一杯顔を歪めた。

「忘れたの！？私よ、小学校一緒だったじゃない！」

『マジで？鈴、誰だか覚えてる？』

「いや、俺と舞小学校違うし」

『チツ、使えねえ』

「なんつった？今なんつった？」

責めよる鈴を軽くシカトして、私はくるりと振り返りB組の奴らに

『優勝は私がもらった！』

宣言した

当然抗議の声が聞こえるが、そんなもんしるか。

『よし、ひきあげるよ鈴』

「アレ？喧嘩しねえの？」

「こんな大人数相手にやーよ。それに、なんとなく弱点わかったし」

ふふん、と自慢気に笑う。

すげー！と言う鈴と共に、私達は堂々とドアから出ていった。

「ちょ、ちょっと言い逃げ！？待ちなさいよ」

後ろからなんか聞こえるけど、きつと幻聴だ。

「いいのか無視して？」

『いいの。ああいう使い捨てキャラはいつのまにか消えてるものさ。次回にはもう出ないよ』

「誰が使い捨てキャラよ!!」

シ・カ・ト

さあ、次は金持ちC組だッ

私は文句の言葉を背中に浴びつつ、高笑いしながらスキップスキップ

C組の場合

「なんか乗り気じゃねえなー。C組はやめね?」

C組のドアに触れようとした私に、視線ななめ下で言う鈴。両腕は頭の後ろにまわされている。

『なんでさ、C組だけ調査しないなんておかしいじゃん』

そう私が首をかしげると、ぼりぼりと頬を掻き、不機嫌な表情をし

た。

「俺C組嫌いなんだよ。すかしてるっていつか、見下してるっていつか……」

『まあ金持ちのエリートだからね』

それに鈴だつてC組の予定だったくらい金持ちじゃん。財布にいつも札何枚も入れてる奴がなに言ってるんだか。

「舞だつて金持ち嫌いだろ？ほらアレ、自分に無いもの持ってる奴はム力つくじゃん」

『それは私が貧乏と言いたいのか？そう言いたいんだな？』

「なのにC組の奴ら、貧しくても、貧しいくせに、ハイテンションに頑張ってる舞みたいなの貧乏人を鼻で笑うんだぜ。酷くね？」

『ああそうだね。ホント酷いよね。金持ちが大嫌いになったよ。とくに目の前のヤンキー』

なんで？と首を傾げる鈴。無神経な上に鈍感か。つくづく友達でいることを考えるっつの。

『まあいいや。じゃあ開けるよ？』

そう言つて、私がC組のドアに手をかけたとき

「あ、舞ストップp…」

ハッとしたように鈴が制止した。焦った声色に『え？』と私が声を

もらった瞬間

ジリリリリリー……！！！！

けたたましい音が…。

『……鈴、なにこの音』

「非常ベル」

ケロリと答えられてしまった。

え、なに？もしかしてこれ私のせい？いやいや、私ただドアに触れただけよ？

「C組には関係者以外がドアを開けようとすると、非常ベルが鳴るんだよ」

ええ！？なにそのハイテク技術！

「ついでに今は少し触っただけだから非常ベルで済んだけど、完全に開けると電流が流れます」

『あぶなッ！このクラスあぶなッ！！っていうか、その敬語がムカつく！』

「時々ミスで先公たちも感電してるけどな」

ちょっと待ってよ。私がどこにツッコむって、同じ学園でこの設備の違い。それでもう教師という被害者が出てるのに、止めようとし

ないその図太さにツッコむよ。

「さて、非常ベルのせいでもかなり騒がしくなってきたけど、どうする？」

怪しく笑う鈴。なんでアンタはそんなに冷静なのさ。

私はそれにしばらく黙っていたけど、直ぐに笑みをはりつける。

『決まってるじゃん。私達はピンチに追い込まれたら、いつだってこうしてきたじゃない』

「そうだな」

パチン とアイコンタクト。

ふう、と息をおもいきり吐いて、背筋を伸ばす。

「『逃げろ

！！』」

その後

翔のもとに一枚の紙。それは舞と鈴からの、言わば報告書だ。
その報告書の内容は

《スパイした結果》

・ A 組…黒魔術

・ B 組…使い捨て

・ C 組…ツツコンでいい？

「……………」

数秒後、翔の手によってその紙はビリビリに破かれた。

第39回戦 D組の隠密組織へ後編（後書き）

久しぶりの更新ですいませんm（| |）m今までケータイ故障中だったもので……。もう直ったので、大丈夫です！

第40回戦 体育祭開催

広い広いコバルトブルーに、大地を照り付ける太陽。
今日は、体育祭当日

第40話 運も実力のうち

「とうとう始まりました、体育祭！この日のために、過酷な練習をやってきた人もいるはず！実況は私、3-D内山がお送りします！」

『本部』と書かれたテントの下で、マイクに叫ぶ。みんなはそれに歓声を揚げた。

（ノリがいいなあ）

額を伝う汗を鬱陶しそうに拭いながら、そんなことを思う。ああ、なんて暑い日。今日のために誰かてるてる坊主でも作ったのだろうか。

「優勝したクラスには純金製のトロフィー。更にMVPになると、豪華賞品が送られます！」

まわりの、特にD組のテンションがあがる。まあ、一般クラスだからね。みんなキャラ濃いけど。

隣を一瞥すると、青海が退屈そうに、テンションの高いクラスメイトを見てる。こんなに暑いのに、なんで汗かいてないんだろ。

「それでは、10分後に第1種目『2人3脚』が始まりますので、それまで皆さんは配置についてて下さい！」

内山くんこと実況がそう言う。僕は立ち上がり、眩しい太陽を手をかざして見つめた。

「みんな、優勝したいかー!？」

ビシッとハチマキを横で結び、シャツの袖を肩まで捲った舞ちゃんが、みんなの前に出て、大声でそう言う。

まわりはオオオオオオオ!!と叫んだ。

「賞品がほしいかー!？」

「オオオオーーー！」

「ニューヨークへ行きたいかー！？」
「オオオオオオーーー！」

「ステーキが食いたいかー！？」
「オオオオオオーーー！」

「ピンチになった主人公を助け、無言で去っていく、戦隊もののブラックのな役になりたいかー！？」
「オオオオオオオオーーー！」

……どうやら叫ぶ内容はなんでもいいらしい。まったくもって意味不明だ。いや、分かるけれども。

「姐御！」

『む、なんだ慶太』

舞ちゃんに向かい、ビシッと敬礼する宮内慶太くん。

「どうやら2人3脚三年生始まったようです！」

『なに！？三年生ってことはもしかしたら……。私はしばらく席をはずす！私の代わりは、ヤス！お前に任せる』

泰明くんを指差しそう言う。泰明くんは喜んで、と二つ返事で承諾した。

それを見た舞ちゃんは、瞬く間に三年生の種目を見に飛んで行った。

（大方、花形先輩目当てかな）

彼女の後ろ姿を見てそう思う。ランランと輝く瞳をする舞ちゃんは、普段から想像もつかないくらい、女の子だった。

……まあ、普段がアレ過ぎるだけなのかもしれないけど。

「暑くなりそうだな」

呟いた声は、舞ちゃんの行き先に気付いたのであろう、流華ちゃんの嘆きと青海のため息にかき消された。

僕はそんな2人に苦笑しつつ、プログラムを広げ、自分の出番をさがす。2人3脚、借り物競走、と並んで

（あつた）

3番目、障害物競走。

舞ちゃんと青海がでるリレーは、午前の部で最後だ。午後は団体競技で埋めつくされている。

『きゃああああ！花形先輩かつこいいーVV』

突如聞こえた、叫び声。思いあたる人物は1人しかない。明らかに上級生から不審な視線を向けられているのだが、おかまいなしみたいだ。

（先輩、2人3脚だったんだ）

ペアは誰かな、とか思いながら、僕はあの天然さわやか先輩の勇姿を見に行った。

第41回戦 体育祭〰️借り物競走〰️

第41話 借り物は人より物のほうが有利

『か、かつこよかった……！』

私は地面にぺたりと座りこんで、うつとりとした表情でそうこぼした。

今の今まで花形先輩を応援してたんだけど、それがもつかっこいいのなんのって！

しかも1位だよ！？マジどつぼついてくるんだけどッ！あゝ！先輩と肩組んでいたペアの人がうらやましい！

「おい、バカ女」

不意に背後からかけられた声。聞きなれたその声色に、私のテンションは一気に下降。

『なによ、私の幸せ侵さないでくれる？』

私はめいっばい不機嫌を張り付けて返事した。っていうか、バカ女で振り返る私って一体……。

「早く戻れ。2年の借り物競走始まる」

『あり？2人3脚は？』

「お前が先輩見て悶えてる間に終わったボケ」

うわ、いちいちムカつくあこいつ……。まあ仕方ない。自分のクラス応援するか。

戻ってきたら、なんだかざわついていた。

「なになに？どうしたわけ？」

近くにいたクラスメイトに聞いてみる。その娘は私の顔を見た途端、『舞ちゃん！』って言うすがりついてきた。ヤベ、照れるって。

『え、マジでなに？』

「大変なの！借り物競走に出るはずの北林くんが見当たらず……」

……。

鈴、あいつサボリやがったか。

『止むをえない。代役出そう』

「代役……？」

キョトン、とした声でオウム返しするクラスメイト。私はフツと微笑み

『浅野舞、出陣！』

そう叫んだ。

さあさあ早速舞の見せどころ……！……！……！

「よーい………」

ダァン……！……！

スタートの甲高い銃声が、乾いた空気に響いた。それを合図に、みんな地面を蹴る。

「はいはい始まりました、借り物競走！実況は私内山が、解説は我が学園中等部の王子、高梨青海くんに来てもらってまーす！」

キヤアアア、と悲鳴に近い黄色い歓声が沸き上がった。

青海は内心、だりいよ、なんで俺がこんな馬鹿馬鹿しいこと　な
んて思ってるが、そこは多重人格。しっかり王子スマイルだ。

「青海くんはD組だよね？じゃあやっぱりD組……えーと、浅野舞
ちゃん？鼻屑ですかねえ？」

内山が隣の青海に、ニヤニヤと笑いながら尋ねり。

「いえ、確かに自分のクラスに勝ってほしいですけど、他のみんな
も応援してます」

俺、博愛者なんで、と微笑めば、再びおこる女子の悲鳴。
青海はそれを嘲笑うかのように、一瞬だけ黒い笑みをもらった。も
ちろん誰も気付かないが。

「では、青海くんの話は一端止め、実況に入りましょう！」

そう言い、コホン、とわざとらしく咳払いする。

「えーと、用意された紙には、それぞれ指示があります。その内容
とは……あーと！端の紙をB組がとったあッ！」

マイクを掴み、前屈みになる実況。青海はそれを冷めた目で一瞥す
る。

「続いてD、C、A……。さて、ではメモのネタばらしします。ま
ず一番左の紙。Bが取ったものですね。それにはこんな指示が書い

てありました」

実況がその中身とは、と言いかけたところで、競走に参加してる4人が一斉に叫んだ。

「『『』はあああああ！！？』『』『』」

「ちょっ、なんだこれ。血の繋がってないオタクの心をくすぐる萌え系妹？どこから連れてくるんだ！っていうか俺が欲しい！」

「庶民に土下座してもらった千円札？そんなプライドが傷付く真似したくないから、下の者にやらせますわ」

「自分より頭の良いクラスメイト……？はん、そんな奴いないね」

『好きな人の恋人の浮気相手……。翔兄でいいや』

選手は全員、紙を握った。

ツッコミ（幸希）不在なため、みなさん心の中で存分にツッコんでやって下さい。

みんなはうだうだ言いつつも、どこから持ってくる気なのか、探し始めた。各々の目的地へ急ぐ。

「フフフフ、なにが起こるかわからない。それが借り物競走だ。ついでにメモ書いたのは私です」

内山が愉快そうに言った。

第42回戦 体育祭〰️借り物競走2〰️

第42話 つまずいたっていいじゃないか

「さて、あれから5分。皆さん探しに行ったきりですが…そろそろ戻ってきてもいい頃。1番になるのはどこのクラスでしょう？」

（なんかマジでかつたるくなってきたな）

熱血な実況内山とは真逆に、冷めている青海。営業スマイルも面倒くさいのか、時々クールな表情が垣間見える。

「おお！戻ってきた模様です！あれは……B組！B組です！ね、青海くん？」

「そのようですね（爽笑）」

青海得意技、スイッチ切り替え

そんな会話が繰り返されているなか、全てのクラスが借り物を持って戻ってきた。

「1番は俺だぁー！妹口リ萌えー！！」

B組、どこから連れてきたのか、美少女をお姫さまだっこして全力疾走。

「がんばって、お兄ちゃん」

「うおおおおおー！！」

B組、更に加速。

「わーすごいですねB組。猫みみまでついてます！萌えパワー炸裂」

「ははは。（馬鹿だろこいつ等）」

青海は渴いた笑いで誤魔化す。腹の中は真っ黒だ。

「おほほほ！おどきなさいその愚民」

「なぬ！？」

突如現れた高い声に、バツとB組少年（以下少年B）が振り返れば、そこにはC組少女（以下少女B）が。あるうことが、御輿で担がれながら。

「てめっ！卑怯だそ金持ち！」

「卑怯じゃなくて策略と仰って欲しいわ！ただでさえ千円札を持つという屈辱を受けているのに、これ以上惨めな思いは御免葬ります」

ふさふさの扇を口許にあてて、高飛車に笑う少女C。明らかに庶民の敵だ。きつとたくさんの者が殺意を抱いただろう。

「チクシヨー！おい、幹部！こんなの有りかよ！？」

少年Bが悔しそうに顔をしかめ、本部のテントに向かい叫んだ。

「有りです」

「チクシヨオオオオオ！！」

が、玉碎（笑）

猫みみ美少女を抱く少年と、手下に担がせる少女。普通の体育祭ではありえない光景だ。

「いや、実に接戦ですvvね、青海くん」

「…そうですね」

爽やかな笑みに、少し黒が入った。だが他の者どころか隣にいる内山でさえそれに気付かない。

「さて、他のクラスは……？」

実況がキヨロキヨロと見渡す。すると視界にひとりのメガネ少年が入った。

「あれは　A組ですね。しかしどういうことでしょう？ たった1

人です」

内山の言う通り、A組少年（以下少年A）は1人でゴールに向かっていた。

「A組は確か」

「自分より頭の良いクラスメイト、ですよ」

「それぞれ！さすが星宵学院の王子ッ！」

「そんな大袈裟な」

小さく笑い、謙虚な振る舞いをする青海だが、心の中は、当たり前だろ分かりきった事言っただけじゃねえよ。と、かなり腹黒い。

その内にも、少年Aは走る。こう叫びながら。

「ハハハハハ！この僕より頭の良い人なんかいないね！つまりは僕が僕を連れていけばいい！何故なら僕がいちばん頭良いから、そして僕のお題が僕より頭の良い人であって、だから……あり？」

だんだんと声が小さくなる少年A。

「混乱してますね。まあ確かにややこしいですけど」

「……というか、借り物無しって有りなんですか？」

「いいんじゃないですかあ？借り物が自分より頭の良いクラスメイトで、自分より頭の良いクラスメイトがいらないから、つまり借り物

は自分自身なわけで……あり？」

内山さえも混乱する始末。青海は『うわぁ……』という目で見た。

しかし少年A。借り物が自分自身なのはいいが、運動神経はよろしくないらしい。体育会系のB組、楽してるC組との差は大きい。

「これで全員揃いましたかね。　　おや、なんか物凄い速さで走ってくる者がいるんですが」

実況のなんなんでしょうか、という声は掻き消された。

『うおおおお！！！！』

校庭に響く、太い声色。みんなが振り向いた。

「あれは……D組！？D組です！鬼のような形相で走ってますっ」

（アイツ、やつと来たか）

知らず知らず、笑みを浮かべる青海。鈴の代役で出たヒロインの登場だ。

その手には、ある1人の男の手が。その男は、面倒くさそうな表情をしつつも、舞について走る。

『1位は私だぁー！そして翔兄に褒めてもらってついでに禁断の恋しちゃうんだ！！ね、翔兄』

「勝手に決めるな。っていうか、なんで好きな人の……あぁも

うだりい。えーと、その浮気相手が俺なんだよ」

いつもとは違い、ジャージ姿の彼は、そう、高橋翔。舞の超人的な速度に、多少汗を流しながらもついていつている。

『いいじゃない！つまりは私と翔兄が相思相愛ってことなんだから
VV』

「なにその妄想」

キヤツ、と頬を染める舞を冷たくあしらう翔。

「これは面白いことになってきました！ひとりのA組、オタクB組、高飛車C組、超人D組……。いったい誰が1位を勝ちとるのでしょ
う？」

「見物ですね」

王子スマイル、未だ健在。やっぱり女生徒たちの黄色い声が響く。

競技のほうは、B組と舞が接戦中。C組が少し遅れ、A組が最後。

そしてゴール直前、舞と翔が、今テープを

ベチャッ！

「『ぶつ！！！』」

「！！」

……………数秒間の沈黙……………

「び、B組です！1位B組！！なんてハプニングでしょう！D組、高橋先生をまきこみ派手に転倒しました！これはきまらないッ。あまりに恥ずかしいです！」

『ぐはあっ…。翔兄、すんませんマジでらつくす』

「今でお前の好感度一気に下降した」

「NO—————！！」

結局、D組は3位となる。

「……………なんで何も無いところで転ぶんだ」

青海の呟きに、答えはなかった。

トントン、と爪先を軽く叩く。数回屈伸して、深呼吸。さっきの借り物競走は3位になっちゃったから、僕等が取り返さなきゃ。

『ガンバレよ幸希ちゃん!』

肩を叩かれ振り向けば、膝を赤くした舞ちゃんが立っていた。鼻の頭には、絆創膏が貼ってある。

「舞ちゃん」

『いや、やっぱり幸希がいるといいねえ。貴重なツツコミだもん』

キヤハハ、と笑う。先ほどのミスなど悲しいくらい気にしていないようだ。羨ましくなるよ、その図太さ。

「藤森ー、そろそろ行かなきゃって……舞!!」

ああ、流華ちゃん登場。

「舞イイイ!怪我はない?大丈夫?ああ!膝がツ鼻がツなんてこと……!」

嘆くようにして、がくりとうなだれる。相変わらず舞ちゃん至上主義だ。ため息が自然とこぼれる。

「流華ちゃん、行こう」

次は障害物競走、僕等の出番。流華ちゃんに手を差し出したら、

「こっちがいい」

流華ちゃんはそう言って、舞ちゃんを抱きしめた。

……………別にいいけどさ（涙）

第42回戦 体育祭〰️借り物競走〰️（後書き）

次回は障害物競走

第43回戦 体育祭 障害物競走

第43話 必ず怪我する奴がいるんだよね

障害物競走に出るのは2人。先に走るのは僕だ。コースを見れば、いくつか障害物がある。ただ真っ直ぐ走るよりはおもしろみがあったいい。

チラリと走者を確認する。

やっぱりいちばんの敵はB組かな。運動能力でこの学園に入学したんだから。

A組は頭良いけど、それだけって子が多い。なにか作戦たててそうだから、油断できないけれど。

C組は、……令嬢とか子息だからなあ。自力で走るとは思えないや。

「ま、とりあえず敵はB組ってことで」

足首をまわしたり、腕を伸ばしたりして、軽く準備運動する。

少し離れた所にいる流華ちゃんを見ると、目があった。流華ちゃんは声には出さず、口許を動かす。読み取ると

が、ん、ば、っ、て

「……………もちろん」

返事代わりに、微笑んだ。

「よーい……………」

季節の狭間の空に、響く銃声。
一斉にみんながダッシュした。

最初の障害物はハードル3つ。まあ王道だね。大して高くないから、誰もひっかからない。

でもやっぱり運動能力が必要。僕はB組と並んだ。後ろを振り返るほど余裕はないから、A・Cがどうなっているかは分からない。

次の障害物は

「……………なにアレ」

目の前には、脆そうな壁が。赤と青に別れていて、隣には実況の内山先輩がいる。

なんだろう、バラエティを思い出す。

「フッフ、第二の障害物はクイズです！当たり前と思ったら赤に、ハズレだと思ったら青に突っ込んで下さい」

意気揚々と説明する内山先輩。いやいや、なにそれ。テレビじゃないんだから。

「まさかハズレには粉があったり？」

「おお！ヘタレン冴えてる」

パンツ、と手を叩く実況。

ヘタレン！？なにそのあだ名！ヘタレか？ヘタレからきてるのか！？
っていうか、なんで初対面なのにヘタレって言うの！！

そうこう（どうこう？）してる間に、A・Cもきた。ヤバイ、クイズと言ったらA組が有利だ。

僕もそんなに頭悪くないほうだけど、A組に入れる程良くない。うわ、Aくんかなり笑ってるよ。なんかもう勝利確定みたいな顔してるよ。

「では問題です！」

どこから流れたのか、チャチャン と聞こえる。

「太郎くんはキャンディを5個持っていました。太郎くんは友達の慶太くんに3個あげました。だけど1個は返されました。その後妹

の加奈に2個あげ、同じ個数ガムを貰いました」

（あ、これなら分かりそう）

その安心を、内山先輩は見事にぶち壊す。

「さて、太郎くんの好きな娘は聖子ちゃんである。 か×か」

前ふり関係なし！！？

「ついでに太郎くんとは僕の事です。内山太郎と申し上げます」

殴りたい！ものすごくこの人殴りたい！！

スナイパー並に人のムカつきポイントを的確についてくる！ゴル
13も真っ青だよ！

「ふっ、なるほど。これは だな」

「えー！？何を根拠に！？」

「分からないか？内山先輩はこれを機会に聖子ちゃんに告白したい
んだよ。つまり、答えは だ！！」

そう叫びながら、名も無きB組少年は赤の壁に突っ込んだ。結果は

バフツツツ！！

「ブプー。答えは×です。だって、聖子というのは僕の母の名前ですもん」

ざーんねーん、と粉に埋もれたBくんを見て言う実況。ああ、なんて哀れだ。

「バカだろうアイツ」

隣にいたAくんが、メガネをくいつと持ち上げ呟く。そして青の壁を破壊し、走っていつてしまった。

「ちよ、なんだよこれ。いちばん最初に突っ込んだ奴を犠牲にすれば、他のやつ失敗せずに行けるじゃん」

有り得ない、といった表情で文句をこぼすCくん。うん、激しく同感するよ。

「まあ、そこに気付くかどうかが頭脳プレイですよ」

ニコッ、と笑う内山先輩を一瞥し、僕とCくんはA組を追う。

嗚呼、早速脱落者が。

やっぱりご子息様は普段走らないみたい。どんどん差をつけて、秀才君も追い越して、僕は1位に踊り出た。

このままいけば、確実にとれるかな？なんて期待して、またもやきたよ、障害物。

次は、跳び箱が置いてある。しかも、笑えないくらい高い。

「……いやいやいや」

いくらなんでも、これは無いでしょう。体育の授業で8段はわりと楽に跳べたけど、目の前のこれは15段。

いじめか？体育祭にかこつけていじめか？競技を上手く利用していいじめか？

『幸希ファイトー。お前ならできる！』

応援席から舞ちゃんの声が聞こえる。いや、普通に無理。

僕が啞然としてると、秀才君と子息様が息を切らせながら、僕の隣へ。共に見上げる。

「なんだよこれ」

うん、ごもつともだね。

「……平野」

組がパチン、と指を鳴らした。その瞬間黒の服纏った男がサッと現れる。

「奴を用意しろ」

「はっ！かしこまりました」

そつ了承して、男が呼んだ男は

……巨神兵？

「お呼びですかぼっちゃま」

「ああ。僕を担いでこの跳び箱跳べるか？」

「お安いご用」

巨神兵は頷いて、命令の通りくくんを担いで跳び箱をとんだ。 15
段の跳び箱を。

「え、いや、ちょっと待って。どこからつつこめばいいのか凄い困るけど、とりあえずアレは有りなの？」

ズルじゃない？と、本部の人を見ると、目があつたひとりがグツ、と親指をたてた。

えーーーーー（遠い目）

僕がぼかんとしてると、助けを出すように実況内山先輩がマイクにむかいこう言う。

「さすがに15段はきついですか？では、そんな貴方にビッグチャンス」

……ビッグチャンス？

「跳び箱の横に大きなハンマーあるでしょう？それでいくつか段を減らして下さい。だるま落としっぽく」

確かに、隣にはハンマーがある。だけどそんなルール　　あり？

「……仕方ない」

最早常識は通じないらしい。ならばもう諦めて、無茶しよう。

それに、運動能力には自信あるしね。体育科のB組と同じくらいだ
と思う。一応青海よりいいんだよ？舞ちゃん程じゃないけど。

スコンッ

スコンッ

スコンッ

「なんか、あっさり抜けるな。拍子抜け」

スコンッ

スコンッ

只今10段。Aくんは後ろから僕の様子見してる。

「こんなもんかな」

僕は呟き、跳び箱に向かい走った。大丈夫。きっと跳べる。自分に
言い聞かせた。

ダァン！！！！

着地の音が響いた。一瞬深まる沈黙。だけど、すぐにそれは歓声に
よって壊される。

キヤー、とか、おおおお！とか、いろいろ聞こえる。けっこう気持ち良い。

さて、もう障害物はないみたい。Aくんはきつと跳べないだろうし、Bくんは戦闘不能。

予想外の展開だけど、やっぱり最後は綺麗に終わらせなきゃね。

目の前を走るC組の背を追いつける。あと少し。ゴールは間近。君がゴールするのと、僕が追い越すの、どちらが早いかな。

なんでだろーね、スローモーションで見える。ああ、あと少し。あと少し。結果は

「ゴオオオオオル！！見事逆転し、1位D組です！先ほどの汚名返上になりました！」

「たまには僕にもかっこつけさせてよね」

女の子の黄色い声が響いた。

第43回戦 体育祭〰️障害物競走〰️（後書き）

いつも幸希の扱いが酷いので今回は花を持たせてあげました！

第44回戦 体育祭〜リレー〜

第44話 バトン落とすとみんな視線で責めてくるよね

フフフフフ……。――

笑いがとまらない。だって…フフツ、ねえ。 プツ。クク、ふう

く。ぶふっ

え？キモイって？大丈夫、百も承知よ。

だって、これは笑わずにはいられない。やっと、やっと私の出番がきたんだから！

『きた。これから私の時代よ。天下とりよ！下剋上よオオオオオオ！――』

「うるさい」

『ひぶっ』

私が高笑いしていたら頭をはたかれた。ナンセンス！（え叩いた犯人をキツと睨めば、呆れた瞳と目が合う。予想通りの人物だ。

『テメ、なにすんだチクシヨ―』

「黙れ。空気が汚れる」

『どついう意味だコノヤロー!』

「そついう意味だコノヤロー」

ム力つく! 激しくム力つく! その涼しい顔、原型留めれないくらいに殴りてえええ!

「ちょ、ちよつと舞、高梨くん喧嘩しないでよ!」

そう言つて、私を押さえるクラスメイトの美紀。あ、美紀はリレーの第1走者ね。リレーは4人出るんだ。つて、んな事はどうでもいいイイイイ!!

『止めるな美紀イ! 一発殴らないと気がすまないッ』

「すぐ暴力にいくあたり低レベルだよな」

「高梨くんも煽らない! 隆之、傍観者になつてないで助けてよ!」

美紀は私を押さえつつ、リレー第2走者の隆之に懇願の目をむける。隆之はため息をつきながら、私達に近づいて

「青海、他のクラスの奴に本性バレるぞ。浅野、翔先生つて、おとなしい娘が好みなんだつて」

その言葉が耳に届いた瞬間、私はピタリと止まった。今、ものすごく重大なことを聞いた気がする。全機能停止。

『隆之……それ確かな情報？』

「本人に直接聞いたから間違いないと思うな」

マジかよ。あの翔兄が、おとなしい娘が好み……んなバカな。いや、でも恋人の愛姉もそんな感じだし。

『浅野舞、今日をもって大和撫子になります！』

「切り替え早ッ」

自分の性格を変えるなんてゴメンだけど、愛しき人のためならなんだってするわ！汚い言葉使いやめます、平和主義者になります。だいたい翔兄しつとり系が好きだなんて、もうす・て・きVVああ、もうなんていうか！愛されるより愛したい

『激ラブ〜』

「頭トリップしてるぞ。戻ってこい」

青海の声にハツとする。ヤバイヤバイ。意識がどつかいてた。ダメだね、恋する乙女は悩んで揺らいで、どんどん妄想の世界に入っちゃうわ。

そうして現実と妄想の区別がつかなくなるんだね。ストーカーも元は恋する乙女だったってことよ。つまりストーカーに罪は無い。いや、それとも恋におちたら犯罪スレスレなのか？だけど恋泥棒とか

言うよね。あ、分かった。ストーカーは泥棒まではできない、恋の犯罪者なんだ。ちよつと臆病なんだね。

あれ？なんでストーカー談義？

「とにかく、リレーは協力しないと勝てないんだからね？喧嘩はまずお預け。分かった？」

『はい』

美紀の言葉に手をあげて返事する。美紀は『よし』と頷いた。

「ただでさえ青海と浅野は仲悪いのに、バトン渡し大丈夫か？」

隆之が私達をチラリと見て呟く。そう、第3走者が青海で、アンカーが舞様なのだ。

え？だってアンカーって目立つじゃん？なんかかつこいいし。私はアンカー以外嫌なのさ。

「大丈夫だよ。俺がこんな民衆の前でそんな事するわけねえだろ？」

「本当か？」

「ああ。バレない程度にバトンでコイツの頭を叩くだけにしとくから」

「それ大丈夫言わないイイイイ！！」

『てめええええ！！』

美紀のツッコミと私の叫びがハモる。

マジでムカつくんですけど。かなぶんかと思って触ったら、ゴキブリだった時と同じくらいの嫌悪感だよ。

私はその時、絶叫したね。あまりの怒りに、踏み潰したよ。

素足で（今ひいた奴、君とは友達になれない）

なんだかんだで、リレーが始まった。それぞれ配置につく。

リレーは一人50m走るんだけど、アンカーだけは100mなんだ。言うておくが、私は50走すげえぞ。ギネス保持者だからな。5秒きってるからな。

まあ、嘘だけど。

それは嘘だとしても、マジ速いぞ。陸上部から必死に勧誘されたし。ついでに当時の私は料理部だったから断っただけだね。

「よーい………」

銃声が鳴り響いた。ついにリレーの始まりです。

第45回戦 体育祭リレー2

第45話

鳴かぬなら、振り向かせるさホトトギス

どうも、藤森幸希です。

今回は僕が視点兼実況を務めさせていただきます。

さて、今のリレーの状況だけど、第一走者が

「なんでなの」

隣から聞こえたピリピリした声。僕はこぼれそうになるため息をなんとか堪え、横の彼女に目を向けた。

「……流華ちゃん。遮るのやめてくれない？」

「だっておかしいじゃない」

即座に答えられる。

なにが？と問えば、流華ちゃんはムツと口を尖らせ言った。

「だってだって、なんでリレーなの！？なんで私の障害物競走とば

されてるのよ!？」

ヒステリック気味に叫んで、僕の肩を勢いよく揺らす流華ちゃん。思いつきり八つ当たりだと思っただけ。

「まあ、物語上の事情ということで」

「何よその事情!言っておくけど、私けっこう活躍したわよ!?!一位にもなったのよ!？」

「うん、すごい勇ましかったね」

「でしょ!?!なのにアンタひとり良いとこ取りしやがってエエエエ!」

「ちよつ、ストップ、ストップ!首絞まって…うわあああ!」

しばらくお待ち下さい

なんとか怒る流華ちゃんをなだめ、解放された。僕いつかこの娘に殺されるんじゃないかな。

……保険入っておこう。

さて、話変わってリレーのほうだけど、流華ちゃんに殺されかけていた間に第一走者の美紀ちゃんはもう走り終わっちゃったんだよね……。

ごめんね美紀ちゃん。正直、全然見てなかった。……うん、ごめん。チラッと見えた時2位だったのは覚えてるんだけどね。

そういう事で、今は第2走者の隆之。さすがリレーの選手だけあって、速い。それでもやっぱりB組には叶わなくて。今のところ美紀ちゃんに引き続き2位。

A組もC組も一般的には速いんだろうけど、僕等D組との距離はだいぶ広がった。何かが起らない限り、最下位は有り得なそう。

さて、と……。B組は体育科だけあってレベル違うなあ。っていうかさ、クラス対抗な時点でB組が圧倒的に有利じゃない？体育科なんだから、体育祭だってねえ。

けっこうずばらだな、この学校。さっきから滅茶苦茶なルールばかりだし。本当に本当に名門校？

私立ならもっと、伝統がどーのこーの言いそうなのに。規則も緩いんだよね。

「藤森、話ずれてる」

「あ、確かに。って、流華ちゃん、人のモノローグ読まないの」

「モノローグって、口に出してたわよ」

「えっ！ホント!？」

「嘘に決まってるんだろ。騙されてんじゃないよ、馬鹿」

ハッと見下すように鼻で笑う。今の声、温度で表すなら間違いなく氷点下だ。

「……流華ちゃん、最近僕にも毒舌になってきたね」

「舞しかいない」

「いや、ちよつと流華ちゃん？」

「舞以外みんな死ねばいいのに」

「流華ちゃんンンンン！？」

「そうすれば、私と舞だけのエデンの園……VV」

「意味わからないからっ！これ以外おかしな道進んじゃ駄目だって！しっかり流華ちゃん！！」

うつとり、と夢の世界に入りこんでいる彼女を必死に呼びかけ、戻した。なんかさあ、僕いろいろと損な役回りだよね。

こんなに美人なのにもつたいない。そんなんじゃ、彼氏もできないよ。

いや、できないんじゃなくて、つくらないのか。そうだよ、ね。舞ちゃん至上主義だもんね。女の子LOVEだもんね。

「本当、損だなあ……」

「は？なにがよ」

「秘密」

パチン、とウィンクしたら、不審な目で見られた。ひどくない？少しは頬染めたりしてくれると嬉しいんだけど。

（まあ、持久戦でがんばりますか）

眩しすぎる太陽。雲ひとつない空の下。たくさんの歓声と、走る少女。輝く汗は綺麗で、心がくすぐられる。

友達以上恋人未満？取り払いたいボーダーライン。

こんなに甘酸っぱいのは、きつとない。この青い春を楽しもう。延長戦でもいいよ？いつか振り向かせてみせるから。

天気は快晴、風は良好。夏はまだまだ、続きそう。

第46回戦 体育祭リレー3

第46話 終わり良ければ全て良しなんて事ない

どうも、主人公なのに前回まったく登場しなかった浅野舞です。

時々あたしのいない話あるよね。ム力つくんだけど。

だいたい幸希がでしゃばりすぎなんだよ。あたしの流華に手を出しやがって。

あー、ム力つくわ。

……え？リレー？

ああ、うん。今青海にバトンがわたったところだよ。今はまだ2位。

アイツ転んでくれないかな。かなり派手にさ。

んで、いつきにビリ。そしてそれをあたしが華麗にこぼつぬき！とか、カッコよくね？

でも、そんなあたしの計画を青海はことごとく壊してやがる。

え、なんかB組を抜かしそうじゃん。やめろって。あんたが1位になっちゃったら、あたし大して目立たなくなるじゃん。

「キヤー！」

「青海くん素敵イ！！」

……ケツ。見た目に騙されてさ。可哀想な娘たち。なんであの腹黒に気付かないかな。

あたしは無性にイライラして、地面を蹴った。グラウンドの細かい砂が、空を舞う。風に流され、それは消えた。

「ケホっケホッ！ばか、何するんだよっ」

隣の走者に被害を加えて。

『あはは、ごめん。……………イイ気味』

「デメエ、今なんつったあ！？」

いやん、地獄耳 世の中には知らないほうが幸せな事がたくさんあるのよッ。

なんて、思っていたら、もうすぐあたしの出番じゃん。そろそろ体勢に入るか。

「おうちゃん、頑張つて！」

…………え？

黄色い声援に混じった、一際大きな応援。その声に周りはざわついた。

そりゃそうだろうね。だって、今【おうちゃん】って言ったもん。

あの魔王を、ちゃん付け……。過激なファンクラブ会長でも、そんな風に呼ばないぞ。

こんなにたくさんいる観客のなか、誰が言ったかなんて分からない。なんとなく気になって、走る青海に目を向けた瞬間、…わたしは見た。

笑ってる顔。

わたしに見せるようなふてぶてしい笑みじゃなくて。みんなに見せるような爽やかな笑顔でもない。

心の底から笑ってるような、優しい微笑。

（なんだよ、それ）

らしくない。

あいつらしくない。

何これ、ムカつく。もつのすごいムカつく。

そんな、誰にも見せない笑顔。いったい誰にむけて？

「おい、バカ女」

わたしがムツとしてたら、背後から声をかけられた。

そいつはバトン、と小声で繰り返す。ああ、受けとれて意味ね。

っていうか、何？あんた結局B組追い越したんだ？

なんかもう、全てに大して腹がたつ。だからあたしは

『うおりゃー！』

「痛ッ！」

バトンを受けながら、思いきり砂を蹴って目にかけてやった。

「っ…デメエ」

『はん！自業自得だね』

わたしはそう叫び、疾風の如く走る。

キヤーとかイヤーとか、女の子たちの甲高い悲鳴が聞こえたけど、
そんなの気にしない。

吹き出る汗。太陽はギラギラ。もう、周りなんか見えない。突き抜

ける風と一体化して、ああもう

消えてしまいたい。

「ゴオオオル！！1位はD組です！体育科のB組を抑えましたあ
ー！」

自ら切ったホワイトテープ。本当は止まりたくなかった。ずっと、
走り続けたかった。

透き通る青空。わたしの気持ちとはまるで真逆で。1位になれたと
いうのに、わたしの心はまったく晴れてくれない。

それはきつと

『お前のせいだ！』

「意味分かんねえよ」

あんななんか、大嫌い。

第46回戦 体育祭リレー3（後書き）

声の正体は、また後ほど登場させます！

第47回戦 体育祭〜昼休み〜

第47話 晴天屋上昼寝日和

午前の競技を終え、一旦昼休みに入った。この間に、昼食を食べたりする。

「舞、どこ行くの？ご飯は？」

『ちよつと屋上』

わたしは母特製弁当を持って、流華に背を向けた。

行き先は流華に言った通り、屋上。うちの学校、私立のくせに警備甘いんだよね。鍵はかかっているけど、人によってはピッキングできる。

その人は誰かというと、腹黒魔王だったり、素敵やる気なし教師だったり、赤髪ヤンキーだったり……。

ついでに私もできるよ。最近コツを掴んだのさ

『ふんふんふん』

わたしは鼻唄を歌いながら、屋上へ続く階段をかけのぼる。

そして、扉の前まで到着。見るとすでに錠ははずされていた。

(……予想通り)

重いドアを押す。

目に入る眩しい青空。ギラギラな太陽とは裏腹に、吹き抜ける風が爽やかで心地好い。

さて、このへんで屋上へ来た目的を話そう。

そう、この私が昼休みという貴重な時間をつぶしてまで来た理由。

それは……………

『この不良息子がああああああ！！』

「ゲッ、舞！」

私は寝そべっている鈴に、飛び蹴りを炸裂した。

見事、腹の上に乗ってやったぜ　ぐえっ、と可哀想な声をだす鈴。

はん、いい気味だね！

「な、なにするんだよ……………！」

お腹を抱えて、上目にわたしを見上げてくる。微妙に涙目だ。……
太ったかな、わたし。シヨック。

『何するんだよ？むしろこっちが何するんだだよ！』

「意味わかんねえから！」

わたしの気持ちを理解してくれないのね！？ひどいつ、ひどすぎる！

『あー、そうですか。そうですか。もう分かりましたよ』

「何が分かつちゃったんだよ」

『ホント最悪！離婚よッ』

「結婚は16ならねえとできねえ！」

『いやいや、ツッコミどころおかしいくない？いつ私が鈴と結婚したのよ』

なんで自分で自分のボケにツッコミ入ってるんだ私。一番悲しい行為だぞ。

「つたく、…で？何の用？」

鈴が大きなため息を吐いて尋ねてくる。

『な、何の用ですって！？それを私に言わせるの！？』

「他に誰がいんだよ」

あら、まともにツツコミ入れられちゃった。

何の用？何の用って決まってるじゃん。このあたしが翔兄にお弁当
『あーん』や、花形先輩にラブエールを断念までしたのは、これを
言うため！

『今まで何していたあああ！』

「……………は？」

『競技サボって何してた？応援さえせずどこにいた！？』

「あー…」

なるほどね、と言った顔で鈴が呟いた。そしてもう一度ごろん、と
地面に寝転び、昼寝体勢。

『つて、寝るな！』

「いつて！お前はか力なんだから、少しは手加減しろよ」

鉄拳を浴びせば、叩かれた頭をさすって、ぶつぶつ文句をこぼす。

彼の赤い髪が日の光にあたって、キラキラと輝く。夏休みが終わっ
たからメッシュは入っていない。

っていうか鈴、なんで制服なの？どんだけやる気ないんだ。

ボタンは開け放題で、胸もとだけでなく腹筋まで晒してるし。目のやり場に困るよ、そのエロイ格好。

「悪かったな」

不意に鈴が言う。今まで黙っていたから、ちょっと心臓がはねた。あたしのガラスハートは繊細なのよ。

何が？と聞こうとしたところで私は口をつぐむ。たぶん、さっきまでの私の怒りに対してだろう。

『…謝るなら、サボらなきゃいいのに』

「暑いし疲れるし苦手なんだよ」

ようは面倒くさいってことじゃねえかオイ。

『……午後は出てよ？団体競技なんだから、協力しなきゃ』

そう言うと鈴は、協力ねえ…と呟いて瞼をふせた。

まったく、協調性がないったらありやしない。

「舞がそこまで言うなら出てやるか」

……マジ？

「自分で言うのもなんだけど、運動神経には自信あるからな」

『鈴……大好き!』

「うわ!いきなり抱きつくナッ!」

さすがあたしの相棒だわ!やるときはやる子だって、信じてた!

『あー良かった良かった』

「そりゃどうも。なあ、なんか飲み物もってね?ずっとここで寝てたらのど渴いた」

…ここですつと寝てた?何のために今日来たんだアンタ。

そう思いつつも、わたしは鈴にペットボトルを手渡した。なんて優しいのあたし

『はい、サイダー』

「お前、体育祭にサイダーってどうなんだ」

『いいじゃん。暑いと炭酸飲みたくなるの』

「しかも口つけ」

『文句言わない!』

「へーい」

余程のど渴いていたのか、ぐびぐびと喉を鳴らして飲む。

（よく炭酸をそんないつきに飲めるな）

鈴の首筋には、うつすら汗が滲んでいた。やっぱり動かなくても、暑いよね。

焼けたせいか、肌が赤い。そういえば鈴って、日焼けしても黒くならないんだよ。赤くなって、また白に戻る。うらやましい。

あたしすぐ真っ黒に焼けちゃうんだもん。

「ぶはっ！あー美味い」

そう気持ちよさそうに言って、わたしにサイダーを返す。だいぶ減ってるんだけど、鈴くん。

『鈴お弁当はー？』

「あー、教室」

忘れてきたのか。あ、違う。朝からここにいたんだっけ。

『仕方ない。少しわけてあげよう』

「マジで？」

『出てくれるんでしょ？』

そう聞くと鈴は、もちろん！と笑った。

これも青春だよな。確かに屋上は風と陽射しが爽やかから、眠くなる気持ちもわかる。

わたし達は、ふたりでお弁当をわけあった（途中でバトルしたけど。だって玉子焼きの数が3つだったんだもん）。

友達以上恋人未満？いいえ、大切な相棒です。

第47回戦 体育祭〜昼休み〜（後書き）

恋愛対象に入らない男友達との友情は、長続きすると思う。

第48回戦 体育祭～午後の部～（前書き）

後半、幸希視点です。

第48回戦 体育祭〜午後の部〜

昼休みが終わって、午後の部が始まる。

戦場という名のグラウンドへ行く途中、目の前に青海がいたから、とりあえず飛び蹴りしてみた。

第48話 Do you hate me?

I hate you. (me tooしか期待してないわ)

『い、痛い……!』

「そりゃあれだけ派手に転べばな」

『白々しい! あんたが避けたからじゃん!』

おかげであたしは、傷だらけのシェリーさ。これから競技なのに、いきなり怪我ってどうよ。

痛いんだけど。血でてるんだけど。

『チクシヨ……!』【おうちちゃん】のくせに『

そうわざと聞こえるように呟くと、アイツはぴくりと反応した。

『ずいぶん可愛いあだ名なこと。あの声、だれ？』

「…………お前には関係ないだろ」

不機嫌な声で青海は答える。睨みすぎだつてば。そんなに凄まじくても。

『いいじゃん！教えてよつ。なに、彼女とか？』

そう言つて詰め寄ると、そいつはあからさまに嫌な顔をした。失礼だなオイ。

青海は近づくあたしを片手で制しながら、青海はため息をつく。

つて、痛たたたたた！髪つかむなバカ！

「うざい」

『な、なんだよ。誰か教えてくれるくらいいいじゃん！じゃないとこれからお前のこと【おうちちゃん】って呼ぶぞ！？』

「……………」

『思いきり嫌な表情してんじゃねえええ！！あたしだって嫌じゃボケ！』

叫んで青海の腕を振りはらった。パシッと乾いた音が小さく響く。

するとそいつは舌うちして、あたしから離れた。

『ちよ、ちよっと』

「…お前さ、俺のこと嫌いならどうだっていいんじゃないか？俺が、誰を好きとか、大切だとか」

冷めきつた瞳が、私を射抜く。あまりに冷たいから。

（少しビクっちゃったじゃないかコノヤロー。す、少しだけだな。いや、ホント。うん、little）

「そもそも、教える義理なんてないし？」

『ふつ、バカ言わないでちょうだい。あたしには、全てを知る権利があるのっ！』

「ねえよ」

『あるの！』

「ねえって」

『ある！』

「ねえ」

『あゝるゝ！いい加減白状しろ。神妙にお縄につけいッ』

「あ、翔と花形くんだ」

『うえ！？』

わたしは勢いよく青海が指差した方向に振り返った。
しかし、そこには誰もいない。チクシヨ―騙されたッ！

『青海デメエ！！』

つて、あり？

い、いない……。

頭に浮かぶ、はめられたという文字。

『おうちゃんコノヤロォー！』

今にも人に殴りかかりそうなほど機嫌の悪い舞ちゃんを見た後、
今にも女の子が騒ぎそうな笑顔を浮かべている青海を見た。

絶対なにかあったな、と思いつつ、僕はその親友の肩を叩いた。

僕だと分かっているだろうに、振り返った表情は、いつもより毒の抜けたものである。

「幸希」

「やつほ。機嫌よさそうだね」

そんなことない、と言って、青海は普段のポーカーフェイス。

彼の機嫌が良い理由がなんとなく分かっていた僕は、その話題を出した。

「綺空^{きい}ちゃん来てたね」

にこつと笑って言うと、青海は少し顔をしかめる。
なんか余計なこと言ったかな？

「ああ。…っていつか、その呼び方やめろ」

……なるほど。

僕は心のなかで笑った。実際に笑ったら殺されかねない。命は惜しいからね。

「おつとゴメン。綺空さんね。なんか女の子って、【ちゃん】つけたくなるんだよね、僕」

「病気だろ」

「それは酷くない？」

青海はあまり女の子にちゃん付けない。だいたい苗字で呼んでる。舞ちゃんに対しては名前だけだね。

「そういえば、流華ちゃんは何故かフルネームだよな」

流華ちゃんも青海のこと、フルネームで呼ぶし。

「苗字や名前で呼ぶ仲じゃないからな」

だからフルネーム？どんな定義だよ。絶対変だと思うんだけど。

「そんなこと気にするなよ。小せえ男だな」

「ひどい！ってか心の中読むのやめてってば！」

怖いんだからまったく！付き合い長いけど、これには慣れない。ってか、いつ身につけたんだ、その読心術。

「あ」

「え？」

青海が声をこぼすから、僕は彼の視線の先をたどった。そこには、綺空さんの姿が。

「って、ちょっと青海……！」

走ってちゃったよあの人。僕の存在無視？

「本当、仲が良いことで」

お互い溺愛してるもんね。【おうちゃん】なんて呼び名、綺空さん以外に許さないだろうし。

「まあ、綺空さん美人だし優しいし、気持ちは分からなくもないけど」

でも、あの声はやバかったんじゃないかなあ。女の子みんなビックリしてたし。

ただでさえ青海を呼び捨てする女の子は少ないのに（クラスメイトは別として）、【おうちゃん】って……。

「だけど、青海は綺空さんに対して怒らないんだよね」

まあそれも愛故ということか。女の子からの好感度は大丈夫なのかな？

「……ま、いつか。僕には関係ないし」

競技開始のアナウンスが聞こえて、楽しそうに話す青海と綺空さんを尻目に僕は走った。

途中、舞ちゃんに八つ当たりされたことは、まあ追記というところで。

第48回戦 体育祭〜午後の部〜（後書き）

綺空が青海のなにかは今後明かします。たぶん、想像してる通りかと（＾―＾；）

第49回戦 体育祭〜綱引き〜

第49回戦 当たって砕ける

どうも、浅野舞です。どこかの誰かさんのせいで、めちゃくちゃ気分悪いです。

「ふつ、まあいいさ。体育祭が終わったら聞き出してやる」

今は競技に集中だ！

ただ今の成績

1位：B組

2位：D組

3位：C組

ビリ：A組

となっている。

2位だぜ2位！この舞さまがいるクラスが1位以外なんてありえない！

この際、誰のせいかは置いておいて、目指すは優勝！あの体育科クラスに勝つのさ！

『鈴、午後の競技って何があったわけ？』

「いや、俺が知ってるわけねえし」

『チッ』

「舌うち!？」

やっぱりやる気なかったヤツは使えねえな。こういう時は流華が幸希……。あり?どこ行っただあの二人。

ハッ!まさかあの二人、あたしに内緒で
!

『いやああああ!!流華は私のものよー!』

「その通りだわ舞ッ!」

『え?あ、流華』

「嬉しいわ舞。とうとう私、舞のものになれたのね。あ、でも私の心はいつだって舞のものだったわよ」

『私も流華のものよ』

「きゃー!嬉しすぎるvvで、でも出来れば、いつかは心だけじゃなくて身体も……!」

『いやん、恥ずかしい!』

「……幸希、早く来てッコミしてくれ」

鈴が小さく呟いた。

さて、気をとりなおして。残りの競技は綱引きと全員リレー。そして、次の競技は綱引きだ。

わたし達D組は円陣組んで、気合い入れ中である。

『全力でいくぞオオオ!!』

「オオオオオオ!!」

『目指すは優勝オオオオ!!』

「オオオオオオ!!」

『一人はみんなのために、みんなは私のために頑張るんだアアアアア!!』

「オオオオオ……オ、オ？」

「なんか違うね？」

「みんなは一人のためにじゃね？」

『細かいことは気にするなアア！！』

「オオオオオオオオオ！！（やけ）」

叫ぶだけ叫んだところで、あたし達は配置についた。まずは1回戦。相手はB組だ。

「初回から嫌なところと当たったなあ」

ため息混じりに幸希が呟く。

『病は気から。弱気になったらダメだぞ！』

「うん。言いたいことはなんとなく分かるけど、使い方はおかしいと思う」

『人の揚げ足とるんじゃないありません！そんなんだからいじめられるのよ！』

「お母さん！？」

ハッ、バカ言っちゃ困る。わたしはこんなヘタレ生んだ覚えはない。

わたしは将来スポーツ選手と結婚するのさ。イロー的な。

「おいそこ、静かにしろ」

荒井先生に怒られた。荒井って誰？って奴に紹介しよう。体育科B組の担任で、体育教師。詳しくは39話を読もう。

『だけど綱引きか……。あたし足には自信あるけど、力はちょっとね』

ほら、か弱い乙女だからさ？

そう言ったら、幸希が小声で返す。小声なのは、また荒井に怒られるのが嫌だからだねきつと。

「いや、でも舞ちゃん力あるでしょ。ガラスわったり、ケンカで相手を入院させたりしてるじゃん」

『あれは火事場の馬鹿力……。怒りのパワーだよ』

「怒ると怪力発揮するんだ？」

『まあそういうこと。だから怒らせてよ』

「いや、怒らせてよって言われても……。そういうことは青海のほうが得意じゃない？」

分かってないの幸希は。アイツに言われたらマジギレして、綱引きどころじゃないっつーの。

なんて思っていたら、始まりの合図に銃声が響いた。体が持つてかれる。

『うおおおお！引きづられてるっ！』

不意打ちなんて卑怯だ！

「うっわ、すごい力……」

『くそ、B組にはラグビー部の賀川がいるから』

「よく知ってるね。って…ホントこれきつ……」

『前に告られた』

「マジで!？」

余程驚いたのか、幸希が綱から手を離す。

って、バカか！綱引きなのに綱離すバカがどこにいる！実はバカがこのやるー！

「そんなにバカ連発しないでよっ」

『え？すごいね幸希。心のなか読めるんだ。やっぱり普段魔王の側にいるから？感染かあ……』

「いやいやいや、舞ちゃん声に出していたから」

マジですか。あたしって正直だな、うん。

「っていうかお前等！のんびり話してる場合じゃねえだろ！このままじゃ負けるぞ!？」

クラスメイトの光太に怒られた。

ムカつくなチクショー。でも確かに、このままじゃまずいね。

『幸希、あたしを罵って』

怒りで力アップ作戦よ。

「の…！？いや、そういうプレイは青海と……」

『誰がSMプレイするって言ったアアア！さっき言ったこと忘れたの？ついでに私はSだ！』

そう叫ぶと、『あ、そっちか』と呟く。そっちも何もねえよ。

『ほら幸希、早く！』

「え、えーと…バカ」

『もつと！そのくらい慣れてるから！』

あ、自分で言っただけ。いや、でもバカぐらい飽きるほど言われてるからな。

「バ、バカドジマヌケ！」

『もつと具体的に！』

「単細胞。寸胴。色気なし。妄想魔。いっぺん死ね」

『なんだとテメエエエエ！！』

いきなり辛辣じゃね！？

「ぼ、僕じゃないよ！」

胸ぐらを掴むと、幸希は両手を顔の前で必死に振る。

「チビ。Aカップ。赤点常習」

『デメエかあ！！っていうか、言い過ぎッ。泣くぞあたし！』

標的をいきなり現れた青海に変える。

ってか、なんでここにいるんだコイツ。なんで普通に持ち場離れてるんだ。

『ぬあああム力つく！』

「ハッ。短気だな」

「ちょ、ちょっと舞ちゃん、青海！ケンカしてる場合じゃ」

あたしが青海に掴みかかろうとしたとき

ドンッ

終わりの合図に銃声が響いた。

……………え？終わった？

「B組の勝利！」

荒井が叫ぶ。

え？マジで？嘘。ちょ、泣きそうなんだけど。

『……ま、まあドンマイ』

そうみんなに笑ってみせたら、D組全員にばこられた。

『お、青海のせいなのに……』

「舞、あたしはいつだって舞の味方よッ」

第50回戦 体育祭〰全員リレー〰（前書き）

なんだかんだで50話まで来れました。読者のみなさまに感謝します！これからもよろしく願いしますね

第50回戦 体育祭〜全員リレー〜

第50回戦 なんだかんだで全員リレー

『なにこのタイトル。手抜きしてるみたいじゃん』

あたしが独り言を呟いたら、いつからいたのか、青海が口を出す。

「してるみたいじゃなくて、実際してるだろ」

と。

どうして？と聞くと、そいつはいつもの無表情で言った。

「綱引き短縮してるじゃん。A組とC組」

『……………』

「なに目そらしてるんだよ」

いや、だってあれは、ねえ？

ほら、たいして見せ場なかったから。あまりに呆気なく終わってさ。

『だからとばしたのさ』

「やっぱ手抜きじゃねえか」

『……………さあ、最終競技いつてみよー！』

「シカトかてめえ」

つてことで、『全員リレー』です！

とりあえず足の速い奴は、最初と最後に集中させた。あ、もちろんあたしはアンカーね。それ以外は却下。

一番もいいと思ったけど、注目されるのはやっぱりアンカーでしよう。青海とアンカーの座を取り合ったけど、あたしの方が速いから青海は次に目立つ第1走者になった。全員リレーって、みんな50メートルずつだけど、最初と最後だけは100メートル走るんだよね。

ついでにわたしの前は、わたし程じゃないけど、スポーツ万能の幸希。流華は確か前のほうだった気がする。あたしと遠いゝって、嘆いてたから。

いやあ、愛されちゃって困るねえゝゝ

バアンツ！！

『うわっ、なにになに?』

って、今の銃声? え、もう始まったの? 不意打ちですかコノヤロー。

『うーん、やっぱりB組は早いなあ』

それに比べ、何やってんだよ青海。最初が肝心なんだぞ? 1位以外許さないっつーの。

なんて思っていたら、どんどん間合いを詰めていく。B組と張り合えるなんて、あいつ足早くなったか?

なんか、それはそれでム力つくなあ。

バトンが第2走者に渡された。現在あたしのクラスは2位である。

『孝也ーファイトー!』

応援は大切だね、うん。がんばれ陸上部! その实力を見せてやれ!

「みんな本気かあ。手え抜いたら怒られるな」

不意に隣から声が。

『うわっ! って、なんだ鈴か』

驚かすなよコノヤロー。いつからいたのさ。

「疲れんの嫌いなんだよな」

ため息まじりに言つて、赤い髪をがしと掻く。
おーい。今聞き捨てならない言葉を聞いたぞ。

『ちよつと、本気出すつて約束したじゃん。嘘ついたら針千本ならぬハリセンボンを丸ごと飲ますからな』

「それたぶんオレ死ぬ」

『大丈夫。鈴ならヘツチャラだつて。たぶん』

「そんな曖昧な信じられ方困るんだけど」

「お前らバカな言い合いしてねえで応援しろよっ」

怒られた。しかもまた光太に。チクショー、鈴のせいだ。

わたしは『チエツ』と小さく舌打ちしながら、自分のクラスを視線で追い掛けた。

今は……あり？なんか3位じゃね？

え、なんで、嘘。いつのまに抜かれたのさ。2位つて金持ち学級のC組じゃん。

オイオイ、この少しの間に何があつたんだ。

なんでカメラ私達に向けてたんだよ。なんでこんなくだらない言い合いを映してたんだよ。あ、くだらないって言っちゃった。

『ちよつ、気になるんだけど。かなり気になるんだけど!』

「ドンマイ舞!

あ、“まいまい”だって。おもしろくね?」

『おもしろくねーよ!もとはと言えばアンタのせいだこのヤンキー!』

「うわっ、こら。髪を引つ張るな!くずれるだろ!」

わたしの手を必死に払い除けようとする鈴。何がくずれるだっ!たかが髪の設定にわたしより時間かけちゃってさ?

むしろポーズにしろ!

『だいたいね、若い頃からそんな真っ赤っ赤に染めると、将来ハゲるんだから!』

「ハゲねえよ!!」

『いいやハゲるね。神に誓ってハゲるね。月に代わってお仕置きだね』

「…舞、いい加減にしないと追い出すぞ。鈴、お前の待場ここじゃないから」

そんな光太の指摘は、生憎わたし達の耳に届かなかった。

第50回戦 体育祭〰️全員リレー〰️（後書き）

ドンマイ光太！

第51回戦 体育祭〜全員リレー2〜

第51話 プライドと意地を天秤にかけて

みんな必死に走る走る。頑張ってるね。変わりがわりに走者にバトンがまわって面白い。

『見る光太。まるで人がゴミのようだ！』

「そーですねム カ様」

『しかしなぜ我がD組は3位なのだ？』

「お前が見ていないうちに何かがあつたんだよ」

だからなにがあつたんだよ！

まあでも、2位との差はたいしてないから大丈夫そうだけど。

どうせC組なんて貧相なぼっちゃんばかりだろうし、抜けるっしょ。

「舞、鈴がC組抜いて2位になったぞ」

『おお、さすが私の相棒だだ。誉めてつかわそう!』

「あ、もうすぐ俺の番だ」

『…ふっ、せいぜい頑張ってくれたまえ』

「うざいんだけど。殺意湧くんんだけど」

『痛ッ!』

光太のチョップがあたしの顔面に炸裂!しかも目エ狙いやがったコイツ!

『目が!目がああああ!』

「もついい加減ウゼエよそのキャラ」

そう言って地面に膝つくあたしを、無表情で蹴る光太。

コイツやばいつて! 実は隠れSだったのか!

今までそんな素ぶり見せてなかったのにイ!

「あ、俺の出番だ」

そう言っつて、光太はコースに入る。そして何事もなかったのようにバトンを受け取り、走っていった。

S Mプレイかと思ったら、放置プレイかよこのやろー。

『くそ、覚えてろ…』

「よ、舞！ 約束通り本気で走ってやったぞ」

『おお鈴 後で 』

ワァッー！！

鈴の声に振り返った瞬間、いっきにざわついた。

何事だと見れば、

（あ、流華……！）

愛しの流華が、なんと転んでいた。

流華は表情を歪めながらも、直ぐに立ちあがり次の走者にバトンを渡す。

D組はいっきにビリ。鈴が『あちゃー』と呟いた。だけどそんなことより、流華の身体のほうが心配。

足とか捻ってたらどうしよう！

「ねえ、今の見た？」

「見た見た！ 絶対C組の奴わざとだよ。これだからプライド高いお嬢様は」

近くのB組の女の子の会話。いま、聞き逃せない言葉があった。

『……ねえ、それ詳しく聞かせてくれる？』

話しかけると、その二人組はお互い顔を見合わせてから、口を開いた。

「C組の娘が、葉月さんの肩にぶつかっていったの。さりげなくだったけど、あれ絶対わざとだと思う」

ね？ともう一人の娘に聞いて、その娘も頷いた。

つまりは、なに？勝ちほしさに妨害したと。

へえーふーん。

つて、ふざけんなよ！！

『ぬあああム力つくッ』

「ケンカなら付き合っぜ？」

『NO！勝負はリレーでつける。負かしてやらあ』

「でもビリだぜ？ちょっとキツイんじゃない？」

『そんなの問題ない。丁度楽勝すぎてつまらないと思ってたし、いいハンデだね』

打倒C組！絶対1位はもらってみせる！

第52回戦 体育祭〜全員リレー3〜

幸希視点

勝ちたいのは分かる。負けを目指して走ってる人なんて、きっと人もいないはずだから。

けどさ、そういう汚い手は、……いただけないね。

第52話 ラブ・パワー

「また派手に転んだな」

いつからいたのか、隣で青海が呟いた。

「転んだんじゃない。転ばされたんだよ。C組の娘にね」

やや睨みをきかして言うと、青海は『分かってる』と答えて肩をすくめる。

流華ちゃんが転んだことに対して、意外にも怒ってないらしい。

まあ、これで怒ったら不条理だ。逆に僕が青海に怒る。

「うるさいな、アイツ」

ため息混じりに呟く青海の目線の先には、怒り狂う舞ちゃんの姿。余程ご立腹みたい。

多分その怒りはビリになったことじゃなくて、C組に対してだと思う。仲良いもんね、あの二人。

「安心しろ、幸希」

「……安心？」

「もうA組をぬかした。このまま行けば、最後にあのバカ女が1位なるだろ」

確かに、舞ちゃんのあの足の速さは超人的だ。B組の人よりもすごい。並外れた運動神経。だけど

「その必要はないよ。僕が全員ぬかすから」

「……ずいぶん自信があるんだな」

「だって俺、青海より速いよ？」

ピクリと、青海が眉をしかめる。わずかに歪んだ表情。けれどすぐにまたポーカークフェイスに戻った。

「お前、一人称変わってる」

「……ああ、うん。間違えた。“僕”だったね」

そう訂正してにつこりと笑ってみせると、彼は気持ち悪い、と吐き捨てるように言う。ひどいなあ。

僕はそつと天を仰いだ。午後になっても、変わらない眩しさを放つ太陽。反射的に目を細める。

滲みでる汗は不快だけど、時折吹く風が涼しさをもたらしてくれる。

チラリと隣の青海を見た。

……ホント、なんで汗かかないんだろう。

前にそれを尋ねたら、『王子だから』、というふざけた答えが返ってきた。

そのオレ様な性格は、王子というより皇帝。舞ちゃんが魔王と呼ぶのも分かる気がする。

青海、僕にはあの王子スマイル見せないし。

青海の本性を知らない娘が言うには、

『優しくて知的でさわやかで、しかも黒髪王子様フェイスvv』らしい。

まあルックスはモデル並だよね。中身だって、なんでもできる天才型だし。

「……3位か」

青海が隣で呟く。

1位は当然だけどB組。そしてそれを追うようにC組。D組は僅差で3位だ。

「もうすぐ出番だな」

「うん。これで体育祭終わっちゃうのか。あっけない」

でも、楽しかった。こんなに青春できる僕らはきっと幸せ者。

最後から3番目の走者が走り始める。僕は位置に着いた。

「幸希ッ！」

彼の声にあわせ、バトンを受けとり。思いきり、地面を蹴った。絶対、1位にならないといけない。

「マジギレしてるな」

そうこぼした青海の言葉は耳に届かず、風に消し去られた。

周りの応援が聞こえる気がする。だけど、なんと言ってるかまでは理解できない。余裕がない。

とりあえずC組を抜く。
流華ちゃんを転ばせたのはあの娘の責任で。C組は別に悪くないの
だけ。

そんなに聞きわけよくない。

頭では分かってる。だけど怒りはおさまらなくて。

足に全集中をかけた。

あ……ぬいた。

そう思ったときにはもう、バトンが舞ちゃんの手に握られていて。

「うおおおおお！舞さまの底力アアア！」

そんな雄叫びを轟かせながら、もうびっくりするくらいのスピード
で他クラスと差をつけていった。

「うひゃひゃひゃひゃー！！やっぱりあたいが1番ッ！」

……あれがヒロインでいいのかなあ。

そんなことを思いながら、額の汗をぬぐった。

ちょっとイッちゃってる舞ちゃんだけど、刻々とゴールに近づいて
いる。

そして今、テープを切った。

「逆転しましたアアア！D組優勝です！」

歓声があがる。続いて、B組が2位に踊りでた。

「……………よかった…」

弱々しい声に振り向くと、そこにはホツとした様子の流華ちゃんが。膝から血が滲みでいて、やや涙目だ。

「る、流華ちゃん。消毒しないと」

「…よかった。本当に、よかった。私、あんなへマして。でも、あなたのおかげで、笑える。喜べる」

「流華ちゃ

」

「本当にありがとう舞ッ！」

「……………え？」

僕の予想に反して、彼女は横をすり抜けた。振り向くと、流華ちゃんは舞ちゃんに抱きついている。

「まいゝ」

「流華。あたし、流華のためにがんばったよ」

「……ッ。もう、大好き！」

頬擦りする流華ちゃんと、それを気持ちよさそうに受け入れる舞ちゃん。

危ない。禁断だ。友達の域を越えている。

「……まあいつか」

彼女が、笑ってくれたなら。

「だからお前はヘタレなんだよ」

「いきなり現れてヘタレ言っつな、青海」

第53回戦 体育祭終了

わたし達のクラスは見事1位となり、優勝カップを手にいれることができた。

第53話 罪な女、罪な男

「えーと、なに。なんていうかまあ、優勝おめでとつとか言ったら嬉しいのか？」

体育祭が終わり、教室に戻ったわたし達に向けて翔兄はそう言う。

教師として、その言葉はかなりの暴言じゃない？まあそんなところも素敵だけど

『ねえ翔兄ー。優勝したんだからさ、なんかご褒美ちょーだい』

「別に俺、優勝したいなんて言ってないし」

『ええー！翔兄のためにがんばったのに！』

……10%ぐらいは。30%はクラスのためで、残りの60%は自分のため。

え？ヒロインがそれでいいのかって？

いやいや、むしろそこがあたしのチャームポイントでしょ。

「でも優勝かー。やっぱり嬉しいね」

幸希が頬杖をつきながら、微笑んでそうこぼした。

夕日に照らされた幸希は、とても絵になっていて。さすが『微笑みの貴公子』と呼ばれるだけはある。

『今回、幸希はいい所ばっかだったもんねー。いつものヘタレキャラはどうしたの？つまらないじゃん』

「勝手にそんな不名誉なキャラにしないでよ」

『まあ結局最後はヘタレだったみたいだけど』

「あれ無視？」

サラリとシカトしたせいかな、幸希がなんか文句言ってるけど、まあ気にしない。世の中プラス思考だよね、やっぱり

「オーイ、鈴。まだ帰っていいなんて言ってねえから」

翔兄の言葉に振り向けば、鈴がドアに手をかけていて、今まさに帰ろうとしていた。

っていうか今更だけど、鈴のジャージ姿貴重だな。写メ撮りたいし。

鈴は赤い髪をかきあげ、

「もう終わりだろ？だるいから帰る」

と、また自己中な発言をする。

「少し待て。……あー、でもどうせこれから帰るんだし、別にいいか。よし、帰れ」

「なんか帰って言われると帰りたくなくなるんだけど」

「いや帰っていいって。どうせお前、残ったって邪魔なだけだし」

「……やっぱり帰るのやめた」

翔兄の言葉にカチンときたのか、鈴はドアから離れ自分の席に音をたてて座る。ドツカリと。

机の上に足のせてるあたり、ヤンキーだね。行儀悪い。本当に金持ちの息子なのか？

席に着いた鈴を見て、翔兄はため息をつく。

「天邪鬼だな。まあいいか。えーと、なんか片付けあるみたいだから、よろしく。先生たちは打ち上げだから」

『はあ！？なんであたし達は片付けで翔兄達は打ち上げなのさ！』

「大人は疲れるんだよ。やってらんないことがあるの。酒でも飲んでストレス解消するの」

『ずるいー！ふんだ、翔兄なんか王様ゲームで女の子とエッチなこととして、そこを偶然愛姉に見られてフラれちゃえ！』

「いや、お前の言ってるそれは合コン。俺たちは打ち上げ」

『同じだもん！』

「違えよ」

ああ、一刀両断された！ダメージでかいツス隊長！

に、しても。

片付けかぁ。面倒くさいや。なんか白熱した後にそういうのって冷める。

「ねえ、舞」

そんなことを思っていたら、後ろから流華が話しかけてきた。

首をまわして、『なに？』と尋ねる。

「どうでもいいんだけど、むしろ嬉しいんだけど、アイツ何処にいるの？」

『アイツって？』

「高梨青海」

そう言われれば、いない。閉会式の時はいたのに。

「青海ならたぶん屋上に行ったよ」

あたし達の話聞いていたのか、幸希が口をはさむ。

屋上かあゝ。あ、もしかしてアイツ片付けサボる気だな!?

『そんなの羨ま　じゃなくて、ずる　じゃなくて、許さない!』

ひとりだけサボりなんて。みんな嫌なのに、片付けちゃんとやるんだよ? 今すぐに帰りたいのに、ちゃんと残るんだよ?

こんなのおかしい!!

『つてことで翔兄、D組の平和な未来のために、舞いきまーす』

「お前もサボりたいだけじゃ……………つて、もういねえ」

『青海め。ひとりだけサボろうつたって、そうはいかないぞ』

屋上へと続く階段を登りながら、文句をこぼす。

最後の一段を越え、扉の鍵を見るとやはりというべきか、はずされていた。

こじ開けた形跡がないあたり、ピッキングの仕方が上手い。泥棒なれるんじゃない？天職だよきっと。

あたしがやると、どうも強引な跡が否めない。まあ実際、強引なんだけどね。

重い扉を押すと、勢いよく風が吹いてきた。一瞬、息がつまる。

反射的に閉じた目を開くと、フェンスに寄りかかる彼がいた。

『見つけたぞ魔王！今こそみんなの恨み晴らしてやる！』

叫んだわたしの声は、少しだけ響いて。そして風に連れてかれた。

あり？ノーリアクション？おかしいな。いつもなら容赦ないツッコミがくるのに。

ひとりで叫んじゃって、なんか恥ずかしいじゃん。わたしは不思議に思いながら、青海のもとへ駆け寄った。

『……………青海？』

応答がない。

うつ向いた青海の表情は、前髪がかかっているように見えなくて。のぞきこむと、冷たい色した瞳は伏せられていた。

『寝てる？』

めずらしい。絶対に人前じゃ、防御とらなそうなのに。それともひとりだから、安心して眠っているのかな。

『かなり貴重……。ケータイ持ってくれば良かったな。女子に高く売れそう』

そんなことを呟きながらも、わたしはジッと彼の寝顔を見つめる。

うわ、肌透き通ってるなオイ。女子より綺麗なんじゃね？

ム力つくくらい美形だ。目の保養になる。顔は整ってるのに、腹のなかは真っ黒なんだから。卑怯だと思う。

いつもより長く見える睫毛。薄い口唇。触りたくなる。

『って、あたしキモオオオオ！』

伸ばしていた手に気づき、わたしはザカザカと後退った。

危ない危ない。もう少しでセクハラするところだった。

『大丈夫、あたしはまだ何もしてない。あたしの手はここにある！』

これは完璧に未遂だ。いや、むしろこんな所で寝てるコイツが悪い！

『あたしは無罪だアアア！』

そう叫びながら、あたしは屋上を疾風の如く走り去った。

「……惜しかったな」

舞がいなくなったのを確認して、顔をあげる。

狸寝入りしてればなんかしてくると思ったが、計算違いだったな。

まあ変な悪戯してこようものなら、殴る蹴るしたけど。

「触れるくらいなら、別にいいのに」

後々、からかいのネタにもなるし。

空を仰ぐと、みとれるほどの青が広がっていた。俺はもう一度、瞼を伏せる。

触れられると少しだけ期待してたのは、口がさけても教えてやらない。

『あたしは変態じゃないあたしは変態じゃないあたしは変態じゃない』

「意味分かんないこと言っでないで、片付け手伝えよ」

『痛ッ。なにをするのさ光太！お前なんか使い捨てキャラだからな。どうせもう出番ないんだからな！』

「黙れ」

『イタタタタ！ごめんなさい光太様！』

第53回戦 体育祭終了（後書き）

体育祭編やつと終了です。またしばらくは日常に戻りますよー。

第54回戦 学生は黙って勉強（前書き）

再び日常へ

第54回戦 学生は黙って勉強

「来週、テストだから」

翔兄のその言葉に、わたしは世界の終わりを見た気分になった。

第54話 テスト前になると急に部屋を掃除したくなる

理不尽だと思う。

先日まで体育祭で忙しく、勉強する暇もなかった生徒に対してその台詞は、あまりに残酷だ。

そもそも人は頭脳だけではないと言っているのに、大人は順位をつけたがる。これは矛盾してゐるではないか。

「ってことで、私は異議をもちます！」

「……面倒くせえ」

パンツとデスクを叩くと、翔兄は心底嫌そうにため息をついた。

「おかしいじゃん。テストでその人の全てが分かりますか？分らないよ！」

「そうは言ったって、ここは私立だから。学力上昇を目指すのは当然だろ」

「あたしだって好きでここに入学したんじゃないもん！エレベーター式で受験する必要がないから入ったんだもん！」

「エスカレーターな」

「第一なに？なんで勉強すんの？将来役に立たないじゃん」

「学生の本業は勉強だ」

ネクタイを少し緩め、少しヒビの入った（叩いたせいかな）デスクの傷に沿うよう撫でる。

どこか眠そうな目は、さっさと消えてくれと語っていた。もちろん、そんなことわたしは知ったこっちゃないけど。

「…どうしても駄目なら、せめて数学教えて！」

「いや、俺国語担当だし。数学教師に頼めよ」

「あたしあの先生嫌い」

「どこが？」

「顔！」

キッパリ言ってみせたら、翔兄は呆れた表情で『失礼だろ』と呟いた。

だって好みじゃないんだよね。インテリッって感じでさ。

それにほら、翔兄って理数系な外見してるし。

『ね、翔兄。一生のお願い』

「お前の一生は何回あるんだ」

『じゃあ3日のお願い！』

「帰れ」

（チエッ！ 翔兄のケチ。教えてくれたっていいじゃん）

追い出されたわたしは、屋上のコンクリートに寝そべった。

空を仰ぐと、彼方に太陽が見える。柔らかな陽射しが心地好い。

瞳をそっと閉じた。ヤバイ、眠いかも。

『勉強…どうしよう』

ここの学校つてば、問題が半端なく難しいんだから。一人で勉強したって理解できない。

『あ、そうだ。流華に教えてもらおう』

A組をさしおいて学年10番以内の頭脳。そんな秀才彼女に、とりあえず要点だけ教えてもらって。

今回は数学と理科、30点いくよう頑張ろう。

流華は確か理数系だったな。丁度いい。

「オイ」

低い声に目を開ければ、なんと上履きの底が。しかもドアップ。

人にいきなりこんなことをしてくる奴を、わたしは一人しか知らない。

わたしはその上履きを押し退けた。見下ろされているこの体勢が気に食わない。

『足退けるよ、青海』

「出てけ。ここは俺が使うんだ」

なんつー利己的な。この腹黒魔王め。わたしに対しては人一倍ドS
なんだから困る。

わたしの次は幸希かな。まあ幸希はどっちかって言うともゾっばい
し。

『あ、そういえばアンタも頭良かったよな。えっと、偏差値70だ
っけ?』

「75。お前とは40も差があるな。ってことで立ち去れ」

そう吐き捨て、足をわたしの頭に押し付けてくる青海。ちょ、ぐり
ぐりいつてるんですけど。

っていうか、わたしはそこまでバカじゃない。数学と理科が苦手な
だけさ。国語なら偏差値60以上、多分あるし。

いや、ホントだよ?本気出せば青海よりいいよ?

……数学は偏差値38だけど。

『青海さー、あたいに勉強方法教えてくれない?』

「ああ、来週テストか」

今思い出したように言う。余裕だなチクショー。

「…まあ、いいけど?」

『マジで!?!?』

「お前のツルツルの脳にも分かるよう、丁寧に教えてやるよ」

なんかムカつくけど、こいつがこんなこと言うなんて珍しい。よっぽど機嫌良いんだろうな。

まあ、頭良いのは認めるからね。そのお言葉に甘えようじゃないの。

「じゃあ舞。そこ座れ」

『?.....いつ?』

言われた通り、1回起き上がり地面に正座した。

青海はニヤリと不気味な笑みを浮かべる。背筋に悪寒がはした。なんか嫌な予感がするぞ。

「舐めろ」

わたしの予感は、見事に的中した。

第55回戦 ドS魔王降臨

わたしは耳を疑った。

第55話 ほつぺた以上くちびる未満

『……………は?』

「だから、舐めろよ」

向けられた言葉と、目の前に差し出された靴。

停止しかけた思考を働かす。……………ああ、そういうことね。舐めろか、うん。

『つて、なんでだよ!』

「この単細胞に勉強を教えて下さい青海様、って言って俺の靴を舐めたら、この天才が全教科80点以上とれるよう教えてやるよ」

うおおおお!! いつにも増してドSだ!

そつだ。コイツはこついう奴だった。わたしにタダで教えてくれるはずがない。

ギブアンドテイクどころか、更なる利益を求める。

「ほら、どうするんだよ。別に強制はしねえぜ？お前が10点とろうが20点とろうが、俺には関係ねえし」

つま先でわたしの顎を掬いあげる。ちょ、喉に刺さってるんだけど。痛いんだけど。

（なんて外道なんだ……！）

わたしがコイツの靴を舐める？いや、さすがにそれは人としてのプライドが許さない。

しかし少し舌を伸ばせば、万々歳の成績。みんなを見返すことができる。翔兄に褒めてもらえる。

尊厳か、成績か。

『 やっぱり無理イ！悪いがわたしはS寄りの人間なんだ！』

そつ叫び靴を振り払えば、青海は小さく舌打ちした。

「ふうん？いいんだな、それで？」

『流華か幸希に頼むもん！』

「……あの女はともかく、幸希は自分の勉強で忙しいだろ。お前に教えられる余裕も頭脳もねえよ」

『オイオイ。何気ひどいこと言ってるぞ』

「幸希がテストの点が良いのは、かなり勉強してるからだ。あれは秀才、俺は天才」

『言いきつたな……』

その自信はどこから来るんだ。天才だから、努力する必要ないってか？ム力つく。

幸希も頭良いけど、さすがにA組の子たちには負けてるしな。まあ、運動神経抜群だから。

「で、舞？」

『あんだよ』

「本当にいいのか？葉月流華で。理数系の奴が文系の奴に理解させるのは至難の技だぜ」

『お前だつて理数系だろうが』

「俺はそんな関係ないくらい天才だからな」

そう言つて、またもや靴をわたしの頬に擦り付ける。

ぐっ、確かに前も流華に教えてもらったとき、流華はかなり困ってたな。

「ほら、どうするんだ」

『だ、だから。そんな真似はしたくないって!』

「……ふーん」

しゃがみこみ、わたしと同じ目線の高さに合わせる青海。

冷めた瞳は、相変わらず感情が表れていない。だから、こんな風にジッで見られても不快だ。

「舞」

『な、なに　　んあ!』

手を伸ばされたと思ったら、唐突に指を口内に突っ込まれた。

『はひふんほひゃ!』

「噛むなよ」

『ん、ひゃ…!』

人指し指が歯列を、親指が唇をなぞる。くちゅ、という水音が響いた。

青海の空いてる左手は、わたしの首筋にあてがい、軽く爪をたてて

いる。

どこを見ればいいのか分からなくて、視線があちこちに泳いだ。目が合わないよう、前だけは向かない。

（なにがしたいんだ…！）

まったくもって理解不能。この行為になんの意味があるのだろうか。

だって、青海の指は唾液で濡れるしわたしはただ苦しいだけだし。おかしいだろ、うん。

っていうか、コイツってもっと潔癖症じゃなかったっけ？雑菌が…とかなんたらかんたら言いそうなのに。

『ん…く……』

苦しさに、生理的な涙がにじんだ。

指は上顎を撫で、舌に触れる。指の腹で愛撫したと思ったら、ひっかかれて。

わたしは青海の胸を押し返してるけど、まるで無意味だ。だって、力が入らない。

生き物のようにうごめく指。苦しいけど、痛くない。くすぐったくて、もどかしい。気持ち悪いようで、気持ちいい。

（……………は？）

わたしは今、なんて思った？気持ちいい？誰が？何で？

（有り得ねエエエエエー！）

「ッ！」

青海が小さくうめき、指を勢いよく引き抜いた。その指からは、赤い雫がぷつくりと浮き出ていて。

にじんだ血を舐め、彼はわたしを強く睨んだ。

「噛むなって言っただろ」

『う、うるさいやい！アンタが変なことするからじゃん！』

口からこぼれた唾液を拭い、そう叫ぶ。体がすごく熱くて、赤面してるのが自分でも分かった。穴があつたら入りたい気分だ。

青海はしばらくわたしを見ていたが、不意に立ちあがる。その際に腕を引かれ、わたしも無理矢理立たされた。

掴まれた腕が、痛みで悲鳴をあげている。

「つまらない」

そう青海は呟いて、

『な……』

わたしの頬を舐めた。

ボンツ、と頭が沸騰する。頬に触れた、一瞬の冷たさ。

固まって動けないわたしを置き去りに、彼はわたしの横をすり抜ける。

後ろで扉の閉まる音が、大きく重く響いて。

『…意味分かんない…』

わたしはコンクリートの上、大の字に寝転んだ。

第56回戦 予想外の展開

昨日は散々だった。人をおちよくつといて、放置プレイだなんて。

まあいい。勉強は流華に教えてもらうもん。そうすれば、とりあえず30点以上とれるし。

前に誰も頼らず実力でいったら、大変なことになった。数学に至っては、鈴より低かったね。

（あれ？）

そう言えば、まだ流華来てない。流華が遅刻なんてめずらしいな。

「ほらー、席着けー」

気だるそうに翔兄が入ってきた。ざわつきつつも、みんな着席する。

翔兄は教卓に手をつき、帳簿を開いて一言。

「葉月は欠席なー」

わたしは宇宙の終わりを見た気分になった。

『うあー、ぬい〜』

休み時間、机に伏して頭を悩ませる。わたしは今、絶望の縁に立たせていた。

「風邪らしいぜ、あの女。そんな状態じゃ、お前に教えるのは無理だな」

嫌味ったらしい声に顔をあげれば、目の前にはやけに愉快そうな青海が。

『アンタの席そこじゃないでしょうが。勝手に座るなよ』

「いいだろ、休み時間くらい」

フツと笑ったかと思うと、有ろうことかわたしの机に足をのせた。

あ、ヤバイ。こいつの言おうとしてることが分かった。

「ほら、舐めろ」

『公開プレイかコノヤロー!』

勢い余って机を蹴りとばしたら、中に入っていた教科書やらノートをぶちまけた。

青海はサラリとかわしているし。なんかもう、色々とムカつくよ。

「頼りの相手がいないんじゃない、もうこれを舐める他ないな」

『なんでだよ!!』

ずい、と靴の裏を顔面に寄せてくる。そこまでして舐めさせたいか！

でも、無理。テストも無理だけど、そんなことするのはもっと無理。

人に靴舐めさせるのは大歓迎だけど、逆はキツイって。

「じゃあどうするんだ？お前」

『あたしにはまだ頭の良い友がいる!』

貴公子の場合

『幸希』

「ダメ」

『まだなにも言っていないんだけど!?!』

机に広げたテキストとにらめっこしてる幸希。休み時間にまで勉強ですか。

……いや、今気付いたけど、みんな目の色変えて勉強してる。いく

らテスト前だからと言って、異常だ。A組じゃあるまいし。

「どうせ勉強教えてとかでしょ？悪いけど時間ないから」

ため息混じりに言われた。

ぐ、読まれてる。

っていうか、冷たくない？いつもだったら、もっと優しい言葉かけてくれるのに。

「今回のテストは難易度高いしね。留年はないけど、悪かったら補習だよ？」

『聞いてない！』

「聞いてねえのが悪いんだろ」

青海が後ろから口をはさむ。なにさりげなくついて来てんだ。

「青海も余裕だね。舞ちゃんをいじってるなんて」

「まあな」

『コノヤロー！』

「流華ちゃん大丈夫かな……」

『あたしの心配は！？』

「青海に教えてもらえばいいじゃない」

ケロリと言ってみせる幸希。それが出来たら苦労しないっつーの！

「とにかく、僕には無理だから。ごめんね」

謝ってるけど幸希、一度もわたしのこと見てないよね。

「ほら、チャイム鳴ったよ。席着いて」

わたしは冷酷貴公子を引つ叩いた。

ヤンキーの場合

「舞、舞」

クラスメイトに勉強を頼み中、名前を呼ばれた。振り返れば、鈴がケータイ片手に立っていて。

『なに、鈴。あたし今交渉中だから後にしてよ』

「いや、だからね舞。私も余裕ないって……」

ぶつぶつ呟く美紀の声は、まあ聞こえないということだ。

「放課後ゲーセン行こうぜ」

ニツ、と笑う鈴。この子の場合、余裕あるないじゃなくて単に勉強嫌いなんだよね。

テスト勉強なんてしてたら、それこそ大地震が起こる。

鈴はパチン、とケータイを閉じこつ言った。

「前に俺らが残した記録、塗りかえられてたんだぜ？」

『なに！？それはまずい！行かなきゃ！』

「ちよつ、舞。あんた勉強するんじゃないの！？」

ぐい、とわたしの腕をひく美紀。

う、そうだった。いや、そうなんだけど。この甘い誘惑にわたしは

……

「行くだろ？舞」

勝てないッ！！

『もちろん行き　グハア！』

まず、と続くはずだった言葉は出てこなく、代わりにわたしを襲ったのは痛みだった。

「馬鹿かお前。そんなんじゃ、10点もとれないだろ」

青海。乙女相手に、シャイニングウィザードってどうなの……。

「邪魔するなよ青海ー」

鈴がムツと口を尖らせる。それに青海は無表情で返した。

「鈴はコネがあるだろうけど、このバカ女は何もない」

『何もくないわよッ』

「精々、体力と運動神経ぐらいだろ？ほら、さっさと靴舐めろ。嫌なら素足でもいいぞ」

『もつと嫌じゃボケ！』

隠れサドの場合

『光太、アンタ確か頭は良かったわよね』

「……勉強なら教えないぞ」

『なんで！？』

「面倒くさいから」

ケロリと言い切る光太。彼も休み時間に関わらず、テキストを開いていた。

『ケチ！要点だけ説明してくればいいんだってば！』

「そんなことしてる時間があつたら単語のひとつでも覚える方が得くぞ、優しくない人間だな。世の中を損得で考えるなんて。」

思いきり睨んでも、彼はどこ吹く風。気にも止めず、淡々と手を動かす。

「みんなに見放されたな、お前」

くすつ、と笑う青海。チクショー、その涼しげな面殴りたい。

だいたいコイツ、なんでついてくるんだよ！お前も勉強しろよ！

「青海、教えてやればいいじゃん。どうせ学校じゃ勉強しないんだろ？」

手はとめずにそう言う光太。

「利益が無いことする趣味はないからな」

「ま、そこは同感だけど」

「ついでにこの単細胞の苦しみ姿をもつと見たいし」

「それも同意見」

このSコンビめ！！

「「なんか言った？アメーバ」」

『すみません多細胞様!』

タイムリミットはあと4日。
わたしは靴を舐めずに済むだろうか…。

第57回戦 努力と才能（前書き）

瑠璃視点

第57回戦 努力と才能

第57話 持つべきものは優秀な弟？

『どうしようどうしようどうするんだあたし！』

ソファに寝そべり、頭を抱えている姉さん。はっきり言ってるさ
い。何がどうしようなんだ。

『ねえ瑠璃！あたしどうするべき！？』

あ、ヤバイ。話ふってきた。

「……………何がどうしようなの？」

『テスト明日なんだよオオオ！』

「勉強すればいいじゃない」

『分かんないのー！瑠璃教えてー！』

そう叫んで僕の体にまとわりついてくる。姉さんは軽く涙目だった。

僕はとりあえず姉を引き剥がし、座らせる。なんで弟の僕が、こんな諭すような真似しなきゃいけないんだ。

「あのね、僕はまだ初等部。中等部の問題が分かるわけないでしょ？」

『そんなことない。瑠璃はやればできる子だって、わたし知ってるよ。だから諦めないで』

「ちょっと待つて。なんで僕はげまされてるの？」

なぜ立場逆転？おかしいよね、おかしいよねコレ。

つていうか、教えて教えて言ってないで、少しでも自分で勉強しての方がマシだと思う。

『流華は風邪ひいてるし、クラスの人たちは忙しそうだし…』

「大変だね」

『他人事かコノヤロー！』

再び僕の胸ぐらに掴みかかってくる姉さん。実際、他人事だよ。

『ねえ瑠璃、アンタのその頭脳はこういう時のためだと思っただよね』

「違っと思っ」

『つていつかさ、なんで同じ遺伝子から生まれたのにこんなに違うかな』

たぶん、頭のできについて言っているんだろう。

確かに姉さんはバカだ。気が遠くなるくらいバカである。

「でも姉さん。僕がこんなに勉強できるのは、姉さんのおかげでもあるんだよ?」

『…あ、もしかしてあたしの愛の力のおかげ?照れるわ。だけど、イケナイ感情抱かないでね。わたし達は姉弟なんだから!』

「黙れ舞」

『すみませんッ!』

土下座してそう謝る。腰低ッ。どこに弟に土下座する姉がいるんだ。……ここにいるか。

僕はため息をひとつ吐き出し、姉さんと目を合わせる。

「姉さんって昔から馬鹿だったでしょ?」

『うん……ってコノヤロー!』

「だから血が繋がっている僕は自分が心配になってさ。もしあんなになったらどうしよう、ってね」

『ちよっと瑠璃くん?あんなんって酷くない?』

「そしてとうとう不安に堪えられなくなり、僕は出来る限りの努力をした。つまり姉さんは僕にとっての反面教師なんだ」

『反面教師？ああ、翔兄みたいな人のことか』

翔兄って…中等部の先生か。確か姉さんの担任の。

っていうか『翔兄』？よくそんな気軽に呼べるな。

「でも良かった。あまり血縁は関係ないんだね。安心したよ僕」

『努力すれば頭よくなるって言うのか？』

「天才は99%の努力と1%の才能で出来ているんだよ？」

『じゃあわたしにもまだ希望が……！』

「ないよ」

即答すれば、え？と笑顔をひきつらせる姉さん。

「だって姉さんには1%の才能もないもんね」

『チクショー！なんだよこの完璧人間め。あたしは成績で5なんて体育と国語ぐらいしかとれないぞ！』

「姉さん譲りの運動神経があるし、頭はまあ努力してるし。ある程度真面目にしてたら、5なんて簡単にとれるよ」

『ずるいずるいイイ！』

ぎゃーぎゃーわめきながら、僕を叩いてくる。っていうか痛い痛い！一発一発がなんて威力！

『なんで姉弟でこんなに違うのさ！』

「……どうでもいいけど、勉強したら？」

姉のことは大好きですよ？優越感が味わえますから

第57回戦 努力と才能（後書き）

腹黒瑠璃くんでした。 欠落人間と完璧人間の凸凹姉弟です。

第58回戦 赤点バッチコイ

テストが終わりました。いろんな意味で終わりました（B Y 舞）

第59話 僕は法器晩成型ですってどう考えても言い訳

舞と鈴の場合

時間がなかったんです。教えてくれる人を探してたら、あつと言う間にテスト直前で。

分かる問題からやろうとしたら分かる問題はないし。むしろ何が分からないのかさえ、分からないし。

「まーい！何うなだれてんだよ。カビ生えるぞ？」

机に伏してるわたしの背中を思いきり叩く。だけど怒る気力もない。ゆっくり振り返ると、気持ちのせいかな、うざったく見えてしまうキラキラの笑顔が。

彼はいつもしてるヘアバンドをはずしていて、赤い髪をおろしている。新鮮だ。

『…鈴……』

「あ、これ答案用紙？」

そう言つて、机の上にある5枚のうちの1枚をつまむ鈴。

あ、それ数学の答案用紙だ。よりによつて1番悪いのを見やがった。

「うわ、なんだこの点数！やべえじゃん舞！」

心配する言葉とは裏腹に、鈴は爆笑する。殴つていいかな？
ついでに、わたしの数学の点数は18点。殴つていいかな？

「俺より悪いじゃん！」

『……え』

「俺、30点以上だし」

その言葉に、わたしは自分の耳を疑つた。だって、いや、嘘。
り、鈴に負けたアアアア！！

『なんてこと！まさか鈴にまで負けるなんて』

「アッハッハッ」

『いやだアアアア！！』

「これで補習確定 ドンマイイ」

『うるせー！つてかお前もだろ！お前も絶対補習だろ！』

そうだ、鈴は数学はそこまでじゃなかったんだ。そして英語は何気
できてたりするんだ。わたしと真逆だね。

いや、待て。わたしは確かに数学は20点もいかなかったけど。で
も5教科の合計は200点いったもん！

『つまり補習は逃れたのさッ』

「あ、そうなんだ。舞、国語だけはいいいもんなあ」

だつて翔兄が担当だもん もともと文系だしさ。

「じゃあやつと遊べるんだな」

『おうよ。つてことでゲーセンへGOー！』

「GOー」

流華と幸希の場合

休み時間、流華ちゃんの背中を軽く叩いた。舞ちゃんはいない。

「……藤森」

「風邪大丈夫？」

「まあね。ちよつと熱が出ただけだし」

いつまでも振り返つてると体勢が辛そうだから、僕は流華ちゃんの前にもわりこむ。

確かに顔色もいい。大丈夫そうだ。

ジツと見てたせいか、流華ちゃんが首を傾げる。ああもう、あまり可愛い仕草しないでよ。

「そつえば、藤森テストどうだった？」

頬杖をつきながら、そう尋ねてくる。

「うーん、前より下がっちゃった。平均点も低いのが救いだね。流華ちゃんこそ、あまり勉強できなかったんじゃない？」

「そうでもないわよ。順位だって落ちてないし。ただ……」
「ただ？」

身体を小刻みに震えさせる流華ちゃん。え、なに？

「舞に教えてあげられなかったのオオオ！」

……なるほど。相変わらず舞ちゃん至上主義だ。

「私は別によかったのよ！？でも風邪が移っちゃ大変じゃない！私のせいで舞が病気になったら私、私……！」

（…風邪ぐらいで大袈裟な）

その溺愛ぶりには最早呆れを通りこして、感心してしまう。

「だいたい藤森も藤森よ！なんで代わりに教えてあげなかったの！？」

え、まさかの濡衣？仕方ないじゃんか。そんな余裕も時間もなかったし。

それに

「流華ちゃんはいいの？僕が、舞ちゃんに勉強教えても」

そう言うと、流華ちゃんは意味が分からないとでも言いたげに、怪訝な顔をした。

僕は少しだけ顔を近付けて言う。

「ぼくらが二人きりになっても、流華ちゃんは気にしないの……？」
「ッ！」

彼女が息を飲むのが分かった。普段クールな子ほど、こういう表情が新鮮。

「い、やよ」

「へえ」

「そんなの嫌。い、いくら藤森でも舞は渡せない！」

「……………え？」

「舞の隣は私なの。舞に勉強教えるのも私。舞を1番愛してるのも私。舞のためなら何でもできる！」

…ああ、そういうこと。僕に嫉妬したと。今の嫌はそっちの意味ね。別に悲しくないから。ちょっと予想してたから。や、ホント悲しくないってば。

「……………流華ちゃん鈍い」

「は？なんのことよ」

青海と翔の場合

昼休みの屋上。本来立ち入り禁止だが、何故か俺は青海と肩並べている。

「…………俺、あいつに負けた」

あいつ。

たぶん舞のことだろう。確かに国語のテスト、舞のほうが高かったな。

「お前国語は苦手だもんな。でも満点いくつかあったろ？」

「……数学と理科はな」

「お前モロ理系だな」

そう言いながら、俺はポケットから煙草とライターを出す。

青海が嫌悪感たつぷりの顔してるけど、気にしない気にしない。火をつけてくわえる。紫煙が吐きだされた。

「煙」

抑揚のない声。俺は隣に視線だけ移す。

「述語は？」

口許に淡い笑みを浮かべてそう尋ねれば、青海は小さく舌打ちした。かと思うと踵を返して。遠ざかる背中に呼びかけると、彼は

「ストレス解消」

と、またもや単語だけで答える。標的は大方、舞か幸希だろうな。

「述語がないっつーの」

呟いた言葉は、扉の閉まる音にかき消された。

第58回戦 赤点バツチコイ（後書き）

テスト終了です。鈴はコネで補習免れました（笑）

第59回戦 頭髮検査

朝、登校するとめずらしいことに鈴が来ていた。あの遅刻魔が、どういう風の吹き回しだろう？

「おはよう鈴。なんでいるの？」

「お、舞。俺だってたまには早起するっつーの」

ニツと口角をあげる鈴。金のピアスが髪の毛の狭間で光る。

「めずらしいねー。…と、翔兄来たや」

第59話 シャルマンな君の姿に乾杯

「あー、なんか今日、頭髮検査するらしい」

他人事のように言いながら、翔兄は自分の髪をガシガシと掻く。教室はもちろんブーイングの嵐だ。教

まあ、この学校規則緩いから、みんな結構いじってるもんね。

「はいはい、文句言うなら教頭に言ってね。俺だって面倒くさいんだから」

どうやら、本当にやるらしい。翔兄がわたし達を一行に並ばせる。わたしはもちろん、すかさず1番前をとった。

「えっと、舞はちょっと茶色い気がしないでもないけど、セーフだろ」

対して見もせず、シッシツと手で追い払う翔兄。失礼だなコノ！

わたしは染めてないけど、もっとなんかコメントくれたっていいじゃない！

「流華」

「私は何もしてないわよ」

流華は腕を組み、翔兄を見据えた。流華はサラサラストレートだもんね。綺麗な黒髪で憧れる。

「お前、髪長すぎ。切れ」

「い、嫌よ。私はロング派なんだから。短くするくらいなら登校拒否するわ」

「なんでそんなに嫌なんだよ」

「だって……」

ほんのり流華の頬が桜色に色付く。うわ、可愛い。

「舞が似合うつて言うから……」

「はい次」

シカトする翔兄。容赦ない。

「絵里菜、お前パーマかけてるだろ。中学生が色気づくな。はいアウト」

「ええっ、このくらい見逃してよ!」

「なんか面白い言い訳したらセーフにしてやる」

そんなんでいいんだ!?

絵里菜は頬をかきながら、考えてる様子だ。

「えっと、その、爆発テロに巻きこまれて」

「テロ舐めるな。はいアウト」

「うわーん!」

絵里菜、撃沈。

よくやったよ君は……。っていつか、どんな言い訳なら翔兄は納得したんだ？

「青海、お前黒髪というより紺じゃね？っていつか、紺じゃね？」

「気のせいだ」

「そうかねー。ま、いいや。目立たないし」

「気のせいだっつてんだろ」

「はいはい」

青海は軽く舌打ちしたが、ポーカーフェイスは崩さない。

青海って、翔兄には口調悪いよね。他の教師にはそんなことないけど。

「修也、茶色い」

「地毛」

「いや、まばらだし」

「地毛」

「いや、根本黒いし」

「地毛」

「認める。それはアウトだ」

「チツ」

「舌打ちした？いま舌打ちした？」

「したよな？とつつかかる翔兄を、修也はうるさいとひと蹴りして振り払った。」

「幸希、お前頭明るくね？」

「なんかバカみたいに聞こえるんですけど」

「明るいつて。頭明るいつて」

「いや、本当にやめて下さい。バカみたいに聞こえるんで」

「頭のなかまで明るいよ。むしろヘタレだよ」

「ヘタレ関係なくない！？」

幸希をからかっている翔兄。無表情だけど分かる。ものすごい楽しそうだ。

でも、何人かに慰められている様子がまた、幸希っていうか、ヘタレって感じ。

その後も何人がチェックされていた。言い分は全て一刀両断である。そして、最後の一人は彼。

(…… 1番ヤバイよね)

わたしは高みの見物　　じゃなくて、見守ることにした。

最後の一人とは、そう。

「鈴、その髪はないだろ」

赤髪ヤンキー、北林鈴だ。

「地毛だ」

「赤い髪が地毛って何人だよ。火星人か？火星人なのか？」

「じゃあ突然変異」

「じゃあじゃねえよ。もっとマシな言い訳しろ」

「いや、本当マジで。突然変異なんだよ。少年漫画的な」

「世の中そんなファンタジックにできてないんだよ」

面倒くさそうに頭を掻く鈴。でも鈴が黒髪になったら嫌だな。

……いや、それはそれで興味がある。見てみたいかも。

「つつーかさ、これチェックしてどうすんの？ なに、アウトだった奴はみんなどうにかしろってか？」

眉をひそめながら、鈴はヤンキー口調で翔兄に尋ねる。

いや、普通に考えてそうでしょ。じゃなきゃ、こんな頭髪検査する意味ないって。

しかしわたしのそんな考えを翔兄は見事に崩した。

「いや、別に」

……は？

「別に、って何もしないのかよ!？」

「え、したほうがいいの？」

「そ、そういう意味じゃねえけど……、じゃあなんのためにこれやってるんだ!？」

「やれって言われたから」

「「ええええええ!？」」「」

クラスの皆の声がひとつになった瞬間だった。

第59回戦 頭髪検査（後書き）

翔はこういう人です。こんな教師はきつといない。

番外編 小話シリーズ2（前書き）

再び小話です！

番外編 小話シリーズ2

Top or Under?

舞+青海+幸希

『ちょ、普通に考えてあたしが上でしょ!?!』

「は?なんで俺が下なんだよ。そっちの方が有り得ないだろ」

『だってだって……って、ギャアアア!わたし下はマジで無理!』

「知るかよ」

『あ、あ、ダメだって…。ああああ!?!』

「……………なにしてるの君達」

「「ジエンガ」」

点数

舞＋複数男子

「葉月は百点ちかいだろ」

「同感。矢野は70くらいか？」

「あいつ固いんだよな」

『なんの話してるの？あたしも混ぜろ！』

「あ、舞。いま女子に点数つけてたんだ。お前の親友は百点ちかいぞ」

『流華はちかいじゃなくて満点だよ』

「へいへい。相変わらず仲良いな」

『まあね。あ、ねえ、じゃあさ、わたしは何点？』

「」「5点」「」

『どづいつことだコノヤロー』

Girls Love

青海＋流華

「舞を想う同志として」

「同志じゃねえよ」

「聞いてもらいたいことがあるの」

「へえ？」

「舞を想うと眠れない。目の前にいるだけで抱きしめたくなくなる。すべてを欲しいと望んでしまう。ねえ、やっぱりこれって」

「病気だろ」

天然？

花形＋青海＋幸希

「ねえ青海、ピロートクってなに？」

「……………は？」

「ピローって枕って意味だね。枕詞的なものかな。青海知ってる

「？」

「……いや、寝たまま話するといつか」

「寝たまま？キャンプとかの眠れない夜にする話のこと？」

「それもあるけど、一般に男女が「青海、ここは全年齢対象だよ」

ノロケ

流華＋翔

「はぁ……」

「なにため息ついてるんですか？」

「いや、彼女と喧嘩したんだよね。いや、そりゃあ俺も大人げなかったと思うよ？だけど愛がなかなか引かないからさ」

「……喧嘩の原因はなんなんですか？」

「どっちが深く愛してるか」

「死ねばいいのに」

「ちょ、簡単に死ねとか言うなよ」

「そうですね、言い直します。……滅びねばいいのに」

「いやいやいや」

おわり

第60回戦 学級委員とヤンキーくん（前書き）

新キャラ視点

第60回戦 学級委員とヤンキーくん

赤い髪、指定外のネクタイ、光るピアス、3つも開けたシャツのボタン。

本当に信じられない！

第60話 悪Ⅱかつこいいは勘違いだと気付いて

私、矢野梨華^{やのりか}子はD組の学級委員だ。

D組はただでさえ一般クラスだから他クラスより乱れているのに、それに拍車をかけている人がいる。

私は学級委員として、それを正さねばならない。翔先生は駄目。あれは最早、教師じゃない。

だから、私は

「鈴くん、規則に反した格好はやめて下さい！」

机に座っていた彼は、私の声に振り向いた。隣の舞ちゃんも、好奇心いっぱい表情で私を見る。

この二人は仲が良いから、よく一緒にいる。男女でここまで仲良しなのはめずらしい。幼馴染みというわけでもないのに。

『どうしたのさ。鈴なんかやったの？』

「はあ？俺、今日はまだ何もしていないぞ」

……この二人は、私の話を聞いていなかったのだろうか。

さつき私は、規則に反した格好はやめてと言ったはずだ。別に鈴くんがなにか事件を起こしたとは言っていない。

怒鳴りたい衝動に襲われたが、私は下唇を噛んでなんとか抑えた。

こういう場合、怒るのは逆効果だ。相手も気分を害して、こちらに耳を傾けなくなる。

私はひとつ咳払いをして、彼等の前に立ち口を開いた。

「鈴くん、指定のネクタイはどうしましたか？それと、染髪は禁止されています」

「固いこと言っなよ」

私の忠告は一蹴りにされる。舞ちゃんはニヤニヤしてるだけで、どちらをかばうわけでもない。

舞ちゃんは、なんだかんだで規則をそんなにやぶっていないと思う。
やや茶色の髪は地毛であることが分かるし、制服も派手に着崩して
いない。

真面目かと聞かれれば、答えは否なんだろうけど。

「いくら何でも、赤はないでしょう赤は！」

「あー…。そうだな、飽きてきたし、今度はオレンジにでもしよう
かな」

『紫にしてよ鈴。紫の髪の鈴……ププッ』

「そついう問題じゃない！」

この二人は私の話を聞く気があるの！？

……駄目だ、落ち着くのよ私。ここで熱くなったら負け。

私は冷静さを取り戻すため、息を吐き出した。

「……じゃあ鈴くん。まずはシャツのボタンを閉めて。ネクタイも
明日からは指定のをしてくること」

そう言つと、彼は『えー』と不満げな声を漏らす。

『えー』じゃない、『えー』じゃ！

「とにかく、ボタンして、ズボンももつと上げて」

「うわ、やめろって!」

『ちよつと委員長く、教室内でイチャつくのは大胆だよ』

「舞ちゃんは黙ってて!」

それと私、学級委員だけど委員長ではないから!

いつも言ってるのに、彼女はいつまで経っても、私を委員長と呼ぶ。

最近では間違いを訂正するのが面倒になってきた。わざとではないか、とも疑ってしまう。

「別にいいだろ、このくらい」

ボタンを閉めさせようとする私を、鬱陶しそうに手で払う鈴くん。

「良くないの!」

「真面目だなあ、お前」

「……真面目なのがいけないこと?」

「別に。ただ、もう少し肩の力抜いた方がいいと思うぜ?」

そう言って彼は、私のふたつに結んだ三つ編みに触れ、縛っているゴムをとった。ハラリと舞う、全体の半分の髪。

編んでいたからか、軽くウェーブがかかっているのが視界の端に見えた。

『あ、委員長かわいいー。下ろしている方がいいじゃん』

「ちょ、ちよつと舞ちゃん！」

『こつちもほどこいちゃえ』

舞ちゃんはその言葉通り、もう片方の三つ編みもほどこいた。ああもう、いいって言っていないのに！

「悪いけど、俺はこのスタンス変える気ねえから。お前も、真面目なのは勝手だけど少しくらい洒落ついたって文句は言われねえよ？」

それは、私の主義に反することになる。だけど、

「……お前じゃなくて、梨華子。矢野梨華子」

「ん？ああ、そんな名前だったな」

笑った鈴くんの顔が、とても眩しくみえた。

不本意だけどね！

第60回戦 学級委員とヤンキーくん（後書き）

キャラクターファイル

・矢野梨華子^{やのりかし}

年齢：14歳

身長：158cm

体重：43kg

見た目：とにかく地味

嫌い：ルール違反

趣味：読書

D組の学級委員。とても真面目で規則をどこまでも守る、生徒の鏡。

第61回戦 風邪っぴき少女

「今日の欠席は舞ひとりな」

朝の出席確認時、翔が抑揚のない声で言った。

第62話 風邪ひいたら誰かにうつして治せ

「なあ青海、今日の放課後お前ひま？」

今日一日の授業が終わり、クラスの皆が帰り支度をしていたとき、鈴が話しかけてきた。

ひま？つて、お前俺が部活入ってること知ってるだろうが。

だけど俺はあえてすぐに返事はせず、質問に質問で返した。

「……なんで？」

と。それに鈴は、俺の机に座り身振り手振りで答える。

「ほら、舞が風邪ひいただろ？だから見舞い行こうと思ってさ」

「一人で行けばいいだろ。それから、俺の机に乗るな」

「いいじゃん。舞が風邪なんてめずらしいから心配だし」

「俺は心配じゃねえ」

っていうか、こいつ人の話聞いてないな。俺は乗るなって言ったのに、更に身を乗り出しやがった。

鈴はしばらく『えー』とか『むー』とか意味不明な声を漏らしていたが、机からおりて

「じゃあいいや。俺ひとりで行こう」

と言った。

……ひとりで？鈴が？風邪ひいたあの女の家には？

……。

「幸希、俺今日部活休むから」

俺は幸希の返事は聞かずに、きょとんとした表情の鈴を連れて教室を出た。

「って、ちょっと青海！理由もなしに休んじゃ駄目だって！」

「青海、幸希がなんか言ってるぞ」

「無視しとけ」

教室から出た後も幸希の声が聞こえたけど、俺は気にしないことにした。だって幸希だし。

鈴に案内され着いた舞の家は、住宅街にあるごく普通のものだった。迷うことなく此处に来たってことは、鈴は頻繁に訪れているのだろうか。

(……別に、どうでもいい)

鈴が門の横にあるチャイムを押そうと手を伸ばす。その時

「うちに何か用ですか？」

丁寧な言葉使いに似合わないボーイソプラノが。振り向くと、そこにはランドセルを背負った小学生が立っていた。

星宵学院の制服を着てるから、初等部の子だろう。心なしか、誰かに似てる気がする。

その少年に鈴も気付いたのか、『あ』と声を漏らした。続くように、

小学生も『あ』とこぼす。

「よお、瑠璃」

「こんにちは、鈴くん。姉さんに用ですか？」

………今、コイツから有り得ない単語が聞こえた。『姉さん』？

いやいや、違うよな。アイツのことなわけがない。この小学生はこの家の子供じゃないんだきつと。

しかしそんな俺の考えは、少年の行動によって木っ端微塵に碎かれた。

「じゃあ中へどうぞ。と言っても、姉さん寝てると思いますけど」

そう言っつて、少年は俺達を招くように門を押し開ける。

……マジかよ。

これが、あのバカ女の弟？どんな遺伝子だ。中身が違いすぎるじゃねえか。

「えっと、そちらは……」

玄関に入り、靴を脱いでるときに舞の弟（やっぱり信じられない）が俺を見て遠慮がちに首を傾げる。

「……高梨青海、舞のクラスメイトだ。よろしくな。君の名前は？」

笑顔を張り付けて言えば、隣で鈴が『だれ?』とか言ったけど、無視だ無視。他人には笑顔みせておけば、損はしないんだから。

少年は一瞬だけ怪訝な表情をしたが、すぐにニコリと人なつっこい笑みを見せた。

「僕は浅野瑠璃、初等部6年生です。いつも姉がお世話になってます」

とつても。出かけた言葉を飲み込む。

それにしても、小学生とは思えない態度だ。姉より数倍いい。

(でも、)

さっきの表情はやけに食えなかった。それに舞なんかよりずっと礼儀正しいのに、なんだか気に入らない。

(同族嫌悪……か?)

この姉弟、顔は似てるけど、かなり性格が違うようだな。

舞の部屋に案内してくれるのだろう、階段をのぼる俺達。

「以前掃除したので、まだ綺麗なはずですよ」

「舞は相変わらず自分の部屋掃除しねえのか。瑠璃も大変だなー。わざわざ姉の部屋掃除するとか、考えられねえ」

「もう慣れましたよ。それに姉さんの部屋、放っておくとゴミ屋敷になるんです」

苦笑しながらそう言い、瑠璃という少年は二階の廊下の突き当たりの部屋をノックした。

その扉には、【MAI】というプレートがかかっている。似合わないことに、ピンクだ。

「姉さん、友達来たよ。開けていい？」

中からは、肯定とも否定ともとれない声が返ってきた。

しかし彼は肯定と受け取ったのか、躊躇なくドアを開ける。

「おー、鈴じゃん。それと……………青海？」

ベッドで寝ている舞は俺の姿を確認すると、目を大きく見開いた。

なんだよそのリアクション。俺が来たらそんなに变か。……………变だな。

「じゃあ、ばく戻るね」

瑠璃はそう言って、部屋から出ていった。

「舞大丈夫かー？でもよかったな、これでバカじゃないって証明できたぞ」

「何言ってるんだよ鈴。証明できたのは、バカは風邪ひかないって

「というのが嘘ってことだろ」

「どういう意味だコノヤロー！」

叫ぶ舞はいつも通りで、病人とは思えない元気さだ。仮病じゃないか？

鈴も同じことを思ったのか、

「思ったより元気そうだな」

と言った。

舞はわざとらしく咳払いをし、上体を起こす。

「ま、咳がひどいだけで、熱とかないし。朝食とらなかっただけで、瑠璃とお母さんが休め休めってうるさいんだもん」

確かにコイツが食欲ないのは一大事だ。こう見えて、意外とへばってるのかもしれない。

「本当に平気か舞ー？」

鈴は危機感のない声で言い、舞の額に自分の手の平をあてがった。舞はそれにそつと瞼を伏せる。

……無防備すぎじゃないか？そりゃ、コイツ等がどうかなるなんて天文学的数字の確率で有り得ないけど。

「あー、熱はあんまねえな」

「……ん」

ダメだ、いちゃついてるようにしか見えない。

俺は今更になって、鈴について来たのを後悔した。だってそうだろう？

（こんなの、拷問だ）

一度視線をそらし、再び舞を見る。服はジャージという色気皆無なのに。

うるんだ目とか、上気した頬とか。何より、簡単に触らせるところが一番耐えがたい。

しばらく凝視していると、視線に気付いたのか、舞は此方に振り返った。

目が、合う。

舞はベツと舌を出し、すぐにそっぽを向いた。

「……………」

ム力ついたので、俺は先ほどまで鈴の手があった箇所デコピンを食らわせた。

舞は悲鳴を響かせ、鈴は爆笑してた。

決めた。コイツの見舞いなんて、金輪際一生行かない。

第62回戦 休日デート〈前編〉

きりーっ、れい…

気の抜けた号令。

ろくに礼もせず、クラスのみんなは鞆をひっ掴んでバタバタと教室から出ていく。

『あー、やっと今週終わった。帰る帰る』

わたしも同じように、帰ろうと鞆を手を持った。明日休みだと思つと、胸が踊る。

「舞」

腕を掴まれた。

振り向くと、青海の姿が。相変わらず何を考えてるか分からない表情。

ポーカーフェイスだか何だか知らないけど、その無表情はつくりものみたいで気持ち悪い。

『なにさ』

腕を払いながら聞く。あ、ちょっとだけ眉間にしわが寄った。

「明日、クイーン・リアの南入り口に1時集合」

『……は？』

「遅れるなよ」

わたしの返事を聞かずに、言いたいことだけ言っ
て青海は教室から出ていく。

クイーン・リア

最近できた、大型デパートのことだ。食品から家具、
雑貨や服屋まで入っている。

（っっていうか、は？）

え、ちょ、わたしの意見は聞かないの？

『い、行かないからな！あたしにだって予定あるし！
第一なんで休日にまでアンタの顔を見なきゃいけないんだ！』

わたしは振り返らない背中に叫ぶ。

『絶対行かないからな！』

第60話 男なら5分前じゃなくて2時間前行動を心掛ける

『結局来てるし……』

盛大なため息をついた。

行かないとあんなにも叫んだのに、律儀に待ち合わせ場所に立っている自分が悲しい。

しかも呼んだ張本人がまだ来てないって、どういうことだ。病み上がりだぞわたし。

（も、もしかしてハメられたんじゃない……）

あの腹黒ドＳのことだ、充分有り得る。むしろ、そっちの方が真実な気がしてきた。

わたしはポケットから携帯電話を取り出し、メールが来てないか確認する。

残念ながら、着信もなければメールフォルダも変化なし。

『ったくアイツ男のくせにあたしを待たせるとは……。チクショー、30分遅刻してやる気でいたのに』

「オイ」

『いやちゃんと来たのはクイーン・リアが久しぶりだったからはいいでたとかじゃないから。楽しみにしてたからとかじゃないから』

「聞けよ」

『うるさいな！　ちよつと黙ってて！』

「ふざけんな」

『えっ、つて痛アアア！！』

殴られた！頭思いきり殴られたよ！

涙が糸をひきつつも、後ろを振り返った。そこにはわたしを殴った張本人、ドS魔王の姿が。

『なにすんだ青海！つてか、呼び出たくせに遅れやがつて。礼儀がなっていない！』

「お前が無視するのが悪い。それと俺は遅刻してねえ。ジャスト1時だろ」

そう言つて青海は腕にはめた時計を見せてきた。長針は12を、短針は1を示している。

……マジでか。わたしなに先に来ちゃってんだ。ちよつと恥ずかしいじゃん。

いやいや、違うぞ。これはあの……そう、家の時計が狂つてたんだ。うん、たぶんきつと、いや絶対。

「おい、舞」

『だから狂ってたっつてんだろ!!』

「なにがだよ。ほら、行くぞ」

『わ、ちょっと待ってよ』

さっさとエレベーターに向かう青海を、追いかけた。

第62回戦 休日デートへ前編 (後書き)

次回に続きます。ラブな展開の予感V

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0670b/>

青春ゲーム

2010年10月9日19時21分発行